第2章　立地と分布状況

埋積平地の一角に西から東へ大きく張り出した東高月丘陵群が，今次山陽住宅団地開発事業地となった。この丘陵群のほぼ中央にあり標高92mと最高位を占める用木山は，なだらかな亀甲状の丘陵頂を形成して，埋積平地に向けて尾根支脈を分出しながら広がっている。本土壙墓群はこの用木山から東と南へ分出する丘陵尾根支脈上に散在している。

用木山から東へ緩やかに下降する尾根支脈は，標高約58m付近で鞍部となり再び隆起して，その東に標高67mの愛宕山を形成して埋積平地に臨み，用木山から南へ分出する尾根支脈は，標高71m付近で鞍部をつくると同時に尾根走向を東に振って標高78mのさくら山となり，そこからは愛宕山尾根支脈とほぼ平行して，東へ緩やかに下降しながら埋積地におよんでいる。したがってこの2つの尾根支脈は，石井谷を馬蹄形に囲む形状を呈している。

当該地は，今次開発事業が計画されるまでは，丘陵裾部の一部果樹園を除いては松林であった。丘陵全体が風化の進んだ花崗岩媒乱土で形成されているうえに，後世の採石工事や植林のための砂防段が設けられる等して，原地形は大きく変動されているが，この東西約400m，南北約300mの範囲内には多種多様の遺跡が高い密度で複合立地している。

愛宕山地区には，丘陵頂部に約300基の土壙墓で構成される弥生時代の愛宕山土壙墓遺跡[5]と，愛宕山古墳群9基が一部複合して立地し，その東から南斜面一帯には弥生時代集落址・愛宕山遺跡と用木山寄りの鞍部に近い南斜面に岩田第14号墳が営なまれている。用木山地区は，丘陵頂部に用木第1・2号墳が立地し，尾根部から東南斜面一帯にかけて，階段状に宅地造成を施した集落址・用木山遺跡と，岩田第9号墳～第13号墳が複合立地する。またさくら山地区では，丘陵上一帯に集落址・さくら山遺跡が広がるが，丘陵頂にさくら山方形台状墓2基と，東へ下降する尾根上に岩田第1号墳が築造されている。本土壙墓群もこうした遺跡群の中に複合して，約20基が散在するのである。本土壙墓群は上記のように，弥生時代集落址や土壙墓と複合していることもあって，せっかく墓壙を検出しても伴出遺物をともなわないため，時代的な判別の困難なものもかなりある。したがって今回は伴出遺物等によって，埋葬時期が古墳時代後期以降と確認できるものに限って，その概要を記すこととする。

用木山丘陵頂に近い南斜面肩部に，等高線に沿って第1土壙墓から第3土壙墓（Z1～Z3）の3基が所在する。かって用木第1号墳の発掘調査の際，墳端外方で2土壙墓が検出され，伴出遺物をともなわないため埋葬時期が不明であったが，本土壙墓と距離的にも約20mと近く，本来は同種の土壙墓の可能性がある。用木山南斜面の石井谷の谷頭に近い標高63m付近には，第4土壙墓（Z4）と第5土壙墓（Z5）が約90mの距離をもって点在する。また用木山から愛宕山にいたる尾根支脈の鞍部に近い緩斜面に，第6土壙墓（Z6）から第10土壙墓（Z10）の5基が群在している。

さくら山では，丘陵頂から少し東へ降った標高約65mの尾根上に，弥生時代住居址の平坦部を利用して，第11土壙墓（Z11）等3基と，その南斜面に第13土壙墓（Z13）1基が検出されたが，先に報告した岩田第1号墳周辺の，須恵器壺棺および周湟内土壙墓も，あるいはこうした土壙墓と一連のものかも知れない。

表75　岩田土壙墓群土壙一覧

（単位cm）

地区	土壙番号	平面プラン	立地	主軸方位		現存掘り方上面		床面		現存部の深さ		伴出遺物	備考
				等高線に	方位	長さ	巾	長さ	巾	現地表から	掘り込み深		
用木山	1	長楕円形	丘陵斜面	平行	N31°E	166	57	157	47	35	17	坏蓋1	
	2	不定形	丘陵斜面	平行	N47°E	107	54	100	38	60	53	なし	2段掘り方
	3	長楕円形	丘陵斜面	平行	N33°E	184	66	163	34	88	37	なし	
	4	楕円形	丘陵斜面	直行	N6°E	152	73	136	46	46	27	坏2対，直口坩1	
	5	長楕円形	丘陵斜面	直行	N61°W	187	61	180	57	35	17	土師器杯1	
	6	長楕円形	尾根稜線	直行	N68°W	149	48	137	44	34	15	坏1対	
	7	流失か？	尾根稜線	直行	—	？	？	？	？	？	？	土師器坏2	
	8	長楕円形	尾根稜線	直行	N78°E	80	34	74	28	27	19	なし	
	9	不定形	尾根稜線	平行	N1°W	157	55	147	40	25	14	なし	
	10	流失か？	尾根肩部	平行	—	？	？	？	？	？	？	坏3対	
	(1)	円形？	尾根肩部	—	—	？	？	？	？	20	？	蔵骨器	奈良時代
さくら山	11	長方形	尾根稜線	直行	N82°W	(200)	160	(175)	136	82	66	坏1対	横穴式石室か？
	12	隅丸長方形	尾根稜線	平行	N32°W	270	74	250	56	35	16	なし	
	12′	隅丸長方形	尾根稜線	直行	N55°E	(100)	112	(72)	87	36	15	有蓋短頸坩1	
	13	長楕円形	斜面中腹	平行	N71°E	210	50	197	42	35	20	坏蓋4	
愛宕山	14	隅丸長方形	尾根肩部	平行	N69°E	222	86	197	57	60	44	鉄剣1 白磁碗1，灯明皿1	平安時代
	15	楕円形	尾根稜線	平行	？	？	？	？	？	？	？	合せ口土器棺	
	16	隅丸長方形	尾根肩部	平行	N	(157)	77	(151)	63	37	22	平瓶1	
	17	隅丸長方形	尾根肩部	直行	N50°E	200	68	190	60	60	10	八稜鏡1，壺1，坏1	平安時代

（　）内数字は現存部長を示す

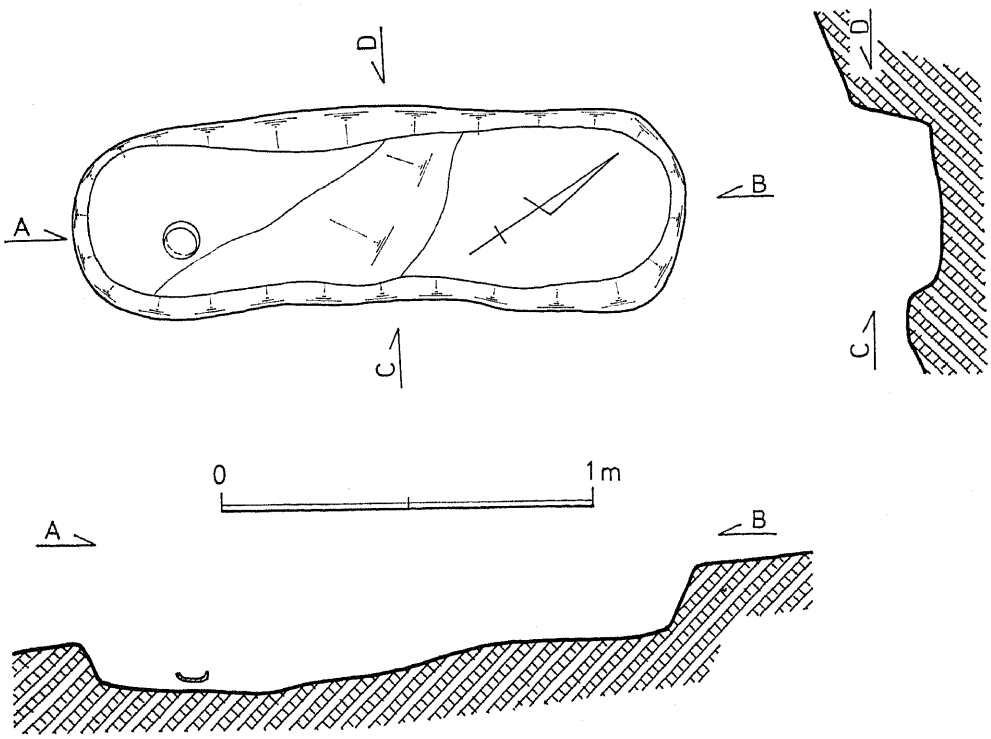
愛宕山では，丘陵頂に所在する愛宕山第２号墳（Ｄ２）の周湟部に第15土壙墓（Ｚ15）と，第16土壙墓（Ｚ16）の２基が所在する。そのほか愛宕山から西方の用木山に向けて延びる尾根上に，白磁碗等を伴出する第14土壙墓（Ｚ14）と，北方に向けて下降する尾根上に八稜鏡等を伴出する第17土壙墓（Ｚ17），また愛宕山第２号墳の南東部にあたる，緩傾斜の尾根上一帯に，すでに破砕遊離しているが鎌倉時代の蔵骨器と推察される，古備前甕がかなり散在しているのが発見され注目された。

第3章　各遺構の概要

各土壙墓の立地ならびに分布状況については第129図，墓壙の形状および計測値等については表75に示したので，ここでは各土壙墓の概況について述べることとする。

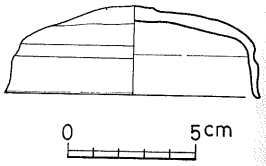
1.　第１土壙墓（図130，131・図版80）

用木山の丘陵頂部は巾約20m，長さ約80mの亀甲形の平坦部を形成し，その東端部に用木第１号墳（Ａ１）が立地しているが，第１土壙墓（Ｚ１）は，用木第１号墳を分岐点として東方へ下降しながらのびる，丘陵尾根支脈上の標高約85mの緩斜面に所在する。周辺には本土壙墓の南東約11mに第２土壙墓（Ｚ２）と，同南約13mに第３土壙墓（Ｚ３）が検出され，この３基で一単位群を形成しているようである。いずれも丘陵斜面の地山層に直接掘り込まれた，素掘りの土壙墓である。



第130図　岩田第１土壙墓実測図

第１土壙墓は尾根稜線から少し南側に寄った肩部に所在する。等高線にやや斜行したN31°Eに長軸中心線をおいた，平面形が長楕円形の土壙墓である。現地表下約35㎝に墓壙底面を検出したが，弥生時代竪穴式住居址と複合しているうえに，丘陵表土層の風化と流土が進んでいるためその掘り込みの遺存は浅くなり全容は明らかでない。現況での墓壙の掘り込みが確認できる現存地山生き土上面で，長さ166㎝，平均巾57㎝，床面長157㎝，同巾47㎝，掘り込みの深さは地形の高い側の北壁で21㎝，最も浅い南西小口部で10㎝を測る。床面はほぼ平面を保つが地形の低い南西に下傾し，両小口での比高14㎝を測る。床面の南小口から約25㎝に須恵器坏蓋１個がふせた形状で検出された他は，小口溝や枕石または赤色顔料等は何も認められなかった。

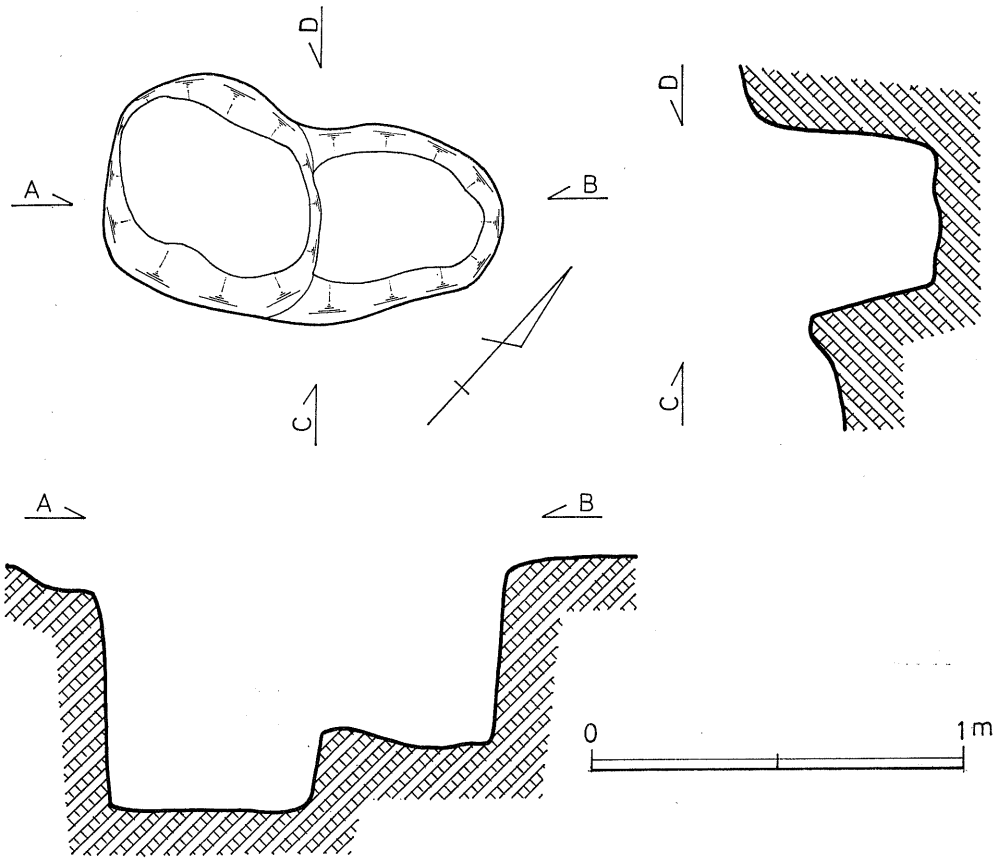


第131図　第１土壙墓出土土器

坏は口径10㎝，器高3.5㎝の均整のとれた小形完形品である。側面外表に巾0.5㎝の凹線１条を繞らせ，口縁部をやや外反させたつくりで，短頸坩の蓋と思われる。胎土に細砂を含み焼成は良好で淡青灰色を呈する。整形仕あげは内外面とも横なで調整が施されている。

2.　第２土壙墓（図132・図版81）

第１土壙墓の南東約11ｍ，標高82ｍの丘陵斜面に，等高線の走向に沿って長径をおいて所在す

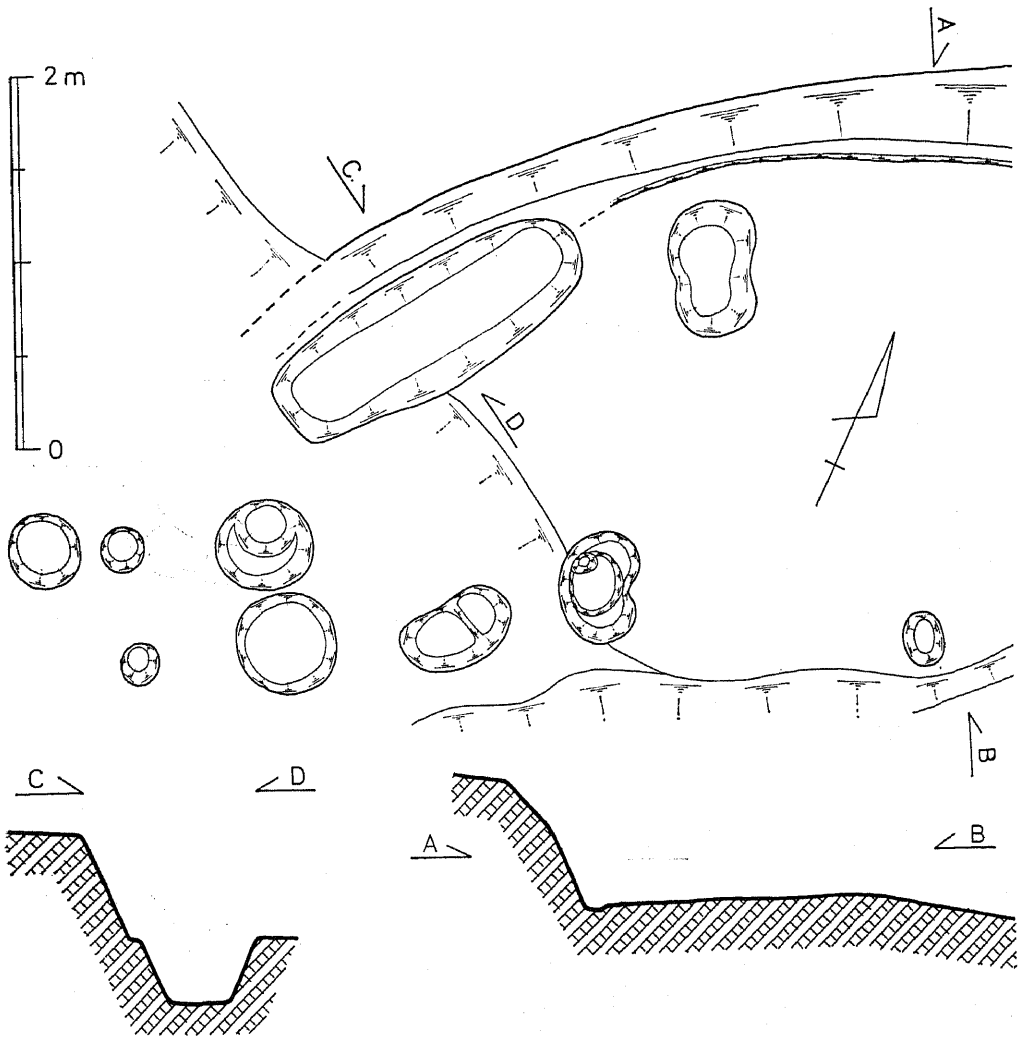


第132図　岩田第２土壙墓実測図

る。やや不定形な楕円形プランで，円形ピットが2つ連続した形状を示し，床面も段差を有することと，伴出遺物をともなわないため，あるいは墓壙ではなくてその他の遺構の可能性もある。掘り込みの確認できる現存地山生き土上面での長さ107㎝，同巾54㎝，深さは床面の低い部分で57㎝，浅い部分で50㎝を測るが，地形が傾斜していて高さが一定でないため，床面の段差は23㎝とかなり大きい。

3. 第3土壙墓（図133）

第1土壙墓の南約13m，第2土壙墓の西方約14.5m，標高82mの丘陵斜面テラス部に，等高線の走向に沿って掘られた土壙墓である。用木山遺跡第2地点の竪穴式住居址の掘り込み壁面と切り合い，墓壙床面はその住居址床面よりも37㎝も深く掘り込まれているが，層序的な検討の結果，住居址を廃棄埋没した後に改めて埋葬されている。伴出遺物をともなわないため確実な埋葬年代は明ら



第133図　岩田第3土壙墓実測図

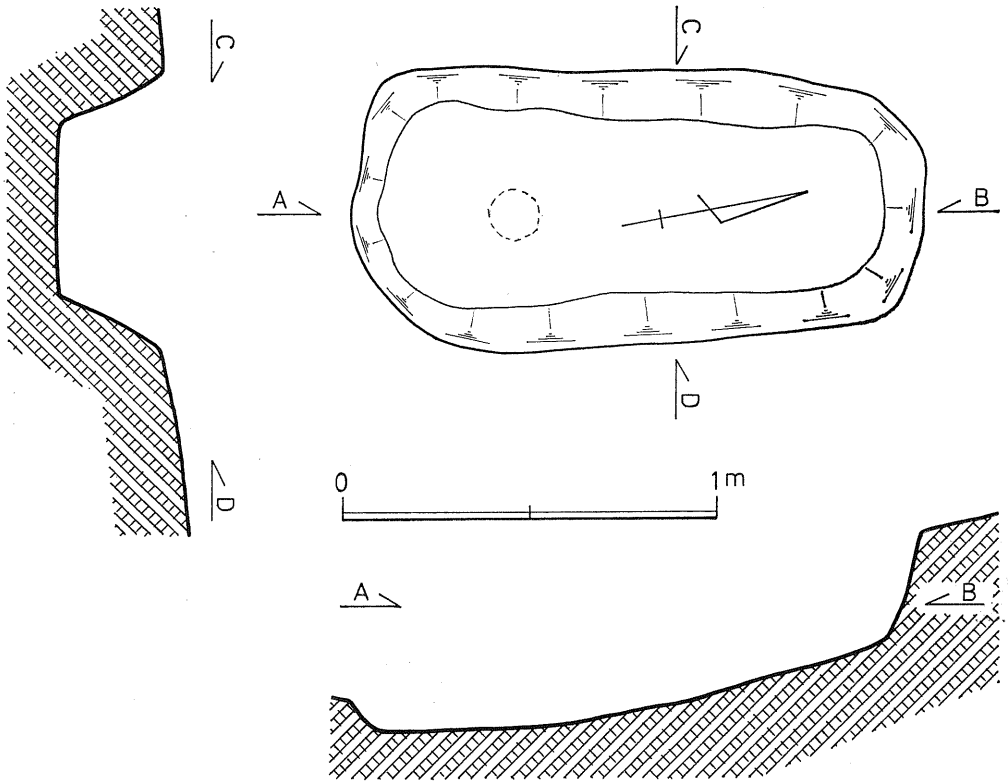
かでないが，立地および形状から古墳時代後期の所産と考えられ，本土壙墓群の一環として取り扱かった。竪穴式住居を建築するための整地面跡地を利用して，そのテラス状平坦地に本土壙墓が営なまれたものと推察される。

本土壙墓は素掘りの土壙墓である。掘り込みの確認できる現存地山生き土上面のプランは長楕円形を呈し，長さ 184㎝，同巾66㎝を測る。現地表下約88㎝に墓壙床面をおいているが，住居址床面からの深さは37㎝である。床面は隅丸長方形でほぼ水平面を保ち，長さ163㎝，同巾34㎝を測る。掘り込み壁面はいずれも断面形は上開きの台形状を呈し，比較的整然と掘られている。副葬遺物をはじめ枕石とか小口溝等の施設は何も認められなかった。

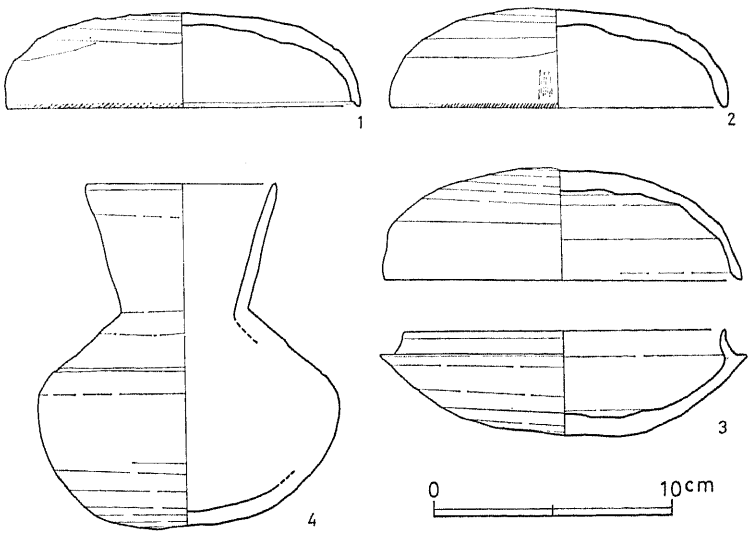
4. 第4土壙墓（図134，135・図版81）

用木丘陵頂に立地する用木第1号墳から東南東へ水平距離で約80m，比高約30m降った石井谷の谷頭に近い標高約63mの緩斜面に，単基所在する土壙墓（Z 4）である。用木山遺跡第2地点第9住居群の生活面を造成するために，丘陵肩部に大きく切り込んだ掘り込みの肩部に複合立地していて，一見弥生時代の墓壙かとも思われたが，発掘調査の結果墓壙床面に須恵器5点が供献されていることから，古墳時代後期の埋葬と確認できた。横穴式石室を内部主体とする岩田第9号墳～第13号墳とは近在し，特に第12号墳は本土壙墓の北東約10mに位置している。

本土壙墓は丘陵斜面の等高線に直行して，長軸中心線をN 6° Eにおいて掘り込まれた素掘り土



第134図　岩田第4土壙墓実測図



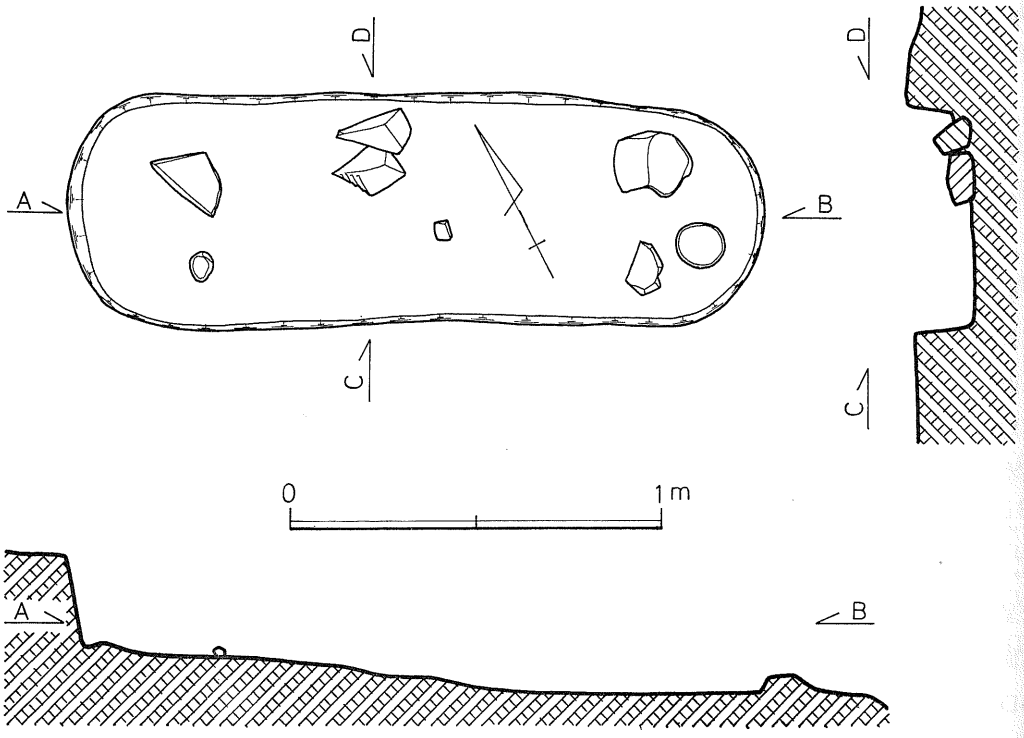
第135図　岩田第４土壙墓出土土器

壙墓である。傾斜面に位置していることもあって表土層はかなり流失しているが，現表土下約45cmに墓壙床面をおいている。掘り込みの確認できる現存地山生き土上面での長さ152cm，同巾73cm，床面長136cm，同巾46cm，平均の掘り込みの深さ27cmを測る。平面形は上端および床面とも隅丸長方形，掘り込み壁面は外傾を呈し，床面はほぼ平らな面を保つが，地形の低い南小口にかなり下傾している。両小口床面の比高は23cmを測る。床面南小口に須恵器直口坩１と，坏４の計５個を一括供献している他は，枕石や小口溝等の施設は何も認められない。

須恵器直口坩（図 135―４）は，やや焼歪みをみせるが，扁球形の器胴に外傾する直口頸がつく。胴部最大径12.15cm，器高13.85cm，口縁径 7.8cm，頸部径5.2cm，器胴高 8.7cm，頸部高5.15cmを測る。器胴肩部に１条の凹線を繞らせる他は無文である。焼成は良好で青灰色を呈するが，灰釉をかぶり黒斑と灰白色斑が部分的にみられる。胎土に２～３mm大までの砂礫をかなり含む。整形仕あげは器胴下半にへら削り痕を残すほかは，内外面とも横なで調整が施されている。

坏は(1)と(2)，(3)を上下にセットにしていたが，(1)と(2)はどちらも蓋である。(1)および(2)はほぼ同巧手法である。(1)は口径14.4cm，器高3.8cm，(2)は口径14.1cm，器高4.0cmを測り，いずれも器壁のやや厚いつくりである。共に焼成は良好で青灰色を呈するが，破損している(2)の断面は赤褐色である。胎土に２mm大までの砂礫をかなり含む。外表天部のへら削りのほかは内外面とも横なで調整である。いずれも口縁部がやや内湾していて最大径を体部にもつ。口縁端内側は，(1)は指先でつまんで段をもち，(2)は丸くおさめている。また口縁端外面に斜行刻文が繞らされているが(1)に対して(2)の方が密である。この口縁端刻文を有する坏は，当岩田古墳群第１・８・14号墳でも検出され，総社市こうもり塚，津山市川崎六つ塚第５号墳からも同形のものが出土している。

(3)は上下一対の完形品である。蓋の口径14.8cm，器高 4.6cm，身の口径13.4cm，受部径15.2cm，器高4.2cm，立ちあがり高1.0cmを測る。共に土圧によって破砕していたが，ほぼ完形に接合復元できた。焼成，色調，胎土，仕上げ調整等は前記(1)(2)とほぼ同巧である。蓋の体部外表に弱い稜をもち，口縁端内側をやや斜傾しておさめ，身の立ちあがりはそりをもって内傾し，高くないがシャープである。本土壙墓周辺に所在する岩田第９～13号墳よりも，やや先行する形態を示す。



第136図　岩田第5土壙墓実測図

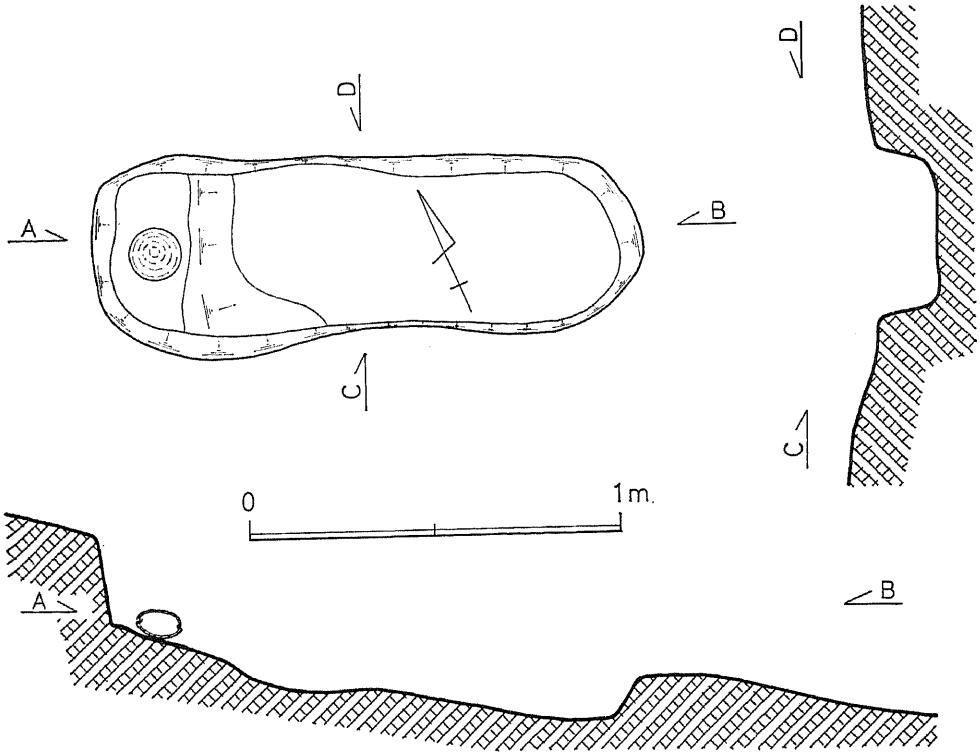
5.　第5土壙墓（図136・図版81）

第4土壙墓の南南西約60m，標高67m付近の石井谷谷頭に，用木山遺跡第2地点第11住居群竪穴住居址と切り合うようにして，単基で検出された。住居群の整地面跡の平坦地に，等高線の走向にほぼ直行して掘り込まれた素掘りの土壙墓である。集落址と複合立地しているため遺存状態もあまり良好でなく，掘り込みの形状は判別が困難であったが，現状で確認できる掘り込み上端および床面とも，平面形は小口部が外ふくらみの隅丸長方形を示す。床面はほぼ平らな面を保つが，地形の低い南東部にかなり下傾して，両小口の比高は13cmを測る。掘り込み上端がわかる現存地山生き土上面の長さ187cm，同巾61cm，床面の長さ180cm，同巾57cm，深さは地形の高い北西小口部24cm，地形の低い南東小口部4cm，平均15cm，長軸方位はN61°Wを測る。

床面南東小口部に土師器坏1が口縁部を上に向けて検出されたが，土圧によって破砕しているうえに，器表の磨耗が著しく接合復元が不能のため図示できない。調査時における計測で径14cm，器高約3.5cmを測ったことを付記するにとどめる。その他図示したように花崗岩石材数個を検出したが，墓壙内の棺台とか枕石に用いられたとするよりも，墓壙上に置かれたものが棺の腐朽等にともなって，陥没したものと思われる。その他の埋葬施設は何も検出されなかった。

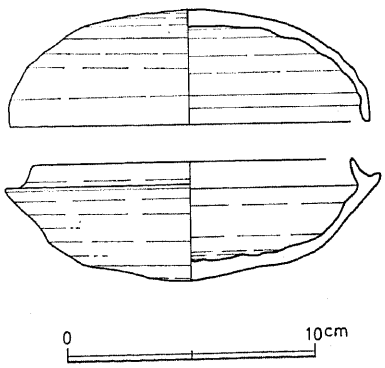
6.　第6土壙墓（図137，138・図版83）

用木山から東方の愛宕山にいたる丘陵尾根の，鞍部に近い標高60m周辺の稜線上緩斜面に，第6土壙墓（Z6）～第10土壙墓（Z10）の5基の土壙墓が近接して群在する。その分布範囲は約10m



第137図　岩田第6土壙墓実測図

×30mでいずれも用木山遺跡第3地点の，弥生時代竪穴式住居址と複合している。保存状態が不良で上記5基の他にも，須恵器坏等が遊離散見されることなどから，実際にはさらに幾つかの土壙墓が存在していた可能性がある。

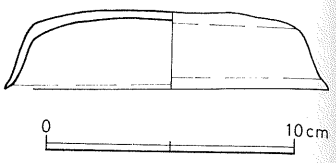


第138図　第6土壙墓出土土器

第6土壙墓は，用木山遺跡第3地点第28号住居址の床面を切り込んで葬られている。尾根巾の狭い下降稜線に立地するため，その後の風化流失によってやっとその痕跡をとどめている程度の遺存である。墓壙の形状は第28号住居址床面でしかみられないが，掘り込みの上端および床面とも小口部は外ふくらみの円弧状を呈するやや不整形な長方形で，上端長149cm，同巾48cm，床面長137cm，同巾44cm，長軸方位N68° Wを測る。床面は地形の低い南東小口部に下傾し，両小口の比高約26cmを測るが平らな面を保つ。現況での掘り込みの深さは地形の高い北西小口部で23cm，地形の低い南東小口部で10cm，平均15cmを測る。北西小口部床面中央に一対の須恵器坏が供献されている他は，枕石等の埋葬施設は何も検出されなかった。

須恵器坏は，蓋の口径14.65cm，器高4.7cm，身の口径12.9cm，受部径15.3cm，器高4.8cm，立ちあがり高 0.9cmを測る。いずれも焼成はやや軟質で灰色を呈し，胎土に4mm大までの礫を含有している。整形仕あげは外表天部（底部）をへら削りの他は，内外面とも横なで調整が施されている。

器壁はかなり薄いが身の受部は外方に高く傾斜し，立ちあがりは内傾してあまり高くない。岩田第８号墳および同第14号墳出土の須恵器と類似していることから，本土壙墓は岩田第８号墳等とほぼ同時期に併行して埋葬され，岩田第11号墳等よりは先行するものと推察される。



第139図　第７土壙墓出土土器

7. 第７土壙墓（図139・図版82）

本土壙墓（Ｚ７）は，第６土壙墓の北東約２ｍの丘陵尾根支脈稜線上に所在する。当該地は用木山遺跡第３地点第28号住居址床面と複合し，竪穴式住居址建築の際埋め出して整地した地形の低い部分にあたる。したがってその後の風化や流土等によって住居址床面も流失して，現況は丘陵傾斜面に還元している場所である。本土壙墓は，こうした埋めだし整地面に位置するため，住居址とともにすでに流失していて今次発掘調査では，墓壙床面とおぼしき削平面の一部と，供献土器と思われる土師器坏２点を検出したのみである。したがって墓壙の形状および規模等の詳細は不明で，僅かに丘陵尾根走向に沿って長軸を置いていることを指摘できる程度である。

土師器坏２個は墓壙床面小口部に並べて置いていたが，いずれも土圧等で破砕していた。ほぼ同巧同大のつくりであるが，１個体分のみがほぼ原形に接合復元できたので図示する。底面をほぼ平らにつくり側面は外傾，口縁端部がやや外反した皿状の坏である。口縁径13.2㎝，底面外法径10.2㎝，器高 3.1㎝を測る。胎土に２㎜大までの砂粒を含み，焼成は普通で黄褐色を呈するが，部分的に黒斑を有する。器表の磨耗と荒れが著しく，仕あげ調整は判然としないが，内外とも横なで調整と思われる。内面の一部に丹塗りの痕跡をとどめるが詳細は明らかでない。

8. 第８土壙墓（図140・図版82）

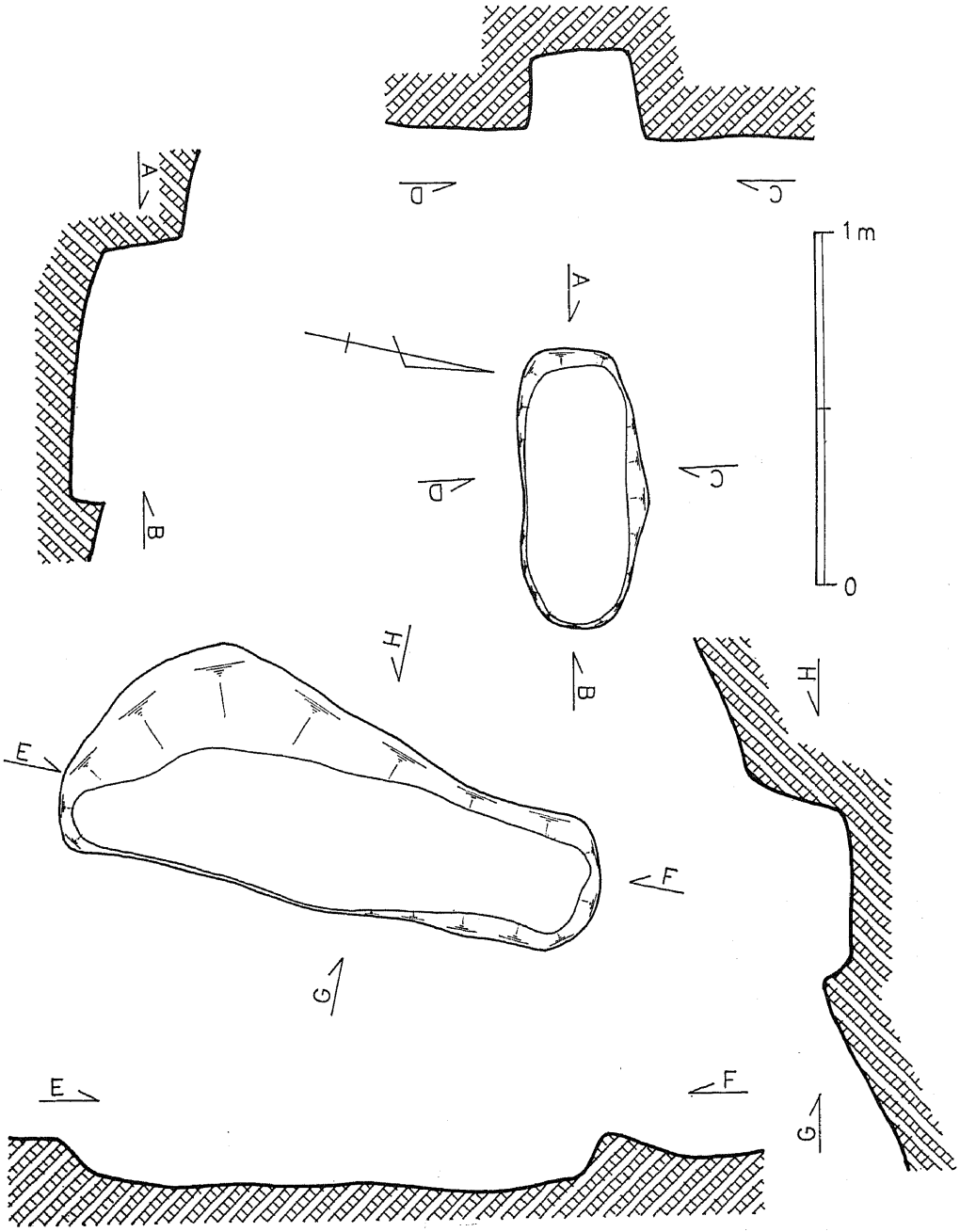
第６土壙墓の東北東約 6.5ｍの尾根傾斜面に，第８土壙墓と第９土壙墓の２基がＬ字形に近接して所在する。ともに素掘りの小土壙墓で供献遺物はともなわない。

第８土壙墓（Ｚ８）は標高60ｍの東へ下降する尾根支脈稜線上に，尾根走向に沿って掘り込まれた小形土壙墓である。墓壙プランは上端部および床面とも長楕円形を呈し，掘り込みの確認できる現存地山生き土上面の長さ80㎝，同巾34㎝，床面の長さ74㎝，同巾28㎝，長軸方位はＮ78°Ｅを測る。床面はほぼ平らな面を保つが，地形の低い側の東小口に下傾して，両小口の比高は９㎝を測る。深さは地形の高い西小口部23㎝，地形の低い東小口部８㎝，平均19㎝を測る。

9. 第９土壙墓（図140・図版82）

第８土壙墓の東約75㎝に北小口を置いて，尾根走向に直行して掘り込まれた土壙墓（Ｚ９）である。かなりの傾斜面に位置するためか，掘り込みのプランは上端部および床面とも，不整形な長楕円形を呈する。墓壙中心部で現地表下約27㎝に床面をおいているが，掘り込みの確認できる現存地山生き土上面での長さ157㎝，同巾55㎝，床面の長さ147㎝，同巾40㎝，長軸方位はＮ１°Ｗを測る。

床面はほぼ平らな面を保ち，現存掘り込みの深さは，地形の高い西壁部27㎝，地形の低い東壁部

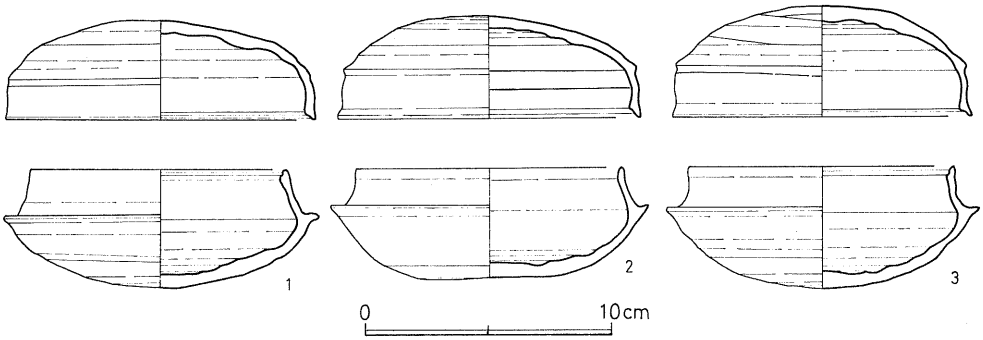


第140図　岩田第8・9土壙墓実測図

7㎝，平均14㎝を測る。

10.　第10土壙墓（図141・図版82.88）

第9土壙墓の東約10mの鞍部に近い尾根上に，図版82に示したごとく須恵器坏3個体が一括出土した。現地表下約20㎝の埋積土中での発見で，墓壙等の遺構が検出されないため，土壙墓としての確証はないが，いずれも蓋と身をセットとして整然と位置しているところから，一応第10土壙墓



第141図　岩田第10土壙墓出土土器

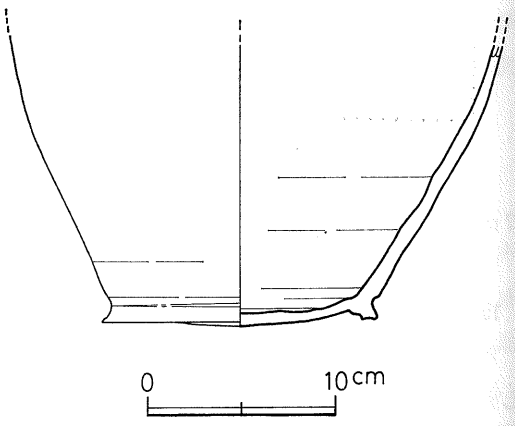
（Z10）として取り扱った。

発見された須恵器坏３組はいずれも極めて類似した同巧同大のつくりである。図 141—(1)の坏蓋の口径12.5㎝，器高４㎝，坏身口径10.4㎝，受部径12.7㎝，器高4.8㎝，立ちあがり高1.8㎝，(2)坏蓋の口径12.1㎝，器高4.5㎝，坏身口径10.9㎝，受部径12.8㎝，器高４.4㎝，立ちあがり高１.5㎝。(3)坏蓋の口径12.1㎝，器高4.5㎝，坏身口径10.8㎝受部径12.6㎝，器高4.9㎝，立ちあがり高1.6㎝を測る。いずれも黒味がかった灰色を呈し，整形および焼成はともに良好である。胎土に５㎜大までの砂礫を含む。整形仕あげは外表天部（底部）はへら削り，その他は内外面とも丹念な横なで調整が施されている。口径が12㎝台と小さく真円につくられ，蓋は体部に稜をもち側面はほぼ垂直に立って深い。身部の立ちあがりも高くシャープで，当地域出土の須恵器としては古い形式を示し，横穴式石室を内部主体とした，周辺の岩田古墳群のいずれよりも先行するものである。

当丘陵地内においては，本第10土壙墓出土の坏と類似するものが，他にも数例知られている。第９土壙墓の北約17ｍの用木山遺跡第３地点D21グリット調査中に，本土壙墓と同様埋積土中に遊離する坏１対が発見された。図 158—(1)に示した坏がそれである。焼成および形式は本土壙墓出土とほぼ同巧同大である。坏蓋の口径12.5㎝，器高4.4㎝，坏身の口径10.3㎝，受部径12.2㎝，器高4.3㎝立ちあがりの高さ1.6㎝を測る。その他すでに報告した惣図遺跡第１地点の調査中にも，表土層内遊離出土として１個体が検出され，また四辻第１号⑥墳および宮山第４号⑦墳の発掘調査において，ともに墳外供献遺物として周湟内墳端斜面からも，同形式の坏各１個体が発見され注目された。D21区以外の出土例については，すでに各遺跡の発掘報告に集録しているので参照願いたい。

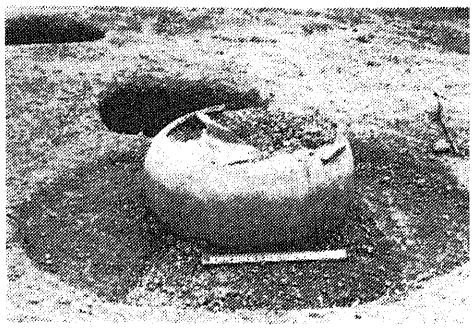
11.　須恵質蔵骨器（図142，143）

用木山丘陵平坦部から東南斜面に臨む肩部において，弥生時代集落址・用木山遺跡第１地点の発掘調査中に，第９号竪穴式住居址の埋土中に偶然発見した蔵骨器である。第 129図分布状況図に●１で示した地点がそれである。竪穴式住居址の埋積土中に葬られているうえに，当該地の表土層がかなり流失していて，現地表を一皮剝土した段階



第142図　用木山尾根出土の蔵骨器

（用木山出土蔵骨器）



（惣図遺跡出土蔵骨器）

第143図　蔵骨器出土状況

で，上半部をすでに破損消失した形状で検出した。したがって墓壙の掘り込みや全容を知ることできなかった。付近の丘陵上に数多く産出する児頭大の花崗岩礫数個で，蔵骨器を囲むように埋されていた（図143）。

蔵骨器内には灰とともに火葬骨片が検出された。糸底のついた須恵質で，奈良時代の所産と推される。現存部最大高15.2cm，同最大径26cm，底部径14.7cmを測るが，下半部のみの出土のため形は不詳である。胎土に2mm大程度の砂礫を含み，焼成は良好で淡青灰色を呈する。整形仕あげ内外面とも横なで調整が施されている。

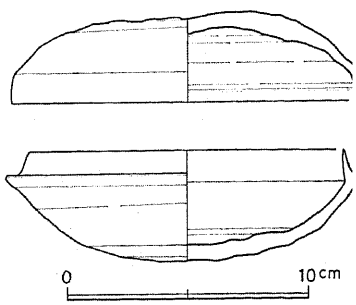
当丘陵内にはこうした須恵質蔵骨器は，本蔵骨器の他に，用木山から西南に分出する尾根支脈にも2か所検出されている。いずれも惣図遺跡[9]の集落址調査の際に発見したもので，本蔵骨器か約130mの距離に近接立地していた。図129分布状況図●2で示した地点がそれである。

12．第11主体（図144～146・図版83）

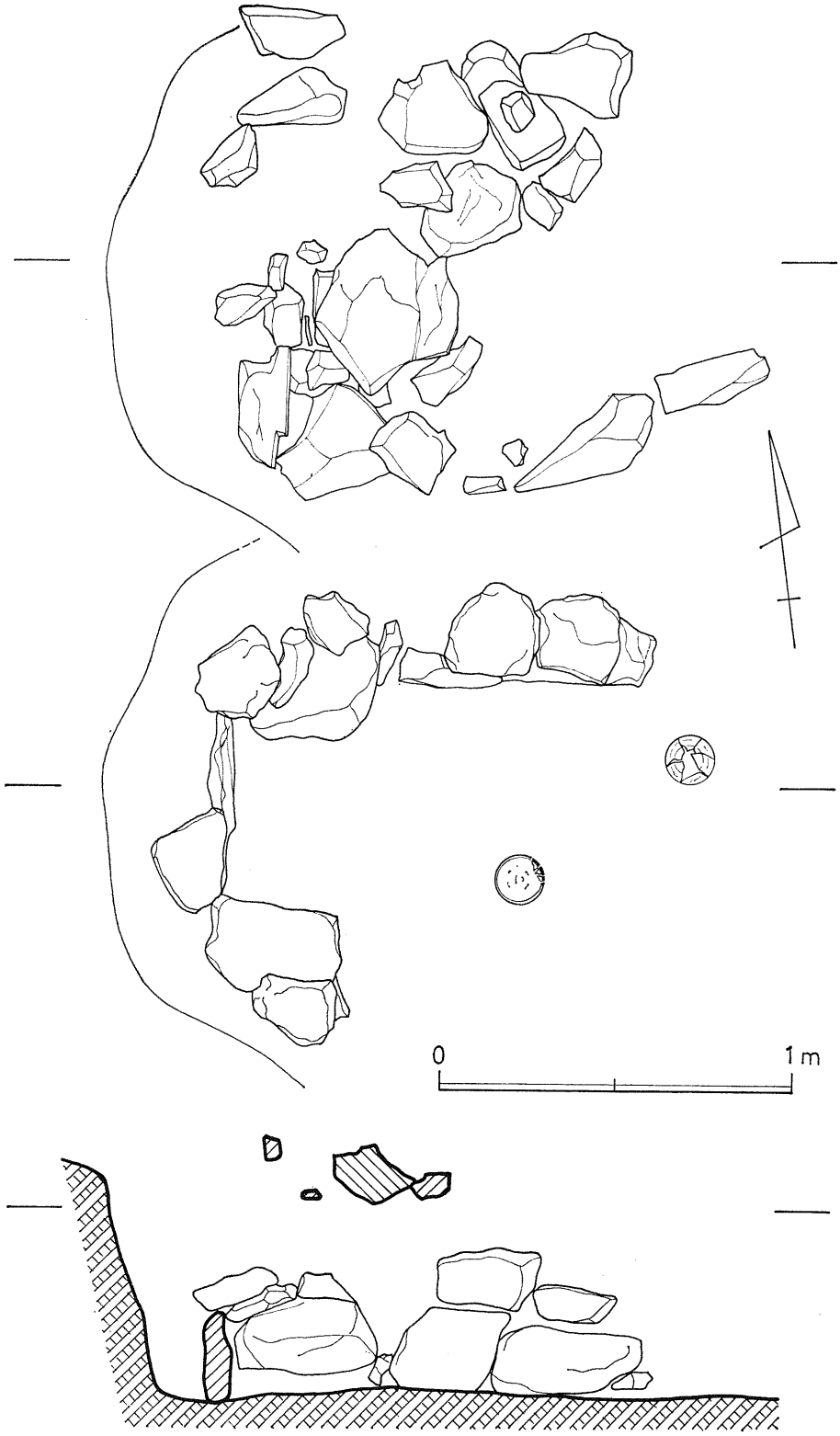
さくら山丘陵頂から南東に向けて下降する尾根上の，標高約65mの傾斜面に3基の墓壙が一括て所在するが，その一基が本主体である。さくら山丘陵頂から水平距離で東へ約50m，比高で約m降った地点で，弥生時代竪穴住居址と複合し，眺望視野の開けた立地を占める。

住居址の発掘調査を実施していたところ，その埋積土中に不規則に積みあげられた形状の約1m四方の花崗岩石積みが検出され，当初は集落址に関係のある遺構とも考えられたが，その後遊石材を除去する等の調査の結果，掘り方および石室根石の一部が遺存し，床面に須恵器坏2個が見され，古墳時代後期の埋葬施設と確認できた。

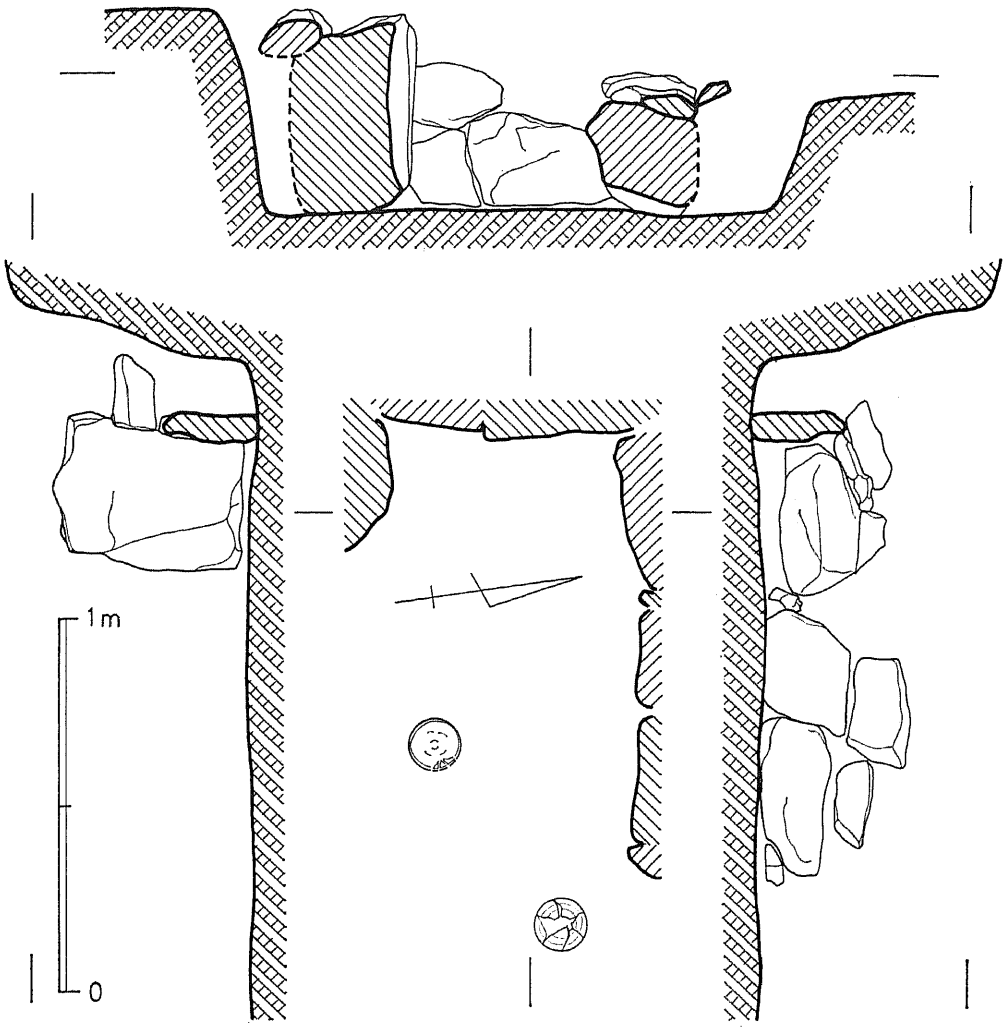
尾根走向に従って地形の低い側から掘り込まれた，現存部巾約1.5m，底面長1.8m，最大深0.62mの掘り方内に構築された小形石室である。現状では奥壁部近くの根石しか残存しないが，石室床面内法奥行115cm，同巾62cm，最大高50cmを測り，その形状および構造から小横穴式石室または石槨と推察される。石室床面はほぼ水平な面を保ち，内法奥行長155cm，長軸方位はN82° Wを測る。石室内床面とやや上方に遊離した一対の須恵器坏を発見した他は，何も検出されなかっ



第144図　第11主体出土土器



第145図　岩田第11主体石材出土状況図



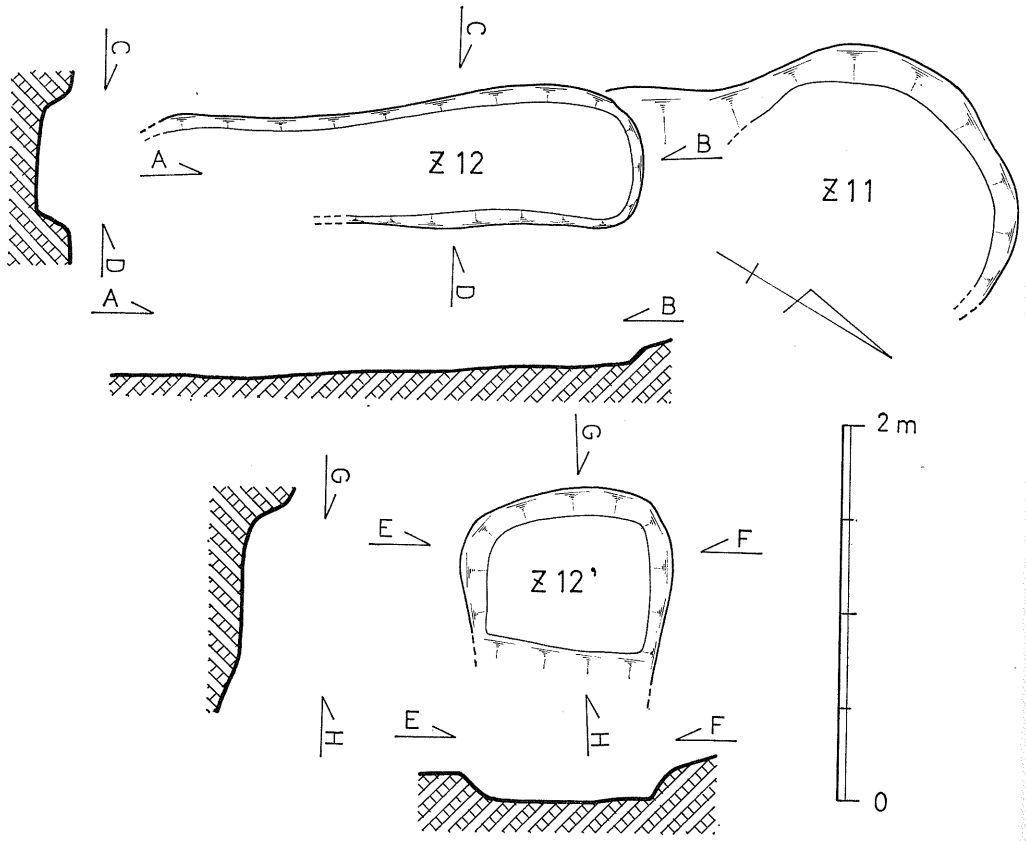
第146図　岩田第11主体実測図

た。

須恵器坏蓋は口径14.5cm，器高3.5cm，坏身の口径13.2cm，受部径15.2cm，器高4.5cmを測る。もに焼成はやや軟質で灰白色を呈するが，蓋をした状態で焼成されたらしく立ちあがり部等内面白橙色となっている。胎土は細砂を含むが良質である。整形仕あげは外表天部（底部）のへら削の他は内外面とも横なで調整が施されているが，身部内面の一部に青海波状の叩き目の痕跡が認られる。

13．第12土壙墓（図146・図版84）

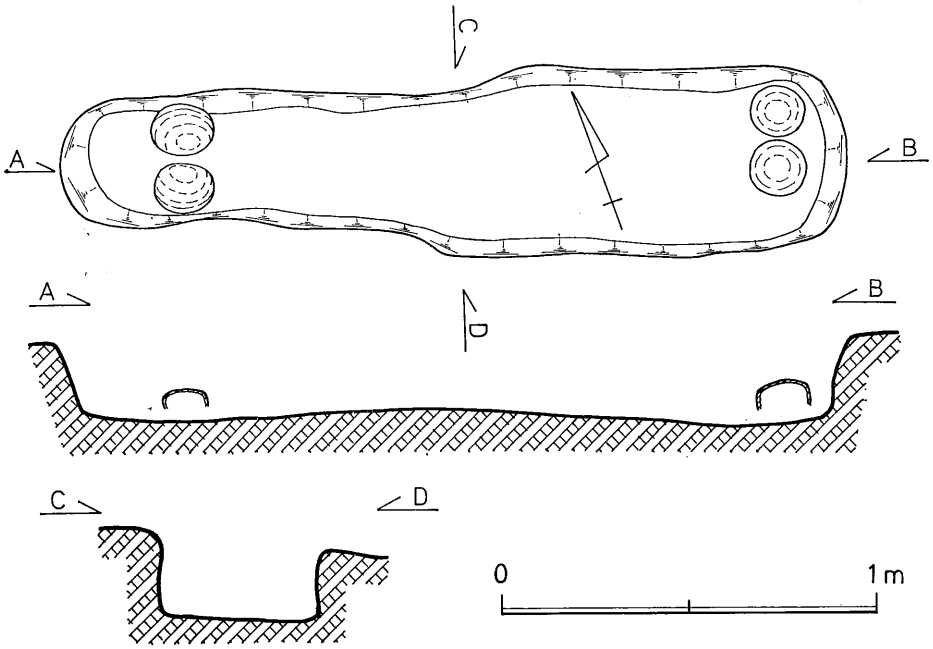
第11主体の南側壁に接するようにして北小口をおき，等高線とほぼ平行して南東方向に長軸中線をもつ素掘り土壙墓（Z12）である。傾斜面に位置するため掘り込みのほとんどを流失して，壙床部を残す程度の遺存である。隅丸長方形のプランを示すが，地形の低い南東小口部では床面含めてすでに消滅していた。掘込み上端のわかる現存地山生き土上面での長さ 270cm，同巾74cm



第147図　岩田第12土壙墓実測図

床面長250㎝，同巾56㎝，掘り込みの深さ16㎝，長軸方位はN32°Wを測る。床面はほぼ平らな面を保つが，伴出遺物をはじめ枕石等の埋葬施設は何も認められなかった。本土壙墓の南約2ｍの表土層で図 158—(3)に示した須恵器坏蓋1個が遊離発見のため本土壙墓に直接供献されたという確証はないが，位置的にみて本土壙墓群の葬送に関連する可能性もあるので，参考までに概述する。坏蓋の口径 14.5㎝，器高4.3㎝を測る。外表体部に鋭い1条の稜をもち口縁はやや内湾して最大径を体部にもつ。口縁端は丸くおさめているが内側に段をもつ。均整のとれた良品で，焼成は普通，胎土に微砂を含み暗青灰色を呈する。外表天部にへら削り痕がみられる他は内外面とも横なで調整されている。岩田第14号墳出土の坏に本品と同形式のものが多く見られる。

さらに本土壙墓の東約 1.4ｍに西小口をおいて，当該地の等高線に直行する方位で掘り込まれた土壙墓状の痕跡と，その周辺に須恵器有蓋短頸坩1個が発見された。しかしこの掘り込みはかなりの傾斜面に立地するため，すでに地形の低い東半部を床面も含めて流失しているうえに，残存部も浅く定かでない。一応（Z12′）として参考までに付記するにとどめたい。現存掘り込み上端部長100㎝，同巾112㎝，同床面長72㎝，同巾87㎝，掘り込みの深さ15㎝，長軸方位はN55° Eを測る。なお出土須恵器は発見当日昼食時間中に何者かによって持ち去られ，ここに提示することができなくなった。私たち調査団の不注意として深く反省するとともにお詫びしたい。



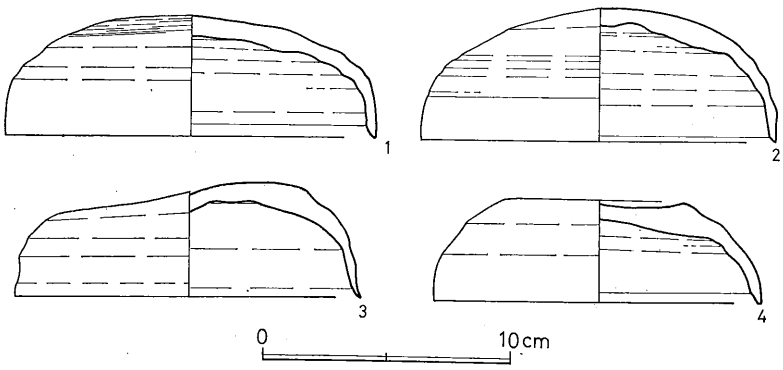
第148図　岩田第13土壙墓実測図

14.　第13土壙墓（図148，149・図版84）

さくら山から東南に下降して延びる丘陵尾根の南斜面中腹の，現在果樹園となっている標高約56.5mの地点に，単基で埋葬された土壙墓（Z13）である。前述の第12土壙墓の南約45m，岩田第1号墳の西方約35mの地点にあたり，さくら山遺跡第8住居群と複合立地している。

本土壙墓上層部は畑地として耕作されているため，掘り込み上端は不明であるが，竪穴式住居址の床面を切って掘られていた。現状で掘り込みのわかる住居址床面での長さ 210cm，同巾50cm，床面の長さ197cm，同巾42cm，長軸方位はN71°Eを測る。墓壙の平面形は上端部および床面とも，やや不整形な細長い溝状の隅丸長方形を呈し，等高線の走向に沿って長軸をおく素掘り土壙墓である。現地表下平均35cmに床面をおくが，現存掘り込みの平均深は約15cmを測り，床面はほぼ水平な面を保つ。床面両小口に夫々須恵器坏蓋を2個づつ並列にふせている他は小口溝等の埋葬施設は何も検出されなかった。

須恵器坏(1)は口径15.0cm，器高 4.9cm，(2)の口径14.3cm，器高 5.4cm，(3)の口径14.9cm，器高4.6cm，(4)の口径13.3cm，器

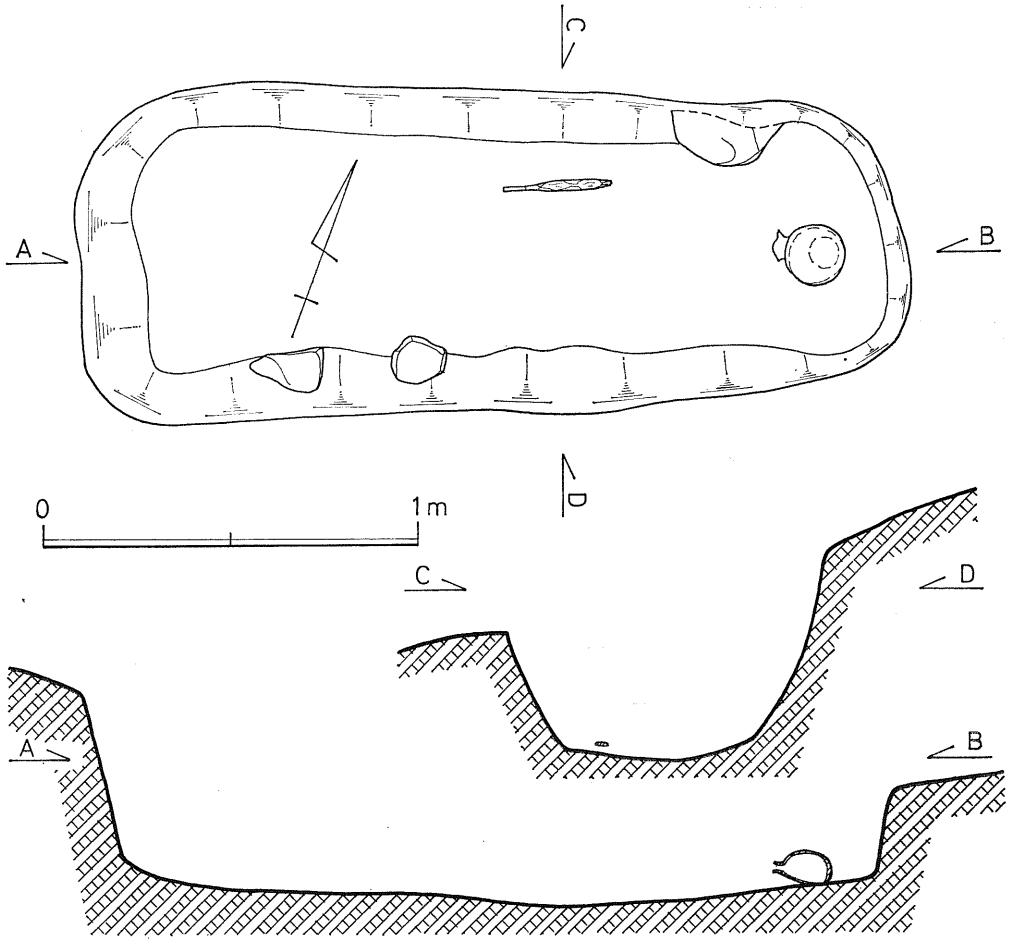


第149図　岩田第13土壙墓出土土器

高 4.2㎝を測る。(1)と(3)が東小口，(2)と(4)が西小口出土である。いずれも外表天部にへら削り痕を残すほかは横なで調整が施され，口縁端部内側に斜傾させて稜をもつ。(1)は均整のとれた良品で，胎土に細砂を若干含み，焼成も良好で青灰色を呈する。(2)は全体に丸味の強いつくりである。焼成は軟質で器表の荒れが目立ち，暗灰褐色を呈する。胎土に 4 ㎜大までの礫をかなり多く含む。(3)および(4)はともに大きく焼歪んでいるが，焼成は堅緻で黒味がかった青灰色を呈し，灰釉をかぶり光沢のある黒斑が見られる。胎土に雲母および 2 ㎜大程度の砂礫を多く含み，同一工房による生産と思われる。当さくら山丘陵においては上記土壙墓の他にも，岩田第 1 号墳周辺に数基の土壙墓が検出されているが，これらの土壙墓については岩田第 1 号墳の発掘調査報告書に併記しているので参照願いたい。

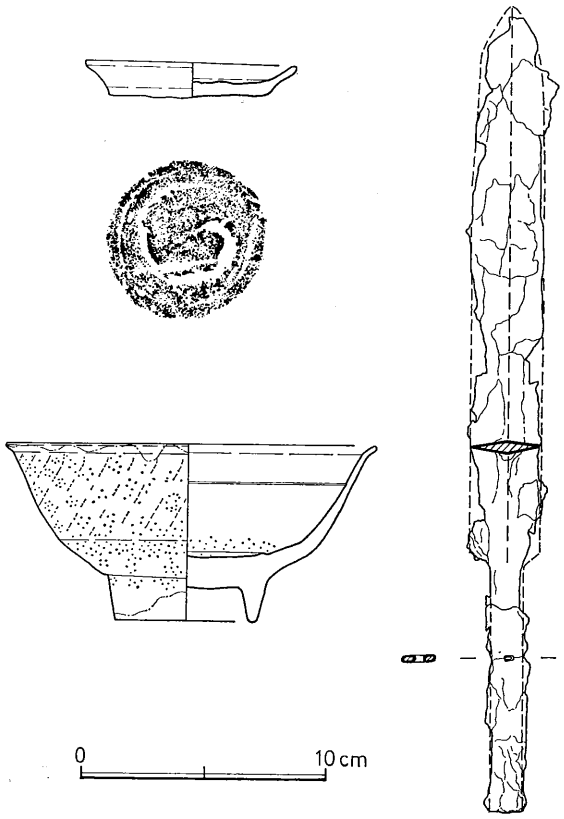
15. 第14土壙墓（図150，151・図版85）

愛宕山から用木山にいたる丘陵尾根支脈の，中腹稜線近くに本土壙墓（Z14）は所在する。そこは愛宕山丘陵頂から西北西約35m，標高61.5m，西方に下降する尾根支脈稜線から北方へ約12mのこれから下降傾斜を増大しようとする側斜面肩部にあたる。



第150図　岩田第14土壙墓実測図

本土壙墓は愛宕山遺跡第２住居址床面を切り込んで葬られていた。したがって墓壙の掘り込みは，竪穴式住居址床面でしか確認できない。当該地の等高線の走向に沿って長軸をおき，N69° Eの方位を示す。墓壙平面形は掘り込み上端および床面とも隅丸長方形を呈し，上端長222cm，同巾86cm，床面長197cm，同巾57cm，現存掘り込みの深さは地形の高い西側壁で55cm，地形の低い東小口壁で23cm，平均約44cmを測る。床面はほぼ水平な面を保つ。壁面の角度はいずれも上に広い外傾を示す。床面東小口中央に白磁碗と土師質灯明皿各１を重ねてふせた形で置き，体側にあたる北側壁に沿って鉄剣１振りが，切先を東に向けて供献されていた。その他墓壙内に数個の花崗岩礫が検出されたが，いずれも遊離出土で本土壙葬送に意識的に用いられた形跡は認められない。墓壙の形状から木棺直葬墓と推察されるが，現状では上記副葬遺物と石材のほかは何も検出されなかった。



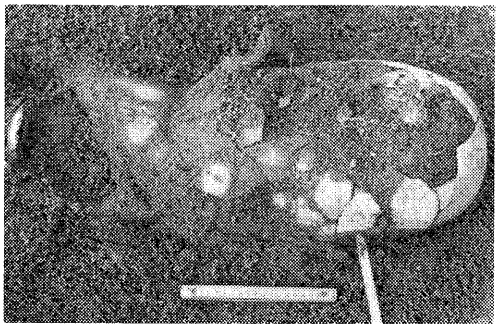
第151図　岩田第14土壙墓出土遺物

鉄剣は銹化が著しく破損していて，関部形状等の詳細は明らかでないが，刃部断面が菱形で鎬をもち，鍛造品であることなどから剣と確認できた。推定全長32.4cm，刃部長22.5cm，茎長9.9cm，刃部巾2.9cm，同厚0.55cm，茎巾1.4cm，同厚0.3cmを測る。茎は横断面長方形のつくりで，茎端から6.1cmに目釘孔１孔をもつ。

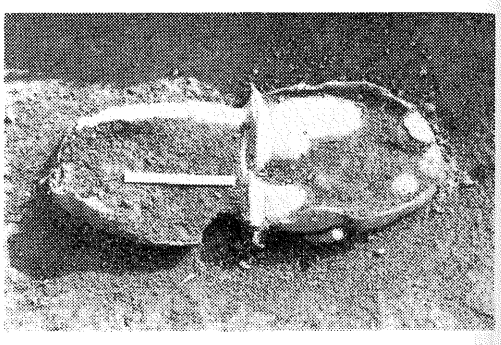
白磁碗は口縁径15cm，器高7.1cm，高台高1.3cm，高台底径5.7cm，碗部内法深4.5cmの完形品で，宋時代の劃花文碗である。高台部が高く口径に対し高い感じのつくりである。器表下半部と高台部にへら削り痕を残し，口縁端部をやや外反させておさめた均整のとれた良品である。外表側面に巾0.6cm～1.0cm間隔で斜行した細い沈線が繞らされ，高台内面を除く全体に釉薬がかけられ，灰白色の鈍い光沢をもつ。

土師質灯明皿は口縁径8.6cm，底面径6.4cm，器高1.4cmの浅いつくりである。底部は平底で糸切りされ，側面はやや外反している。胎土に３mm大までの砂礫をかなり含み，焼成は普通である。器形の特徴から平安時代末または鎌倉時代初頭の所産と考えられる。

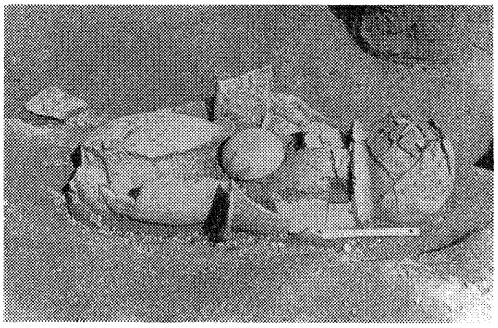
当丘陵内において，宋時代白磁碗はもう１か所出土している。用木山丘陵頂の西寄りの南斜面，標高約75mあたりの表土層内から遊離出土した。図158―(4)に図示したものがそれである。遊離発見のため墓壙等の遺構を伴なわないので，葬送にともなう供献かどうかは明らかでないが，周辺から同図(4)に示した碗も出土しているので参考までに概述する。用木山出土の白磁（図版87）は破損



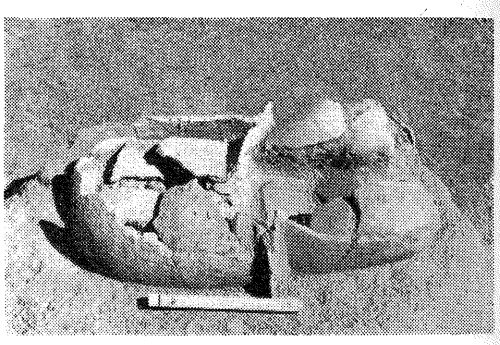
（岩田第15土壙土器棺）



（用木山丘陵頂土器棺）



（便木山遺跡土器棺Ｋ７）



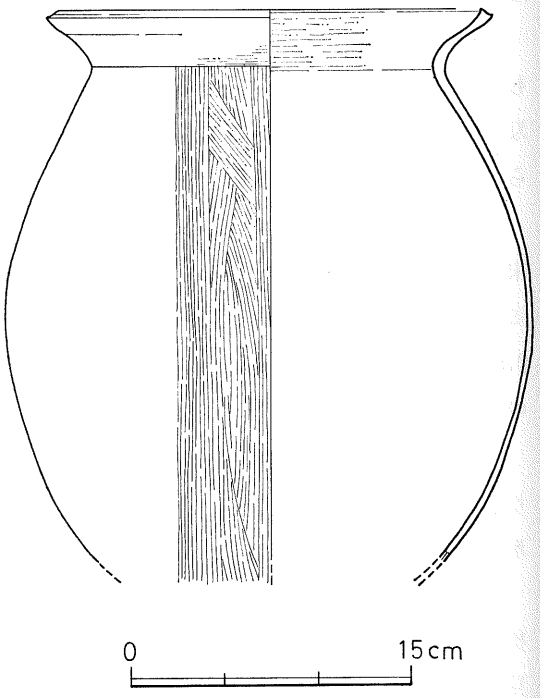
（便木山方形台状墓周辺土器棺Ｋ２）

第152図　合せ口土器棺出土状況

していたが，接合により約80％大まで復元できた。口縁径16.3㎝，底部径6.7㎝，器高6.4㎝，碗部内法深 5.5㎝を測る。愛宕山出土のものにくらべて高台は低く，口縁部を玉縁におさめている。灰白色の釉薬が施されているが，外表は上半部のみにかけられ，下半部はへら削りの地肌をみせている。

16．第15土壙墓（図152，153）

愛宕山丘陵頂を中心にして弥生時代土壙墓群（Ｙ85）が形成され，その東端部に愛宕山方形台状墓（Ｄ２）が立地している。本土壙墓（Ｚ15）は弥生時代土壙墓群と，方形台状墓との境界となる周湟状溝遺構の，土壙墓群側の傾斜面に埋葬された，土師質甕２個を合せ口にした土器棺である。棺となる甕の大きさと形状に合せて，等高線に平行した長楕円形の墓壙を掘り，その中にほぼ水平位の横向きに埋葬されたものと思われるが，現況では風化や流土によって大きく変貌し，墓壙



第153図　第15土壙墓土器棺

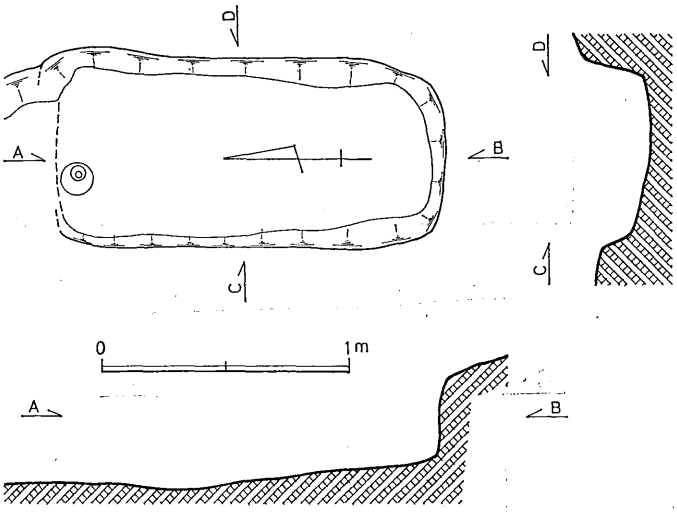
等の形状を明確にすることができなかった。甕も上方となる部分はすでに破損散逸し，下半部のみの検出である。出土状況は写真によって示したので了承賜わりたい。

棺に用いられた甕は復元が困難のため，推定も含めて１個体分のみを図示する。口縁径23.6cm，胴部径28.1cm，器高推定33cmを測り，やや縦長の甕である。底部は丸底で口縁部はくの字に外反させて，口縁端部に稜をもつ。器表外面口縁部は横なで，器胴部は縦方向への 1.5mm～２mm巾の刷毛目，内面は口縁部横なで，胴部上方はへら削り後横なで，下半は指圧による調整を施している。胎土に細砂をかなり含むが，焼成は比較的良好である。色調は器表は明赤褐色と黄褐色，内面は黄褐色を呈する。

この合せ口土器棺は土師質甕の形状から６世紀代の所産と考えられるが，当丘陵群からは本土壙墓の他に，用木山丘陵頂肩部に１基（図152参照），と便木山遺跡部[8]に数基検出されている。

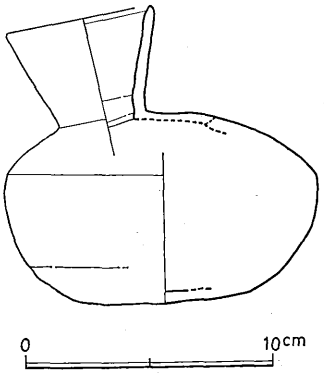
17. 第16土壙墓(図154,155・図版87)

愛宕山方形台状墓（Ｄ２）の北墳端部周湟底に位置する土壙墓（Ｚ16）である。周湟底の埋積土中に掘り込まれているため，墓壙上半部は明らかでなく，また地形の低い北小口部では，墓壙床面も含めてすでに流失していた。墓壙掘り込みの上端がわかる現存地山生き土上面での長さ 157cm，同巾77cm，床面の長さ 151cm，同巾63cm，深さは地形の高い南小口部で33cm，平均22cmを測る。等高線に直行する形で掘られ，長軸方位は北を指す。墓壙の平面形は上端および床面とも隅丸長方形を示し，床面はほぼ水平な面を保つ。床面北小口に接して須恵器平瓶１個が発見された他は，枕石等の埋葬施設は何も認められなかった。



第154図　岩田第16土壙墓実測図

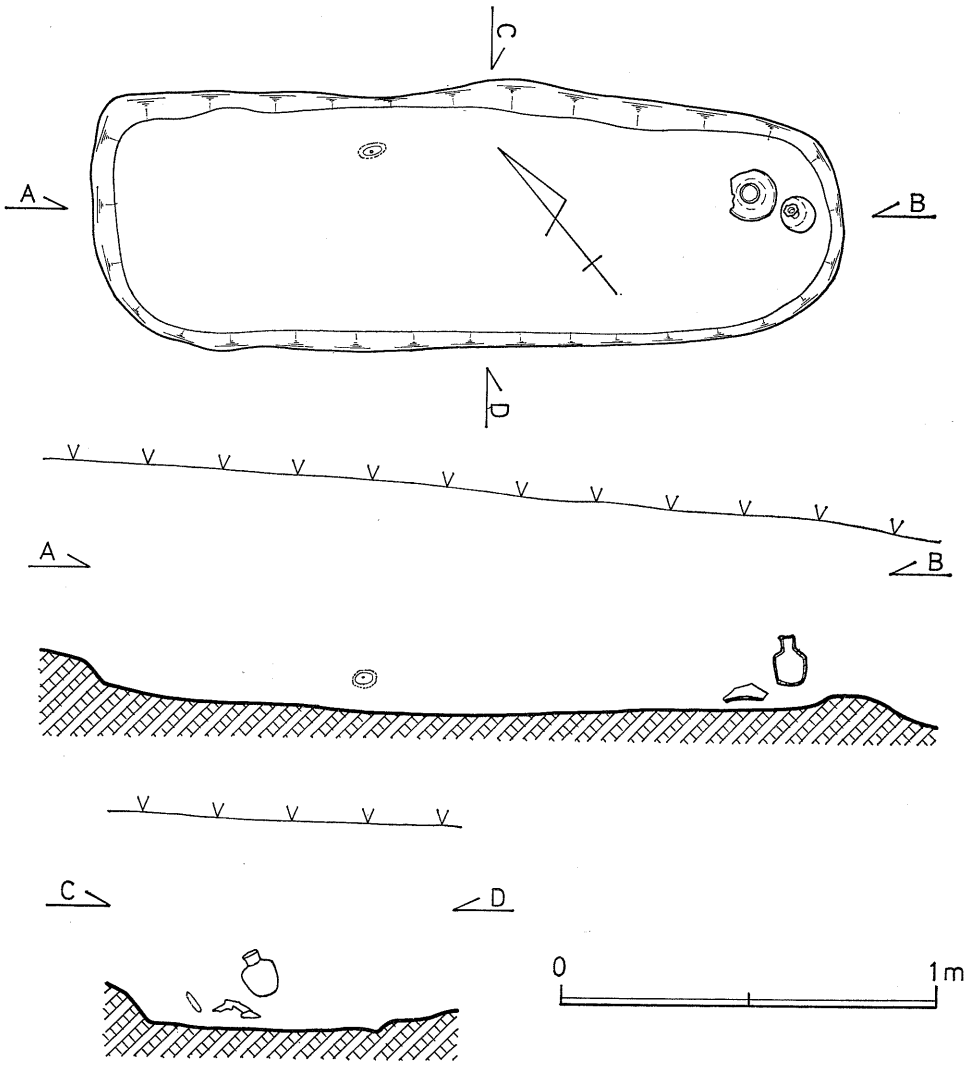
平瓶は口径5.9cm，頸部径3.9cm，胴部最大径 12.4cm，器高11.9cm，頸部高4.1cm，胴部高7.6cmを測る。胴部肩に弱い稜をもつが均整のとれた完形品である。焼成はやや軟質で灰白色を呈し，胎土に細砂粒を含み，器胴底部外表にへら削り痕を残す他は，内外面とも丹念な横なで調整が施されている。



第155図　第17土壙墓出土土器

18. 第17土壙墓（図156，157・図版86）

愛宕山丘陵頂から北北東に向けて，緩やかに下降して延びる丘陵尾根支脈南斜面肩部に，単基で



第156図　岩田第17土壙墓実測図

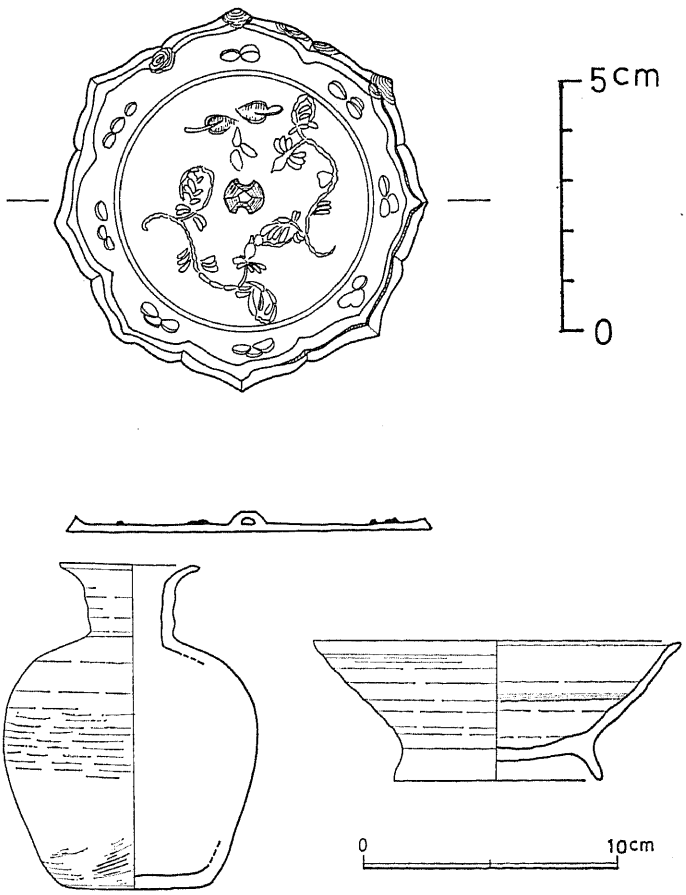
埋葬された土壙墓（Z17）である。そこは丘陵頂から北北東に水平距離で約 100*m*，尾根支脈稜線から南へ約15*m*片寄った標高52*m*の緩斜面にあたり，弥生時代集落が営なまれた削平整地面跡でもある。

本土壙墓は等高線の走向に直行する形で，長軸方位をN50° Eに向けて掘り込まれ，現地表下約60㎝に墓壙床面を検出したが，集落址の二次埋積土中に位置するため，墓壙掘り込みの上端等は確認できなかった。現況では墓壙床面とその上方に僅かにその掘り込み壁面を残す程度の遺存である。掘り込み上端のわかる現存地山生き土上面および床面とも，その平面形は隅丸長方形を呈し，床面はほぼ水平な面を保つ。墓壙上端長200㎝，同巾68㎝，床面長190㎝，同巾60㎝，掘り込みの深さは平均10㎝を測る。床面南小口中央に土師器坏１と須恵器坩１，東側壁に接して南小口から 120㎝に瑞花八稜鏡１の計３点が発見された。上記供献遺物の他は枕石等の埋葬施設は何も認められなかった。

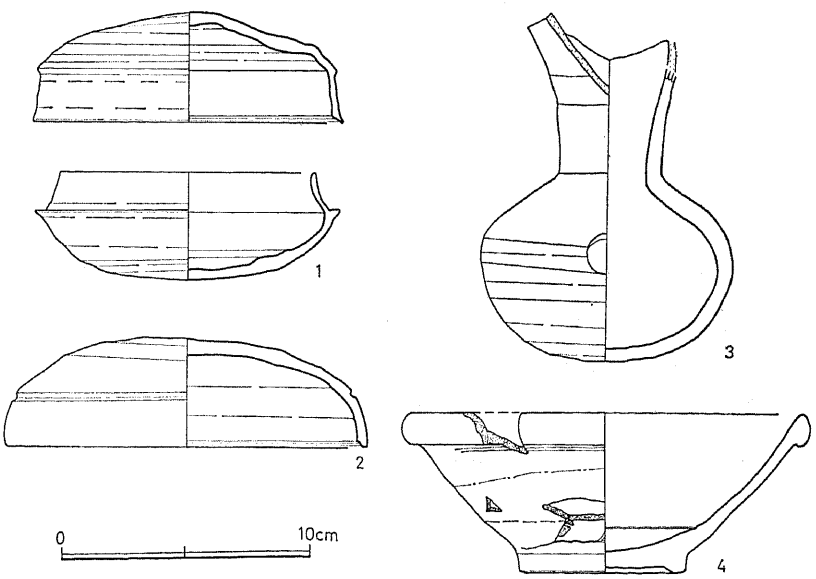
瑞花八稜鏡は対角径 7.6㎝，対辺径6.9㎝の青銅製小形品である。緑青銹を部分的に吹出しているが保存状態は良好で完形を保つ。鏡面は平滑でそりはもたず，縁端は斜傾して鋭い稜を有し縁端厚は0.2㎝を測る。鏡背は直径5.2㎝で円形に細い隆起線を繞らせ内外区を画している。外区は各頂角部に各３個の山形突起文を八か所，内区には陽鋳出しの瑞花を配している。鈕は円鈕で径0.8㎝，高さ0.3㎝を測り，鈕孔の向きは対角線に沿っている。

土師器坏は高台のついた形式である。口縁径14.4㎝，底部径 8.2㎝，器高5.5㎝，高台高1.3㎝，坏部内法深 4.1㎝を測る。坏部を整形した後に高台を貼りつけたつくりで，器壁は薄く直線的に外傾して立ちあがる。胎土に若干の細砂を含み，焼成は良好で明赤褐色を呈する。坏部下半に指圧凹痕が認められる他は，内外面とも横なで調整されている。

須恵器坩は口縁部を一部欠損しているが，器高12.7㎝，口縁径5.5㎝，頸部径3.3㎝，胴部最大径 9.8㎝，底部径5.5㎝，器胴高9.9㎝の小形品である。胴部最大径を上位にもったやや肩の張った平底の器胴に，外反して立ちあ



第157図　岩田第17土壙墓出土遺物



第158図　岩田土壙墓群周辺部遊離土器

がる小口頸をもつ均整のとれたつくりである。器胴外表の肩部より下半に横方向へら削り痕を残すほかは，横なで調整が施され無文である。胎土に２㎜大までの砂粒をかなり含むが，焼成は良好で青灰色を呈するが，上半部に灰釉をかぶり灰白色の斑文をみせる。

本土壙墓の埋葬時期は供献遺物の特徴から平安時代末頃と推察され，前述の白磁を供献している第14土壙墓とともに注目される。

19. 鎌倉時代蔵骨器（図159）

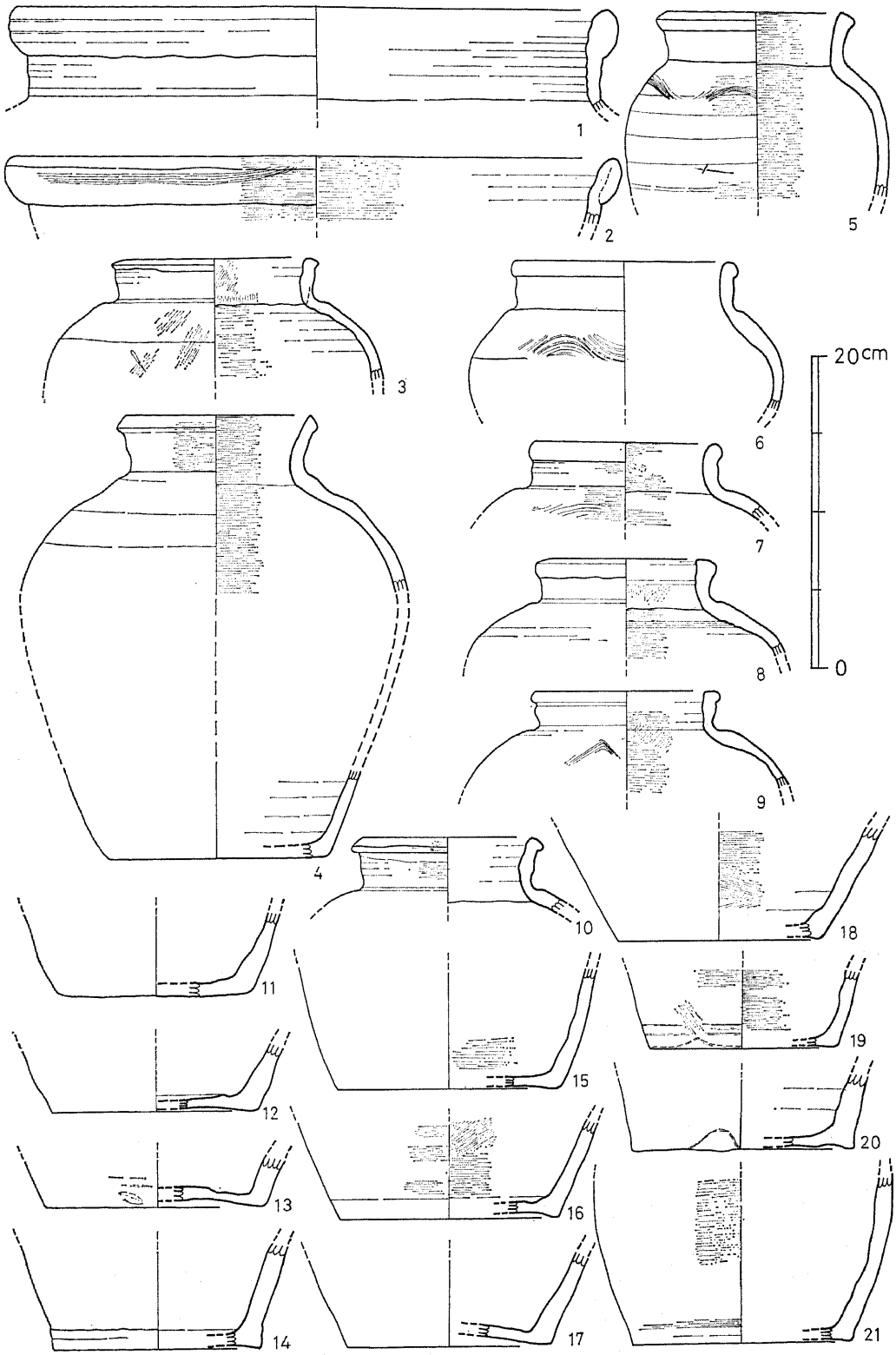
愛宕山方形台状墓（Ｄ２）から南へ分岐する丘陵尾根小支脈稜線は，さして広くはないがテラス状の緩傾斜面となっている。この標高57ｍ～60ｍ付近の尾根上約20ｍ四方の範囲に，弥生時代竪穴式住居址群と複合して，須恵質および古備前の壺片約20個体分を遊離発見した。当地は表土層の風化流失が著しく，竪穴式住居址床面も大半が消滅している状態で，これらの壺類も遺構はもとより原位置を保つものは殆んど認められず，現地表および表土層からの遊離検出である。したがって壺類の使途については明確ではない。

当該地は埋積平地に張りだした比高35ｍ～40ｍの丘陵尾根突端部にあたり，麓には古来からの集落が営なまれ，その後背地である。また古墳時代から平安時代にかけての土壙墓が存在し，江戸時代から現代に伝わる墓山でもある。出土壺類の形状や，一例のみではあるが児頭大の花崗岩礫数個に囲まれた形で，原位置を保つと思われる器底部片が発見されるところから，鎌倉時代の火葬骨を納めた墓地遺跡の可能性が極めて強い。そのため参考資料として，その幾つかを図示し概述する。

発見した破片総数は約 250片である。口縁部片を基準として個体数を検討すると少くとも19個体以上となり，土師質１，須恵質４，古備前14となる。基底部片では14個体以上となる。出土状況が採集土器片の遺存度の状態からみて，実際にはもっと多くの個体数が存在していたと推察される。

(1)(2)はともに口径の大きいつくりである。どちらも口縁部を折り返して玉縁風に作られ，口径は(1)38.9㎝，(2)39.4㎝を測る。現存部整形仕あげは，(1)横なで，(2)横なでの後に横方向への刷毛目調整が施されている。(3)～(10)は胴部最大径を上位にもつやや肩の張った器胴に，直口またはやや外反した短頸のつく形である。口縁径11.8㎝～13.4㎝，器胴最大径17㎝～25.6㎝を測る。(3)は整形および焼成とも良好な古備前で暗茶色を呈するが，肩部から上方の外面は灰釉をかぶり灰白色を呈する。(4)は前述の花崗岩礫で囲まれていた一括破片で，ほぼ原位置を保つと考えられる。素焼に近くやや軟質な焼成で黄褐色を呈する。整形仕あげは横なで調整されているがやや粗雑である。(5)～(7)は赤褐色を呈し，肩部外表に櫛状施文具による波状文を繞らせている。(8)～(10)は暗褐色を呈し，焼成は堅緻で上面に灰釉をかぶる。(7)の器胴外面にへら描きによる×印が認められる。

器底部はいずれも平底で角に鋭い稜ををもつものが多い。総じて赤褐色を呈するものが多く，底面径12.3㎝～14.3㎝を測る。底部器壁は0.7㎝～0.8㎝と比較的に薄いが，器胴部への立ちあがり部はかなり厚く，1.5㎝～1.7㎝におよぶものもある。



第159図　愛宕山出土蔵骨器

第4章　ま　と　め

1.　本土壙墓群は埋積平地を臨む丘陵上に所在する，用木山遺跡を中心とした弥生時代の集落址を発掘調査中に，それらと複合立地していた古墳時代後期以降の土壙墓等埋葬施設を，便宜的に一括して集録したものである。

2.　当該地は風化の進んだ花崗岩媒乱土で形成され，丘陵表土層の流動が著しいうえに，集落址の各遺構等と複合していて，時代の判別できないものもかなりあり，本稿では伴出遺物等によって比較的確実性の高いものを中心にとりあげた。したがって,各遺構の出土状況等については,本報告書第4集，用木山遺跡，同第5集,さくら山遺跡，愛宕山遺跡の集落址報告書を参照されたい。

3.　当丘陵は，最初に生活根拠地として足を踏み入れた弥生時代中期以来，愛宕山土壙墓遺跡，同方形台状墓，用木古墳群，岩田古墳群へと，弥生墓制から古墳の発生，ひいては横穴式石室墳への墓制の変遷が見られるほかに，埋葬施設の極めて簡素な素掘り土壙墓の系列が，同一丘陵に混在する形で検出され注目されたのである。

4.　視点を変えて当丘陵の中でも埋積平地に近い愛宕山は，古来より現代に至るまで当丘麓部に所在する河本部落の墓山として利用され，今も江戸時代初頭の墓碑名も確認できるのである。また当丘陵の北北西約600mの門前池西遺跡[10]には，古墳時代集落址および平安時代建物群が発見され，同北西約250mの三蔵畑遺跡[11]では,平安時代末ないし鎌倉時代初頭と推察される土師器窯址が発見されるなど，埋積平地西方に所在する備前国分寺址等[12]とともに，当地域住民の奥津城として活用された丘である。

5.　そのほか本土壙墓および併存する岩田古墳群の関連等については，本書前稿の「岩田古墳群総括」において若干ふれているのでここでは割愛する。参照願いたい。

註

1）神原英朗「岩田古墳群」本書収録
2）「用木山遺跡」報告書未完，本発掘調査概報第4集に収録の予定
3）「さくら山遺跡」報告書未完，本発掘調査概報第5集に収録の予定
4）「愛宕山遺跡」報告書未完，本発掘調査概報第5集に収録の予定
5）「愛宕山土壙墓遺跡」報告書未完，本発掘調査概報第5集に収録の予定
6）神原英朗「四辻古墳群第1号墳」本発掘調査概報第3集　1973年
7）神原英朗「宮山古墳群第4号墳」本発掘調査概報第3集　1973年
8）神原英朗「惣図遺跡」本発掘調査概報第2集　1971年
9）神原英朗「便木山遺跡」本発掘調査概報第2集　1971年
　神原英朗「便木山方形台状墓」本発掘調査概報第3集　1973年
10）枝川陽他「門前池遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(9)　岡山県教育委員会1975年
11）神原英朗「三蔵畑遺跡」本書収録
12）備前国分寺跡発掘調査団「備前国分寺跡緊急発掘調査概報」　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(10)岡山県教育委員会　1975年

野山古墳群第２・５号墳

第１節　序　　説……285
第２節　立地と調査前の概況……285
第３節　野山古墳群第２号墳……287
第４節　野山古墳群第５号墳……292
第５節　両古墳の築造年代……295
第６節　ま　と　め……296

野山古墳群第2・5号墳

第1節　序　　説

野山古墳群第2号墳（略記号C2）および第5号墳（C5）は，ともに岡山県赤磐郡山陽町岩田字惣図604番地の，野山と呼ばれる丘陵上に近在する低平な小古墳である。

昭和44年6月，当該地は岡山県営山陽新住宅市街地開発事業地に決定され，それに伴う埋蔵文化財分布調査を，岡山県教育委員会および山陽町教育委員会等が，前後数回にわたり実施した。その結果，野山丘陵においても数基の古墳が発見され，野山古墳群として登記されたが，当該両古墳はその時点では，すでに封土が風化流失していてその存在を知ることができなかった。

同年7月から8月にかけて，住宅団地開発事業の着工に先立つ，丘陵地内の立木伐採と木材搬出用の仮設林道が敷設された。その際両古墳の箱式石棺をブルトーザが損壊したため発見された。このことは施行業者から山陽町教育委員会に通報され，直ちに事業主体者の岡山県土木部をはじめ，岡山県教育委員会等関係機関でその取り扱いについて協議した。その結果，破壊された両古墳はいずれにしても応急調査が必要だが，当時はまだ団地内埋蔵文化財の全体的な保存計画が煮詰まってなく，また調査体制も組織されていないこと等から，具体的な決定ができず，当面は被土による仮保全を行ない現状凍結し，林道は古墳を迂回敷設された。

その後同年10月に，山陽団地埋蔵文化財発掘調査団が組織され，事業地内の埋蔵文化財の分布調査が進むにつれて，野山古墳群は13基の古墳で構成されていることがわかり，協議の結果本古墳群全域を含む野山丘陵約37,000㎡は，住宅団地内の自然公園として現状保存することに決定した。本古墳群の具体的な保存計画が未定のため，破壊された両古墳は，とりあえず応急調査と，石棺の原状復旧を実施することにした。

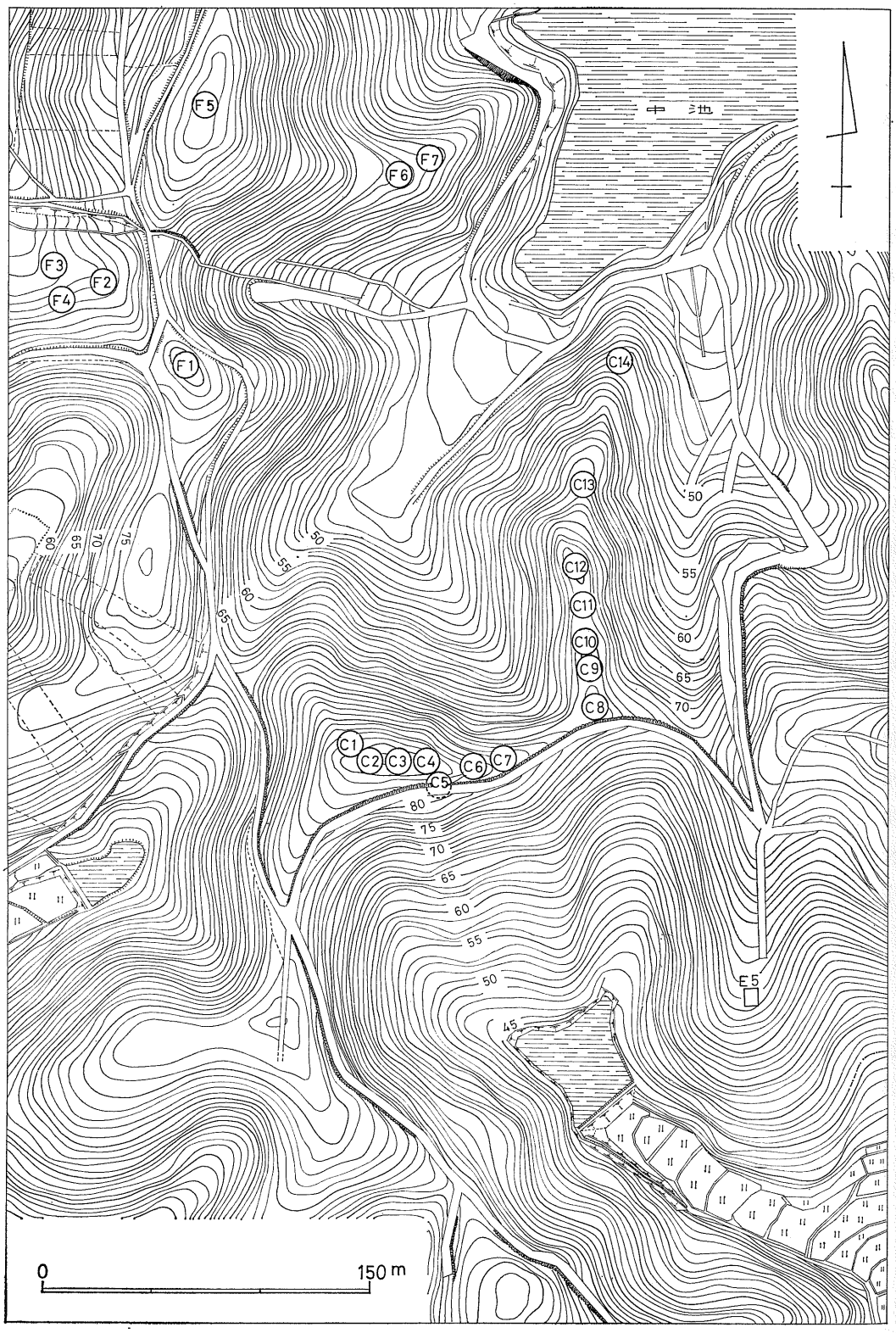
両古墳の発掘調査は山陽町教育委員会が担当することになり，昭和46年1月12日から16日までの5日間実施した。発掘調査終了後，遊離石材を墓壙内に残る痕跡等を手がかりにほぼ原状に復旧して，石棺内には川砂を入れて暫定保全処置をした。

なお今回の発掘調査に際して，第2号墳第2号棺床面一括出土の玉類10点を，調査中に現場で盗難にあって失なった。理由はともあれこうした箱式石棺の数少ない貴重な資料を実測等未了のうちに失ない提示できない不手際を，深く反省するとともにお詫びしたい。

第2節　立地と調査前の概況

野山古墳群は，住宅団地事業用地となった東高月丘陵群を南北に2分する形に，北東から西へ深く入り込んだ谷水田の，谷奥南に位置する野山丘陵上に群在する（P24—図4）。

東高月丘陵群は西方に聳える標高 458.5mの高倉山の東斜面が，山麓近くの標高85m付近で鞍部をつくり，そこを起点として東方の埋積平地に向けて大きく張りだすように，多くの尾根支脈を分



第160図　野山古墳群周辺地形図

出しながら緩やかな起伏をみせて扇状に広がっている。尾根稜線は巾狭ながらなだらかに延びるが，側斜面は侵蝕されて概ね急斜面となっている。

野山丘陵は，当丘陵群の起点となる鞍部から約 200m，南東に延びる尾根主脈上に形成された丘陵頂で，東方の用木山，南方の和田東山等への丘陵尾根支脈の分岐点でもある。丘陵頂部は標高86.75mを測り，尾根走向をほぼ東西においた亀甲形のなだらかなスロープを見せている。東方へ緩やかに下降しながら用木山に連らなる尾根は，丘陵頂から約 150 m，標高86.8mで下降傾斜を一時とめ，北の谷水田を臨む尾根小支脈を分出している。

野山古墳群13基は，この丘陵頂から北へ分出する尾根小支脈上にかけて鍵状に群在する（図4．160）。丘陵頂から東へ延びる尾根上に第1号墳から第7号墳の7基，尾根小支脈上に第8号墳から第13号墳の6基が立地する。なお第7号墳と第8号墳の間35mは，前述の仮設林道工事のため尾根稜線が削平され，古墳の有無は不明だが地形的にみて，1基ないし2基程度存在していた可能性もある。同時にまた本古墳群は，門前池および中池を含む谷水田を取り囲むように，高い密度で群在する宮山古墳群6基，愛宕山古墳群9基，用木古墳群16基，本古墳群13基，四辻古墳群7基，便木山古墳群10基等とともに，一連の古墳群の一環を構成するものである（図4）。

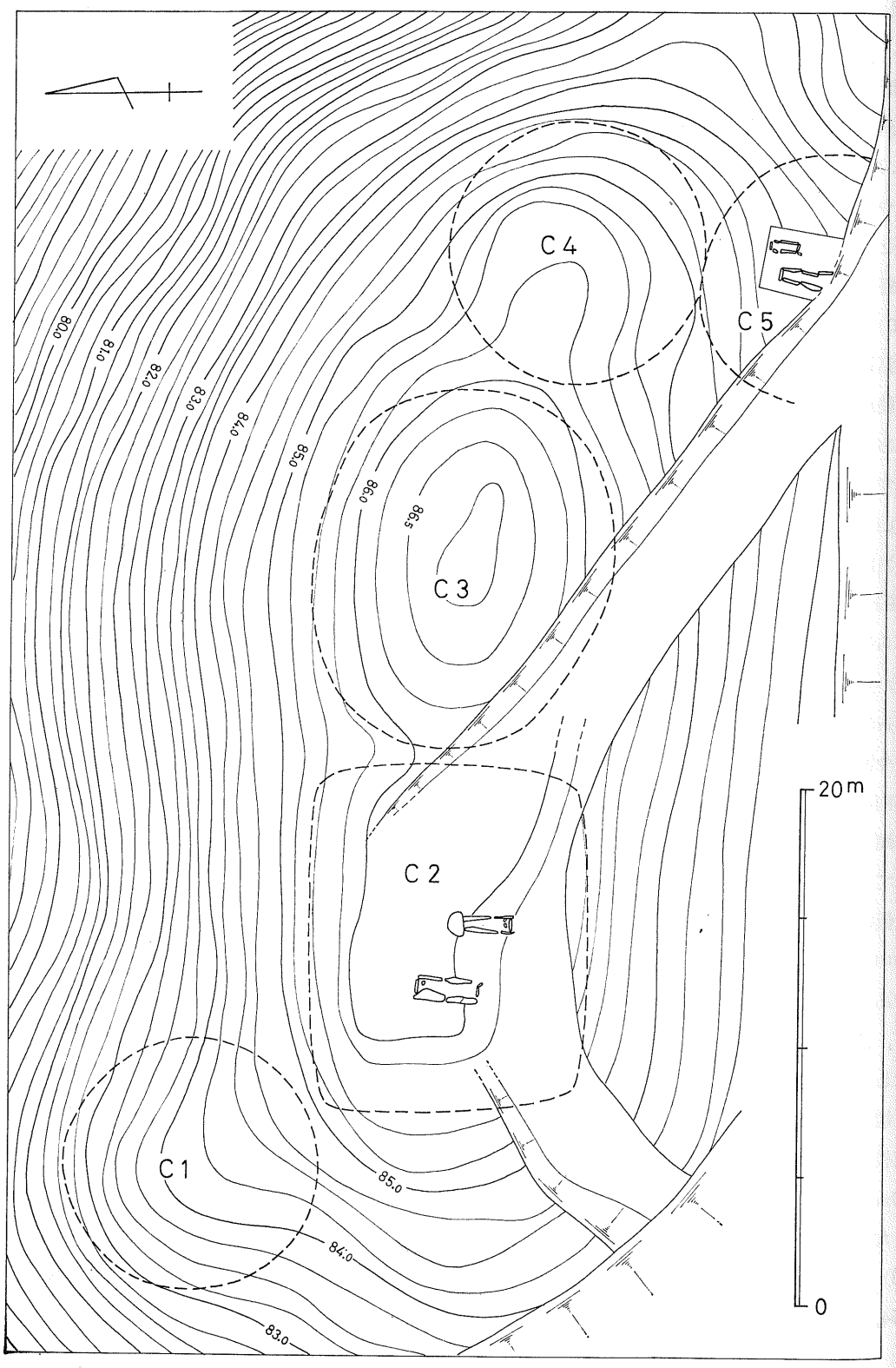
当該地は今次開発事業が計画されるまでは松林であった。また野山丘陵は当丘陵群の中では，標高92mの用木山に次ぐ第2位の高位を占める。そのため谷水田に面した尾根支脈上に所在する古墳からの眺望視野は極めて広い。西方に高倉山嶋を背負い，丘陵群の尾根越しに，砂川流域に拓けた豊かな埋積平地を一望でき，当丘陵群内に所在するほとんどの古墳と，埋積平地に築造された両宮山古墳を中心とする，大形前方後円墳5基等を望見できる立地を占めている。

今回応急発掘調査を実施した第2号墳および第5号墳は，ともに野山丘陵頂に近い尾根稜線とその南斜面に近在する。丘陵頂に第3号墳が立地するが，第2号墳はそれと墳端を接して西方に隣接立地し，第5号墳は第3号墳の東稜線上に隣接する第4号墳の南斜面に，第4号墳と墳端を切り合って立地している。

仮設林道は第5号墳の南半を切断し，第3号墳全域を削平していた。両古墳発見により林道工事は中止されたとはいえ，両古墳ともブルドーザが削平し，古墳の原形は全く知ることができない程である。第5号墳は内部主体の箱式石棺もろとも半裁された形となり，道路法面の約1 m の高さに，南小口を開口した状態で石棺が露呈していた。第2号墳は墳域全体が削平され，尾根走向に直行して並ぶ2基の箱式石棺は，第1号棺は壊滅に近い状態，第2号棺は蓋石1枚を残して他の蓋石は墳外に押しだされ，棺身部だけが埋没した状態で遺存していた。したがって両古墳の外形および規模等の詳細は明らかでない。内部主体の形式や近在の野山古墳群の現状から類推して，ともに径10m前後の低平な小円墳もしくは小方墳であったろうと推察できる程度である。

なお野山古墳群13基の個々の概要については，本書表8山陽団地用地内埋蔵文化財一覧（P25～26）に，外形測量図は本発掘調査概報第1集の，現状保存古墳外形測量図第149図・第150図（P254，255）に掲載しているので参照願いたい。

第3節　野山古墳群第2号墳



第161図　野山第2・5号墳外形現況図

1. 外形と構造

第2号墳はすでに墳域全体を工事のため削平されていて，その外形や規模等の詳細は明らかでない。墳域と思われる範囲の撹乱土を除去して，現存地山生き土上面を剝土調査したところ，地形の高い東側に隣接する第3号墳との境にあたる墳端部に，尾根走向と直行する周湟状溝遺構の痕跡が僅かに認められ，他の側面でもほぼ長方形プランで等高線が繞っていた（図160）。仮に地山生き土面が本古墳築成時の原況を一部でもとどめているとすれば，本古墳の外形は尾根走行に沿って長軸をもつ，12m×10.5m程度の方墳といえるが，現状では断定できるほど明確ではない。

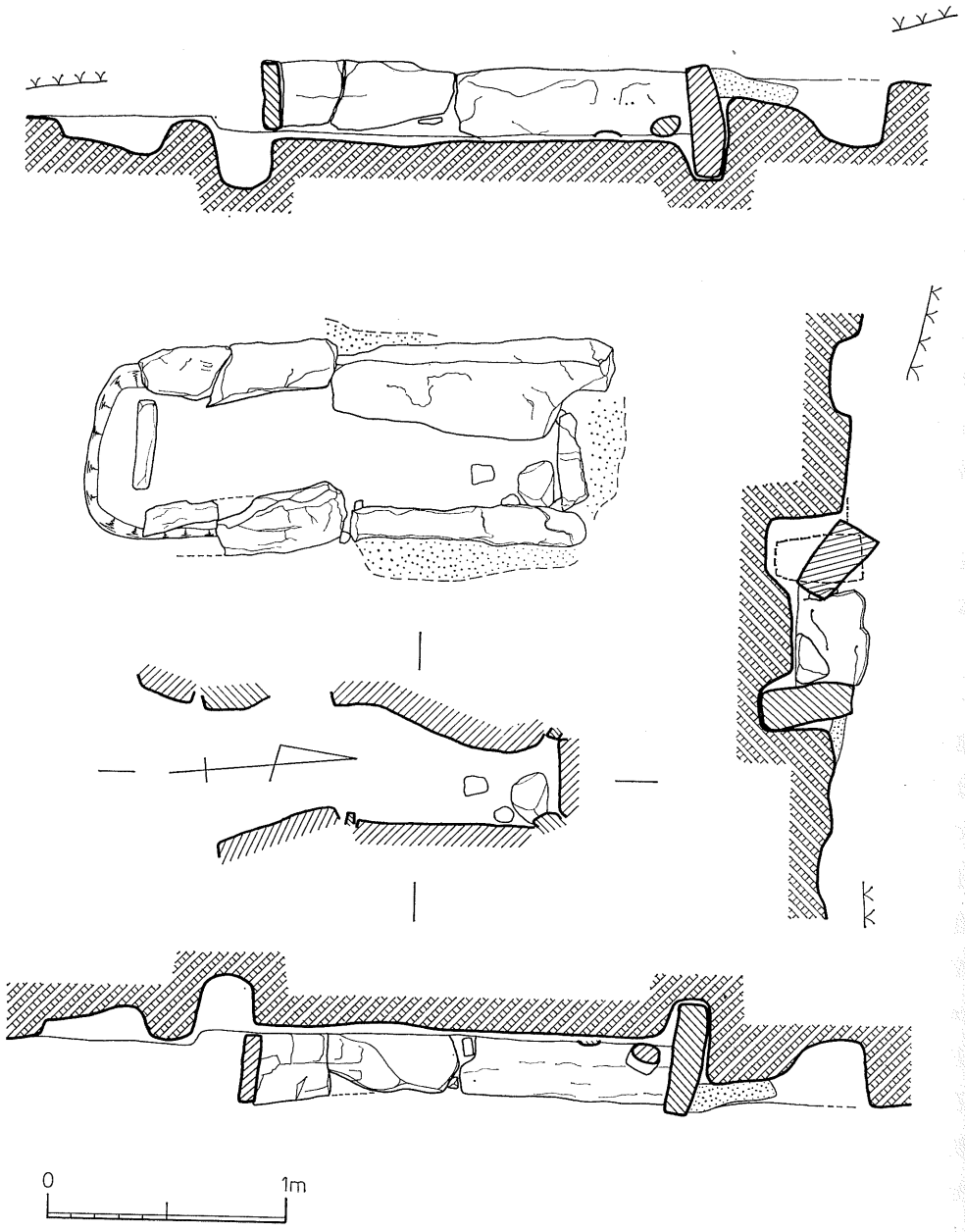
本古墳の内部主体は，尾根走向に直行して並ぶ2基の組合せ式箱式石棺である。第2号棺が墳域のほぼ中央に位置し，第1号棺はその西方に長軸中心間距離で約 2.5m離れて位置している。いずれも上方が削平され，先後関係も含めて詳細は不明である。ほぼ同レベルの現存地山生き土上面から掘り込まれた，長方形の墓壙内に箱式石棺を組んでいる。このことから本古墳の築成を推察すると，丘陵尾根を削平整地して平坦な基盤をつくり，その整地面から墓壙を掘って石棺を埋納し，それを基準として封土を盛って墳形を整えたものと考えられる。したがって墳丘の高さはさして高くはなくて，せいぜい1m前後の低平な小古墳と推考される。

2. 第1号棺

第1号棺はブルトーザによる削平およびその重圧で，壊滅に近い状態であった（図162・図版91）。棺は尾根走向に直行して長軸を北5度東に置いているが，蓋石の全てと棺身南小口石材はすでに墳外に押しだされ，棺側も原況を保つのは北小口と東側面北半の各1個の石材のみで，その他は重機の圧力で西方に押し倒された形状を呈していた。蓋石の形状は不明だが，本石棺の現存形状は推定も含めて下記のとおりである。

棺は丘陵尾根削平整地面の地山生き土層に直接掘り込まれた長さ220cm，巾91cm，平均の深さ約30cmの長方形墓壙内に組まれた箱式石棺である。棺材は当丘陵に数多く産出する花崗岩の，扁平で長方形割り石を広口に立てて使用しているが，その大きさはかなり不揃いである。両側壁を長く小口石材を左右から挾む形に組んでいるが，樋等の設備は施されていない。棺側石材は西側壁2個，東側壁3個である。いずれも棺側天部の高さを水平に揃えるように，各石材の下部を石材の形状に合せて墓壙底面を溝状に掘り込み調整している。溝の深さは墓壙底から浅い部分で10cm，最も深い南小口で23cmを測る。両側壁とも北半部に長さ約1mの，ほぼ大きさの揃った石材を対称的に用いていた。石棺の規模は内法長177cm，同巾40cm，深さ30cmである。

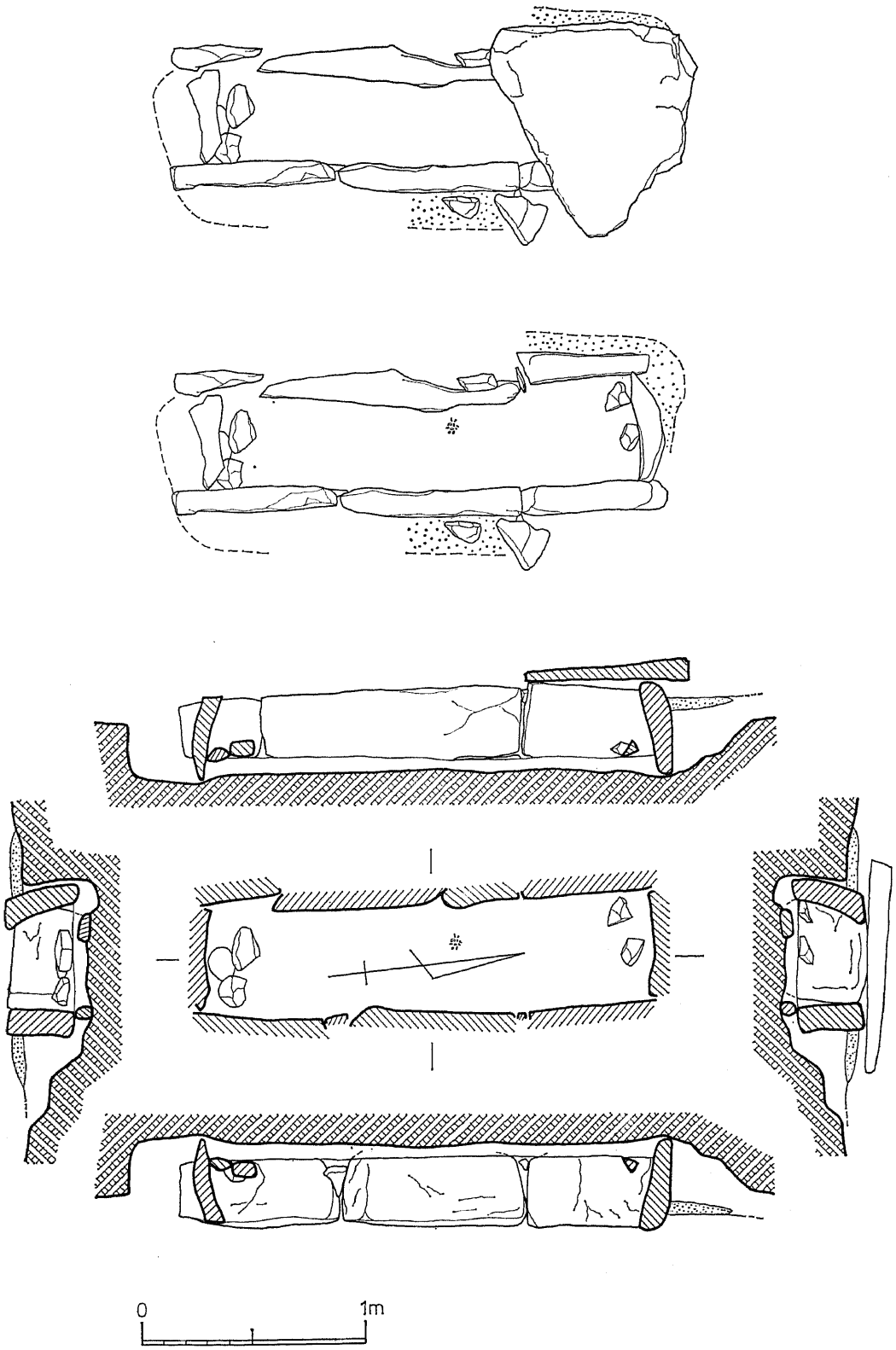
棺床面は水平な面を保ち，北小口部に児頭大の川石1個を用いた枕石が検出される。床面は墓壙底面上に約3cm～5cmの厚さのマサ土で整えられているが，このマサ土は当丘陵を形成する地山と同質の花崗岩媒乱土であるため，床面削平面の自然風化によるものか，或は意識的に敷かれたものか識別が困難である。ただ地山自然風化層にくらべて粘土が少なく粒子の荒いことから，意識的に選別したマサ土を使用した可能性が強い。棺内法の現存石材の表面に赤色顔料の付着がかなり認められ，棺内面に塗布されていたものと推察される。また保存状態の良い棺北半の外周および側壁天部に，青白色粘土が帯状に認められ，多い部分では巾36cm，厚さ12cmを測る。棺側と蓋石間の調整



第162図　野山第2号墳第1号棺実測図

や目張りの他に，石棺上面全体を粘土で覆っていた可能性もある。

棺内遺留品は人骨1体分とガラス製小玉1個である。遺骸は北小口枕石に頭骨を載せ，身展葬の体位で検出したが，風化腐朽のため各部位が断片的に遺存していた。また南半部では工事の際撹乱され，墳外遊離土に押しだされた破片もかなりある。人骨にも赤色顔料の付着が認められ，特に頭骸骨内面の自然体では塗布できない部分にも検出され注目された（図版91）。ガラス製小玉は棺床面遊離出土の1個である（図166—1）。半透明の青色を呈し，胴部最大径0.5㎝，器厚0.48㎝，孔径0.14㎝を測る小粒の玉である。縦断面は太鼓胴形を示すが若干の歪みをみせ，紐とおしの穴はほ



第193図　野山第2号墳第2号棺実測図

ぼ中央に垂直に穿たれている。

3. 第2号棺

第2号棺は墳域のほぼ中央に，尾根走向と直行して埋葬されている。西に並存する第1号棺との長軸中心距離2.5m，小口壁の位置は本棺が南へ1.1mずれをみせる（図161・図版91）。

本棺も第1号棺同様，丘陵尾根削平整地面から掘られた長方形墓壙内に，扁平な花崗岩割り石を用いて，箱式石棺を構築している。林道工事によって損壊されていたが，蓋石2枚分を墳外に押しだされている程度で，その他はほぼ原況をとどめていた（図163）。

墓壙は，掘り込み上端のわかる現存地山生き土上面および墓壙底面とも，長方形プランを呈し，底面はほぼ水平な面を保つ。掘り込み壁面の角度は，南小口および東側壁面はともに上開きに大きく斜傾している。墓壙の規模は上端長272cm，同巾106cm，底面長215cm，同巾77cm，深さ24cmを測る。

棺は墓壙西側壁寄りに偏って位置する。石材はいずれも面取りされ形状も比較的整った厚さ11cm程度の扁平なものを選び，均整のとれた長方形箱形に組んでいる。東西両側壁に各3個を立て，両小口石材をその左右から挾む形に用いている。棺側上面が水平に揃うように，各石材の形状に合せて墓壙底面を掘り込み調整している。掘り溝の深さは3cm～8cmと浅く，石材の幾つかは埋め戻し土の圧力によって内傾していた。棺床面は当丘陵地山生き土を厚さ6cm～8cm敷いて水平面に整地され，両小口部床面に図示したように，花崗岩小割り石2個を用いた各1対の枕石が置かれている。遺骸はすでに消滅して検出できないが，その形状から或いは2体の被葬者が，体位を差し違えた形で埋葬されていた可能性が強い。棺の外法長206cm，同平均巾65cm，内法長186cm，同平均巾40cm深さ32cm，長軸方位北6度東を測る。

棺蓋石は北小口に95cm×92cm×9cmの扁平な板石1枚が残るのみである。その形状から原形は3～4枚で構成していたと推察される。蓋石内面も含めて棺内壁に赤色顔料が認められ，もと棺内全面に塗布していたと思われる。

棺側外周に巾30cm，厚さ7cmの青白色粘土帯が繞らされている。上方は林道工事で撹乱され，蓋石上部とともに詳細不明であるが，現状では墓壙掘り込み面より棺側上端は約10cm～15cm上位にあり，墓壙埋め戻し面の上に棺側の高さまで粘土帯を繞らせたように見える。また棺側上面にも粘土が載り，棺側と蓋石との間隙の調整と目張りの役を果したものと思われる。

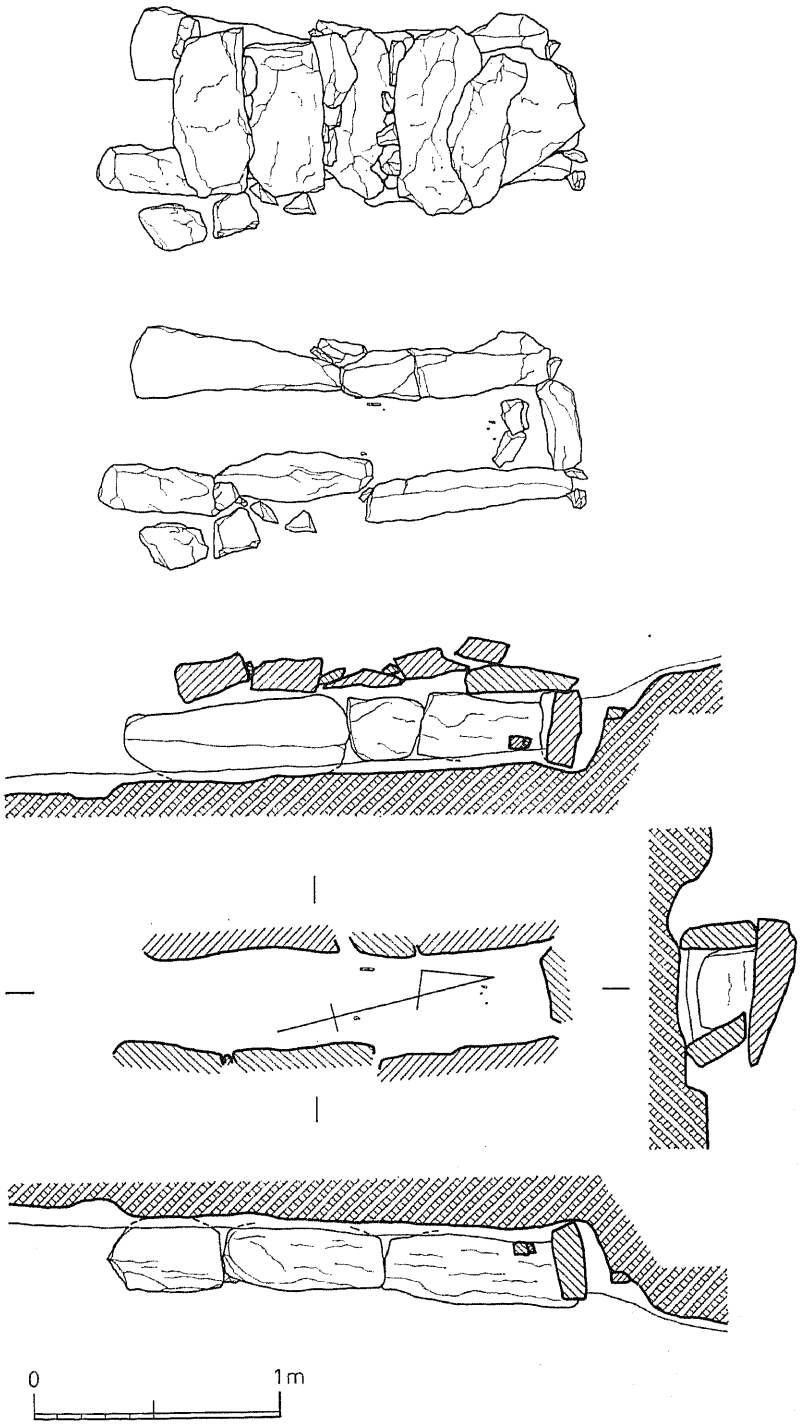
棺床面のほぼ中央の西壁寄りで，碧玉製勾玉1，同管玉7，水晶製切子玉2の玉類10点を一括発見したが，残念ながら取りあげ前に盗難にあって失なった。図版90―4に示すごとくいずれも小形品である。実測図等ここに提示できない不手際をお許し願いたい。

第4節　野山古墳群第5号墳

1. 外形と構造

本古墳は墳丘南半を林道工事で切断されているうえに，植林用の砂防段が設けられた傾斜面に位

置して，丘陵表土層の風化流失と二次埋積による地形変化が著しく，トレンチ調査で墳域確認を試みたが明確にできなかった。林道法面に露呈する第1号棺の調査に伴ない，その東に隣接して平行に並ぶ第2号棺が発見され調査した。両内部主体の形状および北に隣接する第4号墳との関連等か



第164図　野山第5号墳第1号棺実測図

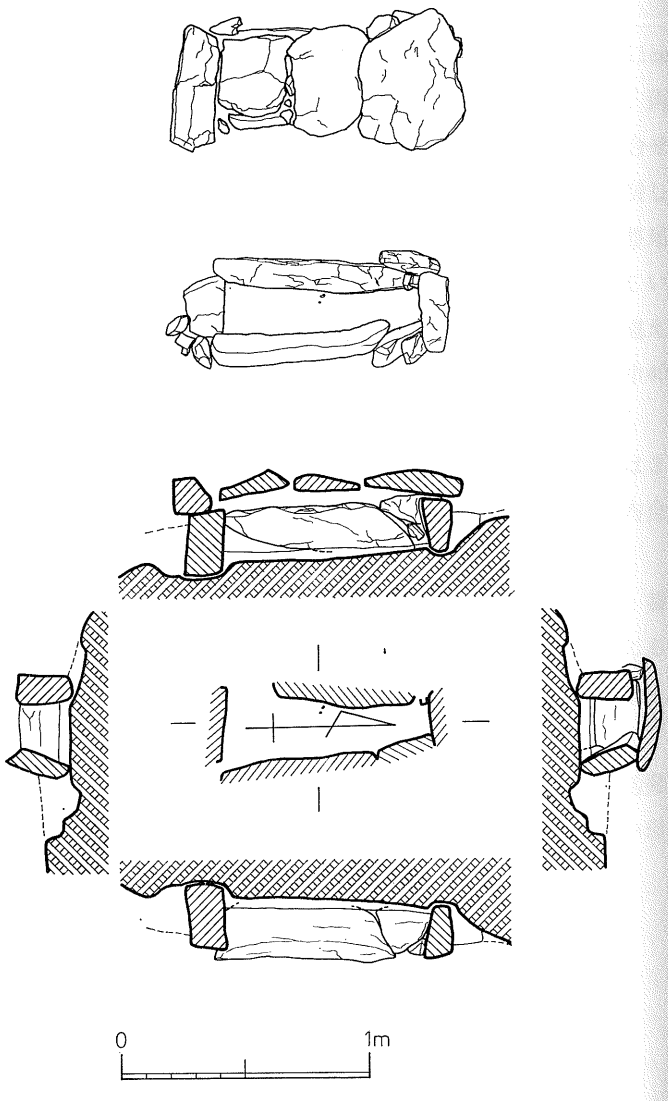
ら，もとは径10m，墳高１m前後の低平な小円墳であったろうと推察できる程度である。

本古墳の内部主体は，尾根走向および当該地の等高線に直行して並列する，２基の組合せ式箱式石棺である。両棺の長軸線距離１m，東に位置する第２号棺は第１号棺に較べて，北小口で約60cm地形の高い北に偏っている。両棺とも棺の形状と規模に合せて，丘陵斜面を切り込んで平坦面をつくって箱式石棺を組み，その上に被土を盛って墳形を整えているが，現状ではその先後関係は明らかでない。なお，両棺とも棺石材は当丘陵に産出する花崗岩であるが，面取りされていない自然転石が多く用いられ，大きさや形状はさほど精選されていない。

2. 第１号棺

南小口を林道工事で切断されている石棺である。現地表下約70cmに棺床面を置いているが層序的な観察が不能のため，墓壙掘り込みの有無等の詳細は明確にできない。現存地山生き土上面でみると，地形の高い北斜面を巾約90cm深さ約40cm掘り込み，その南側に長さ 220cmの長方形平坦面を削平整地して，そこに本石棺を構築している。

棺は南小口を欠失していたが，削平面に石材抜き取り跡が残存しほぼその全容を知り得た。棺は東側壁３個，西側壁２個，両小口各１個の石材で，小口石材を左右から挾む形の長方形箱形に組み，棺側の高さは水平に揃うように，各石材の下部を掘って調整していた。蓋は30cm×60cm大程度の石材６個を並べているが，その間隙は小割り石を上に並べて塞いでいる。粘土等による目張りは施されていない。棺床面は丘陵地山と同質のマサ土を厚さ３cmばかり敷いて整えているが，地形の低い南に若干下傾し，両小口での比高８cmを測る。床面北小口に小割り石２個を用いた枕石１対を検出したが被葬者の遺骸は残存しない。また床面北半でかすかに赤色顔料の広



第165図　野山第５号墳第２号棺実測図

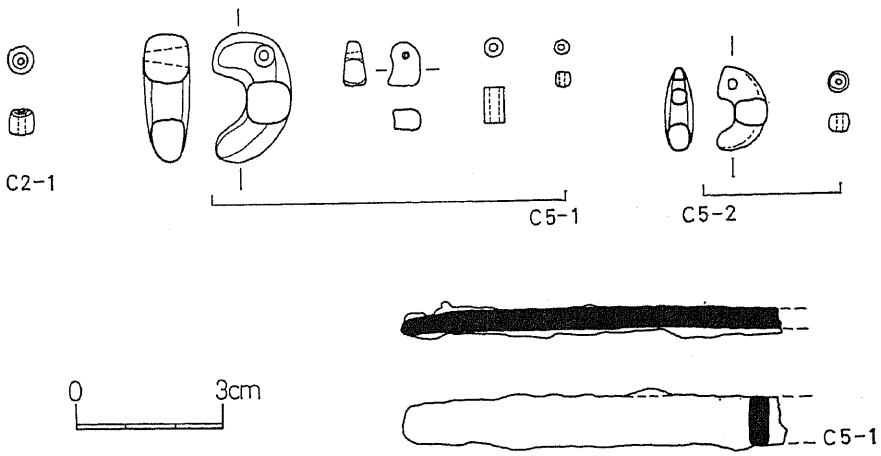
がりが認められたが詳細は明らかでない。棺の規模は，蓋石推定長200㎝，棺身外法長190㎝，同巾68㎝，同全高47㎝，棺内法長168㎝，同巾38㎝，同高29㎝，長軸方位北14度東を測る。

副葬品は枕石の南に接する床面に小勾玉，管玉，ガラス製小玉各１点と，北小口から南へ67㎝の床面中央に勾玉１，その西側壁に接して鉄器片１の計５点が発見された（図166）。

鉄器片は一端を折損しているが，現存長7.8㎝，巾0.72㎝，厚さ0.45㎝の断面長方形を呈する扁平な平鉄である。鍛造によるつくりで一見刀子柄を思わせるが，端部が若干そりをもち鉈の可能性が強い。勾玉は計２点出土したがいずれも翡翠製である。(1)は床面中央単独出土の勾玉である。青緑色のＣ字形を呈するが，頭部側面が平滑な面をもちやや角ばった感じがする。紐とおし貫孔は逆Ｃ字形において一方から施されている。高さ2.6㎝，巾1.6㎝，頭部厚0.9㎝，尾部厚0.7㎝，孔径は大きい方で0.4㎝，小さい方で0.2㎝を測る。(2)は頭部に対して尾部の大きい扁平なつくりの小形品である。黄緑色を呈し，用木古墳群第４号墳第11主体出土のものと極めてよく類似する。高さ0.86㎝，巾0.7㎝，頭部厚0.35㎝，尾部厚0.47㎝，紐とおし孔は逆Ｃ字形に置いた一方から穿たれ，径0.1㎝を測る。管玉は碧玉製で緑色を呈する小形品である。高さ0.7㎝，径0.35㎝，貫孔は一方からなされ径0.15㎝を測る。ガラス製小玉は半透明の青色を呈する小粒である。胴部最大径0.3㎝，器厚0.3㎝を測る。

3. 第２号棺

第１号棺の北東に隣接して並ぶ小形石棺である。第１号棺同様丘陵斜面を地山生き土層に達するまで切って，平坦面を削平整地して石棺を構築している。両側壁各２個，両小口各１個の石材で箱形に組んでいるが，両小口石材が平坦面を掘り込んで固定しているのに較べて，両側壁は地山生き土面に載せているだけである。そのためか東側壁は土圧によって内側へかなり押しだされた形状を呈していた。蓋石は４個の扁平な板石を並べ，その間隙は若干の小石を載せて塞いでいる。棺床面は地山マサ土を２㎝～５㎝敷いて平らな面に整えているが，地形の低い南側にやや下傾して両小口での比高２㎝を測る。北小口床面に小石材１個を検出したが遊離しているため，枕石の可能性があるものの断定できない。また粘土および赤色顔料の塗布等の痕跡は認められなかった。棺の規模は



第166図　野山古墳群第２・５号墳出土遺物

蓋石全長116㎝，同平均巾45㎝，棺身外法長105㎝，同平均巾41㎝，同高34㎝，棺身内法長81㎝，同最大巾29㎝，最小巾12㎝，平均巾22㎝，同高20㎝，長軸方位北1.5度東を測る。

副葬品は，床面北小口から南へ約45㎝の西側壁近くに滑石製勾玉１点と，その近くからガラス製小玉１点の計２点を出土した（図166）。 勾玉は青灰色を呈するC字形小形品である。頭部が扁平となり図示したごとく直線上を呈している。高さ1.7㎝，巾 1.0㎝，頭部厚0.3㎝，胴部中央厚0.55㎝，尾部厚0.5㎝を測る。紐とおし孔はC字形に置いて上方から穿たれ，孔径0.2㎝を測るが孔の縁部は糸ずれによる磨耗痕が見られる。ガラス製小玉は第１号棺同様，半透明青色を呈する小粒品である。胴部径0.42㎝，厚さ0.35㎝，孔径0.1㎝を測る。

第５節　両古墳の築造年代

野山古墳群第２号墳および第５号墳の築造年代については，ともにその手がかりとなる伴出遺物が少なく，明確にすることができない。両古墳はともに同一立地に近接して営なまれ，しかもほぼ同規模同一手法によって埋葬されているところから，たとえそれが世代を追った奥津城としても，さして年代巾のあるものとは考えられない。ほぼ同一編年単位内での葬送と考えられる。

両古墳の立地，内部主体構造，出土の玉類などを総合して推考すると，明らかに後期古墳といいきれる材料は何もない。少くとも須恵器を伴出する以前の所産と考えられ，前記古墳としての性格をより多くもっている。当東高月丘陵群内に所在し，発掘調査を実施した組合せ式箱式石棺を内部主体とする，四辻古墳群第２号墳・第３号墳，用木古墳群第16号墳などと共に，一応５世紀代の埋葬と考えるのが妥当のようである。

第６節　ま　と　め

1. 野山古墳群第２号墳および第５号墳は，ともに標高約85ｍ，埋積平地との比高約60ｍの，丘陵頂に近い尾根上に近在する低平な小古墳であったと推察される。
2. 第２号墳は方墳もしくは円墳・第５号墳は円墳と考えられる。いずれも径10ｍ，墳高１ｍ程度と推定されるが，ともに林道工事のため大きく破壊されていた。
3. 両古墳とも葺石・埴輪などの外部施設は検出されなかった。
4. 内部主体は両古墳とも，尾根走向に直行する組合せ式箱式石棺各２基である。両古墳とも墳丘封土の盛りあげに先行して，丘陵地山削平面に掘り込んだ長方形墓壙内に箱式石棺を構築していたが，各古墳内における２棺の先後関係は明確にできなかった。
5. 各棺床面には小石材２個を用いた枕石が置かれているが，第２号墳第２号棺は南北両小口に各１対の枕石が検出され，２体埋葬の可能性を示し注目された。
6. 副葬遺物は各主体ともきわめて簡素である。第２号墳第１号棺は床面が撹乱されていたため明確ではないが，遊離ガラス製小玉１，第２号棺は碧玉製勾玉１，同管玉７，水晶製切子玉２の計10点，第５号墳第１号棺は翡翠製勾玉２，碧玉製管玉１，ガラス製小玉１，および小鉄器（鉋？）片１の計５点，第２号棺は滑石製勾玉，ガラス製小玉各１の計２点である。いずれも小形品で古い形態を呈している。
7. 両古墳の築成時期は明確には決められないが，立地，内部主体構造，出土遺物などの特徴から一応５世紀代の所産と考えられる。

三　蔵　畑　遺　跡

第１章　序　説……297
第２章　遺跡の立地……297
第３章　遺構の出土状況……299
第４章　出土遺物……313
第５章　遺跡の年代……327
第６章　まとめ……328
三蔵畑遺跡土師器窯の考古地磁気測定……329

三　蔵　畑　遺　跡

第1章　序　　説

三蔵畑遺跡（略記号Y11）は，岡山県赤磐郡山陽町河本字三蔵畑 105番地に所在する。平安時代末ないし鎌倉時代初頭の，土師器土鍋等を焼成した古窯址を中心とする生産址である。

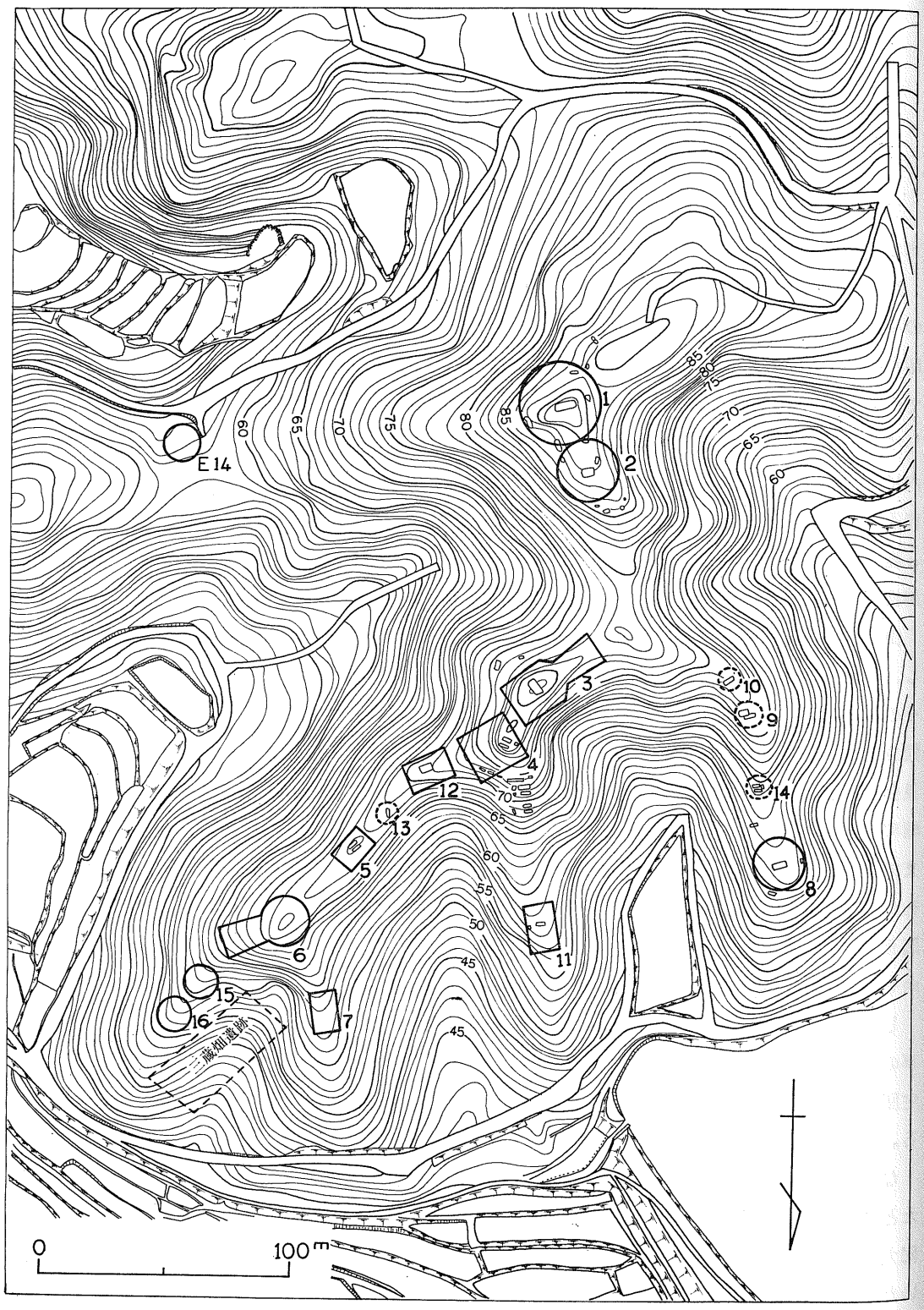
当該地は岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地となった，東高月丘陵群内に形成された谷懐状の小支谷に位置するが，事前の分布調査の段階では確認されていなかった。岡山県と山陽町の間で昭和49年４月１日付締結の山陽団地埋蔵文化財発掘調査第11次委託契約に基づき，その一環として山陽町教育委員会は，用木古墳群第７・15・16号墳[①]の発掘調査を実施した。その際，古墳と複合して周辺丘陵上に広がる弥生時代集落址が発見され，さらに念のため谷部に向けて設営した試掘溝内に，円形ピットを偶然に掘りあて，本遺跡発見の端緒となった。この円形ピットは先年岡山県教育委員会が，山陽新幹線建設に伴い発掘調査を実施した，二子御堂奥古窯址群の４号窯前庭ピット[②]と極めてよく類似することや，周辺部の外表精査の結果，僅かではあるが土師器片を包含する灰層が検出されるなど，古窯址の存在する可能性が強まったのである。

山陽町教育委員会では新発見の両遺跡を，集落址を新宅山遺跡[③]，本遺跡を三蔵畑遺跡として登記し，早速，岡山県教育委員会および岡山県土木部等関係機関と，その取り扱いについて協議した。その結果両遺跡とも住宅団地の造成計画上，現状保存することは技術的に困難であると結論され，緊急発掘調査の対象となった。両遺跡の発掘調査は前記委託契約の変更契約を行い，山陽町教育委員会が用木古墳群３基の発掘調査に引き続いて実施した。すなわち，用木古墳群３基の発掘調査は昭和49年７月１日から同年８月19日まで，新宅山遺跡の調査は昭和49年７月22日から同年８月21日までをかけて併行実施した。また三蔵畑遺跡の発掘調査は昭和49年11月21日から同年12月27日までをかけて実施した。なかでも三蔵畑遺跡の発掘調査は，当山陽団地開発事業地内の埋蔵文化財発掘調査として，用木古墳群第３号墳において昭和44年12月１日，最初の鍬入れをして以来実に５か年余を要しての，最終発掘調査遺跡となり感慨深いものがあった。

しかし，これら発掘調査を実施した３遺跡も，調査終了後の昭和50年２月15日，住宅団地造成工事の犠牲となって，その基盤である丘陵もろとも削平されて消滅した。今は幾何学的な階段状の住宅団地に造成され，行政区画も山陽団地３丁目と改められて，昔日の面影は全く存在しないのである。

なお本遺跡の土師器窯の残留地磁気測定について，福井大学教育学部広岡公夫助教授にお願いしたところ快諾をいただき，お忙しいにもかかわらず当方の調査日程に合せて，昭和49年12月18日に同大学学生山本芳夫君とともに来山，現地調査されたうえに，その測定結果について玉稿をいただいた。はじめに記して厚く謝意を表したい。

第2章　遺跡の立地



第167図　三蔵畑遺跡周辺地形図

本遺跡は，東高月丘陵群内の谷水田に面した，丘陵尾根小支脈間に形成された谷懐状小支谷の，丘麓斜面から谷頭にかけて立地している（P24—図4）。

当丘陵群の外縁裾部が，埋積平地と接する北東端谷口を塞ぐように築成された門前池から，南西に向けて緩傾斜で深く入り込んだ谷水田の南縁に沿って，丘陵群のほぼ中央に位置する標高92mの用木山から北東へ，なだらかな起伏をみせながら下降する丘陵尾根が延びている。この丘陵尾根には用木古墳群16基が立地しているが，用木第6号墳の位置する標高67.6mを丘陵尾根突端部としてそこから北と北東に向けて下降しながら，谷水田に至る尾根小支脈を分出して終っている。本遺跡はこの谷水田に面した2条の丘陵尾根末端小支脈の間に形成された，谷口の巾約40m，谷の奥行長約50m，谷口底の標高約35mの，谷懐状小支谷の東側斜面から谷頭にかけて立地しているのである（図168・図版92）。

当該地は今次開発事業が計画された時点では，谷部から丘陵側斜面下半にかけては雑木林，丘陵尾根部から側斜面上半にかけては松林であった。しかし，発掘調査に先立つ立木伐採後の地形は，谷筋は 100分の26とかなりの傾斜を示し，流水の作用のためか土砂の二次堆積と流失痕が著しく，丘陵側斜面は急斜面となり植林のための砂防段がほぼ全域に施されている。また西谷口から谷頭にかけての丘裾部は開墾されて，かっては5枚の畑として耕作されていた痕跡をとどめ，谷口部には炭焼窯1基が築かれているなど，原地形はかなり大きく改変されていた。こうした地形的条件のなかにあって，標高約42mほどの斜面にほぼ同レベルの高さで，東谷口から谷頭にかけて馬蹄形状に繞る，巾の狭いテラス状の造成面の痕跡が認められる。実は後の発掘調査の結果，このテラス面に本遺跡は立地していたのである。

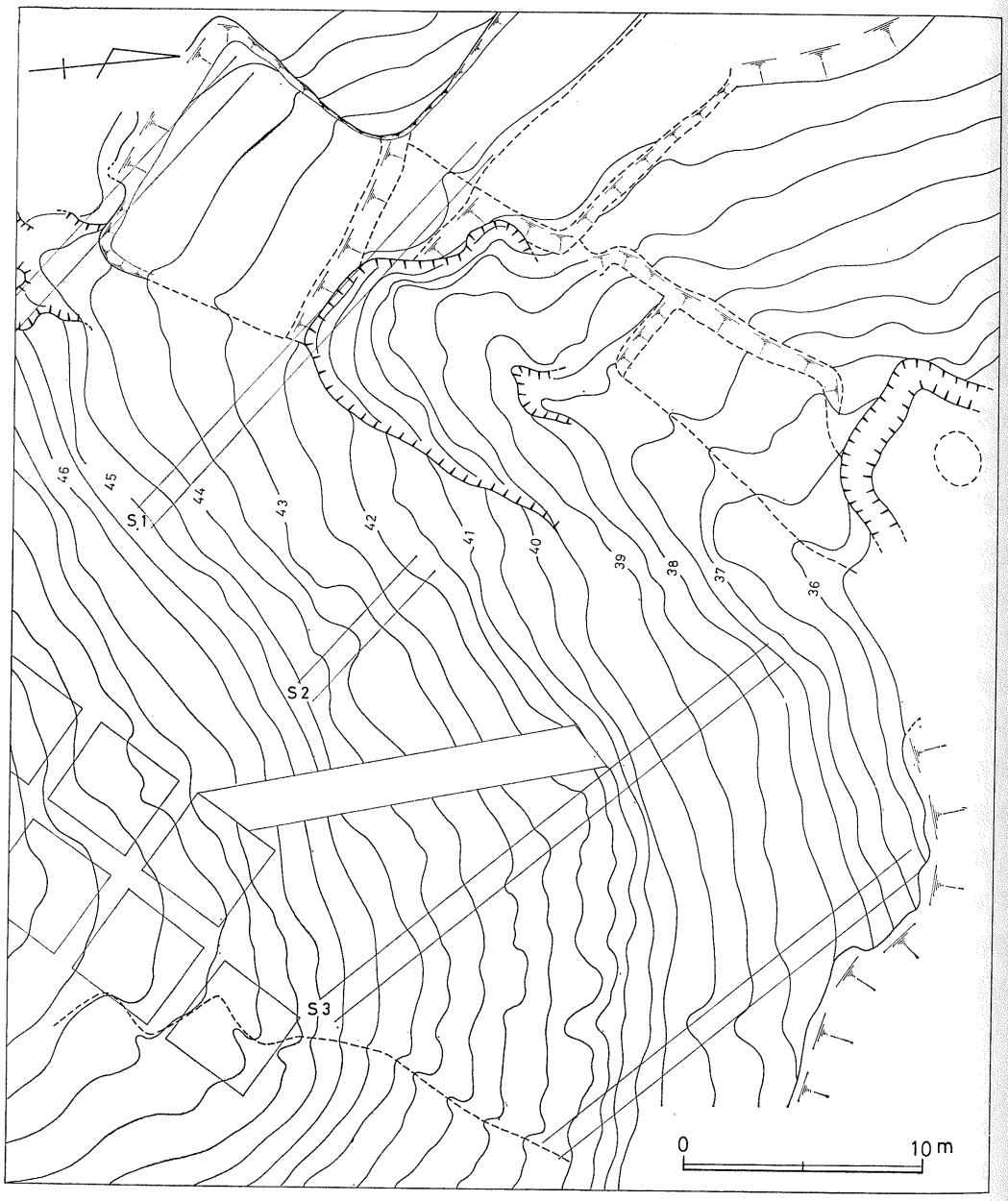
なお，当東高月丘陵群内において本遺跡とほぼ同時代と思われる遺跡は，本遺跡から谷水田一つを隔てた南東約300 mの愛宕山丘陵上に，白磁や八稜鏡を副葬した土壙墓および古備前蔵骨器群[4]が存在し，また丘陵尾根支脈一つを隔てた北方約350 mの門前池西方遺跡[5]では，平安時代大形建物群とともに，鎌倉時代土器片も発見されている。

第3章　遺構の出土状況

1. 遺跡の概況

発掘調査の結果本遺跡の各遺構は，前記小支谷の谷頭に近い標高約42mの東緩斜面から北東へ向けて，丘陵側斜面の等高線に沿って深く掘り込み，地形の低い谷側に埋めだして造成した，ほぼ同レベルの長さ約25m，巾約4 m～5 mの巾狭なテラス状平坦面に集中して所在していた（図169・図版92）。

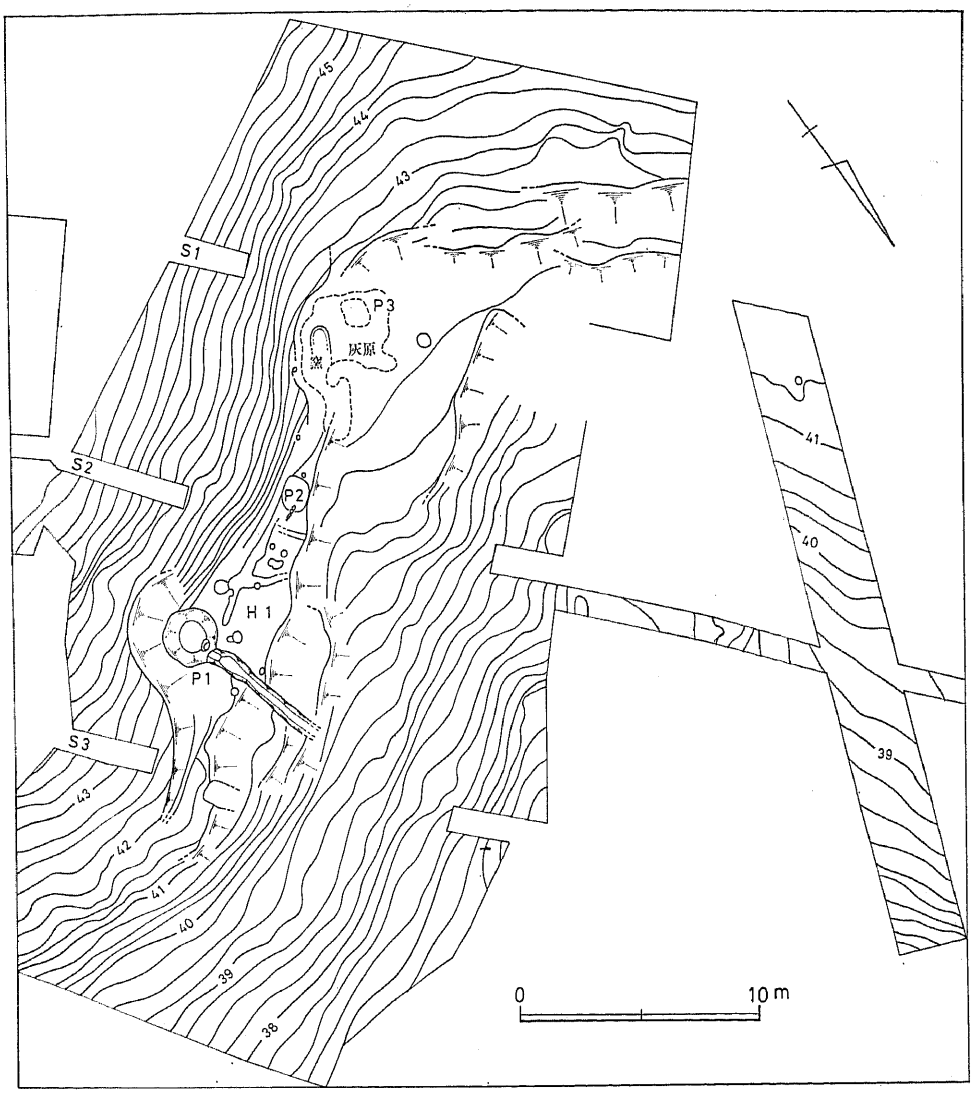
このテラス状平坦面造成のための丘陵斜面掘り込みの深さは，現状でそれが確認できる現存地山生き土面で，緩傾斜の谷頭部で約1.2m，急斜面となる中央部で約2.1mに達し，地形の低くなる北東丘陵末端部では自然消滅の状態を示す。また地形の低い側の谷部は，造成面の幅員を拡大するために当然埋めだされていたと思われるが，現状ではすでに流失していて，地山生き土面を直接掘り込んだ削平面のみしか確認できない。造成面と谷筋との比高は谷頭部で約1.5m，中央部で約4.5m



第168図　三蔵畑遺跡調査前地形図

北東端部で約7mを測る。さらにこの平坦面が谷頭部を馬蹄形状に繞って，谷の西斜面におよぶ可能性や，一段降っての谷部にも遺構の存在を確認するため，谷部全域に全面剝土に近い試掘を試みたが，西丘裾部は開墾畑地となって削平され，谷部は流水作用等によってともに原地形が大きく変貌していて，若干の土器片等を採集したほかは，遺構等は何も検出できなかった。したがって本遺跡の遺構の広がりは，地形的には今少し広い可能性があるものの，現状では図示した約23m×5mの範囲に限定される。

このテラス状平坦面の主軸走向は，谷筋の走向にやや斜行して北60度東を示す。各遺構は北東側

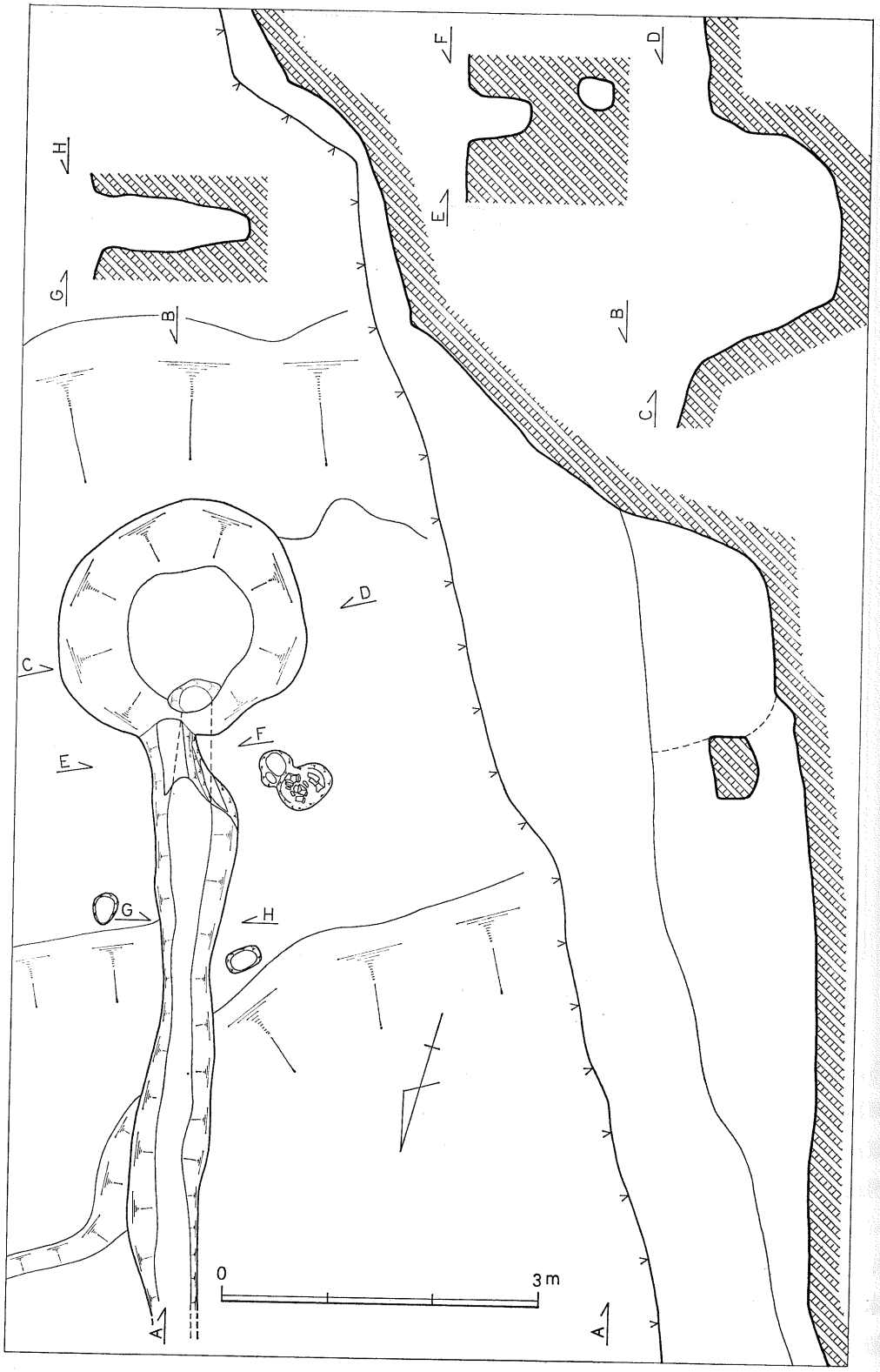


第169図　三蔵畑遺跡遺構配置図

から，排水溝を伴う円形ピット，掘立柱の建物を想起させる柱穴列，楕円形ピット，平窯址および土師器片を多く含む灰原と，その灰原の下層に複合する小ピットが，直列状に集中して群在する。灰原出土の土器片の観察から，土鍋およびカマド等を中心とした平安時代末ないし鎌倉時代初頭の工房址と推察される。各遺構の概要については，以下順を追って記述を進めることにする。

2.　円形ピット（図170・図版95，96）

本遺構群の東北端に位置する排水施設をもった水溝状の円形ピット（Ｐ１）である。丘陵側斜面に造成されたテラス状削平整地面の地形の高い側の南切り込み壁面に接して円形ピットを掘り，地形の低い側の北谷斜面に向けて，平坦部を横切るように深いＶ字形の排水溝を設けている。ピットへの排水溝取りつけは，下底部に暗渠排水施設と，その上方にオーバーホロー排水施設の二段が設備



第170図　三蔵畑遺跡円形ピット実測図

され注目された。

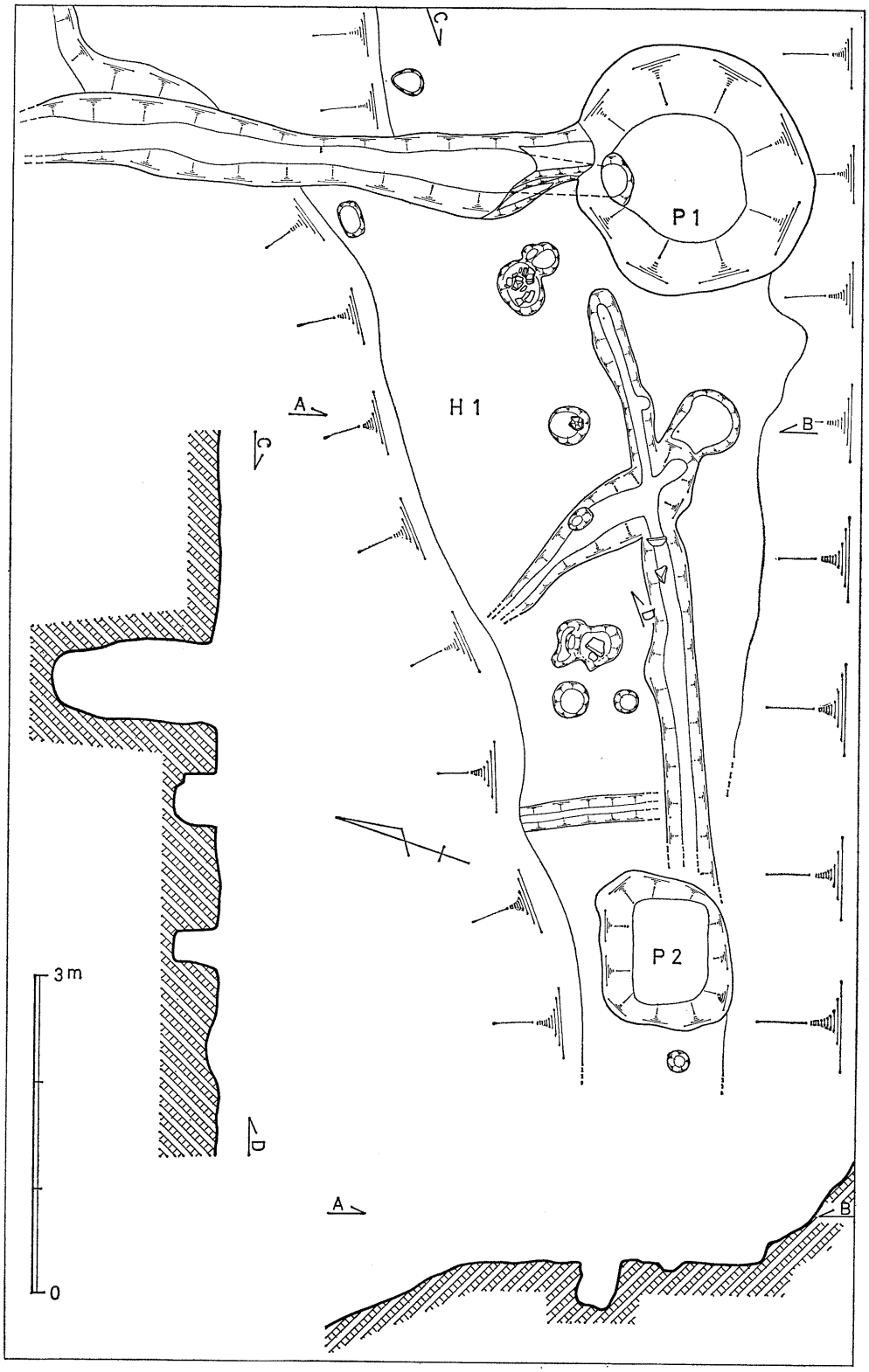
ピットは現地表下約1.5mに埋没している削平地面の，丘陵斜面を深さ約2.1mも切り込んだ高い崖状の南壁面に接して，半球形状に掘り込まれている。したがってピットの南掘り込み面は，削平整地面と段状とはならず，丘陵南崖面とそのまま連続的に連らなっている。ピットの規模は，現況で掘り込み上端がわかる削平整地面の現存地山生き土上面で，東西径238cm，南北径210cm，底面径は両方位径とも130cm，深さ125.5cmを測る。ピット掘り込みの壁面は比較的硬い花崗岩媒乱土であるが，いずれも丸味をもった滑らかな面を呈している。ピットの内部も削平整地面上と同様，当丘陵を構成する花崗岩風化土によって埋没しているが，下底部に粒子の微細な粘質土の付着痕跡が僅かに認められるほかは，その他土器片等の遺物類の埋積とか混入は全く認められなかった。丘陵側斜面の傾斜面の傾斜度や当該地の地質構造からみても，本遺構を廃棄した後比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。

排水溝はピットの北壁部に接続して，丘陵原地形の等高線に直行する北向きに，削平整地面を横切るようにして設けられ，地形の低い谷斜面に自然放流する形状を呈している。ピットと排水溝との取り付け部にあたる排水施設は，下底部にトンネル状の暗渠排水設備と，その上方にオーバーホロー形の自然排水設備をもつ，上下二重構造となっている。すなわち，上部の自然排水口はピットに接続する部分の排水溝の下半を，長さ約60cmばかり堤防状に掘り残して，U字溝形の排水口を施設している。この自然排水口の上端巾78cm，底部巾32cm，深さ56cm，ピット底面からの高さ61cmを測る。下底部の暗渠排水口は，ピット下底部の排水口に近い部分を，径約50cmの円形プランで深さ約20cmばかり掘りくぼめて集水部をつくり，そこから前記自然排水口の下方の地山生き土層に，巾30cm，高さ34cm，底部長約70cmの，断面形が縦長の楕円形を呈する隧道を穿っている。この上下の排水口はその中心線で対比すると，暗渠排水口の方が西方に22cmずれている。排水路は両排水口を受けるため，深いV字溝となっているが，掘り込み上端の巾は狭い。末端部の埋めだし整地部が流失していて全容は明確でないが，現存溝底長 590cm，下傾落差49cm，溝上端最大巾80cm，最小巾46cm，平均巾約60cm，溝底平均巾約20cm，平均の深さ約 120cmを測る。

この円形ピットは排水施設を有する等その構造からみて，明らかに水の使用を対象として設けられたものである。しかし当該地には湧水はなく集水路も敷設されていない。水はすべて眼前の谷部から採取搬入したものと考えられる。また暗渠および自然排水口の両排水施設をもつことは，貯水と完全排水を繰り返して行なったことを物語り，流水谷に近いことなどからも，単なる飲用等の生活用水の貯水漕ではないと思われる。本ピットの南西約15mには土師器窯址が存在し，前述の二子御堂奥古窯址群[6]の例からも，土師器生産に関係する粘土撹拌漕あるいは沈澱漕等の，工房施設の一つと考えるのが妥当のようである。

3. 掘立柱の建物（図171・図版95）

円形ピットとその南西約 6.5mに位置する第2ピットとの間の削平整地面に，図示したごとく，丘陵斜面を掘り込んだ南崖面に沿うように，現存長約6mの浅い溝状遺構と，間隔や配置はかなり不規則ではあるが，それとほぼ平行する柱穴約10個を検出した。



第171図　三蔵畑遺跡建物址実測図

溝状遺構はその中ほどで，削平整地面を横切って地形の低い谷斜面に達する溝を分岐し，西端部でも直接崖沿いの溝に連結はしていないが，同様の溝１条が認められる。溝は上端平均巾約40㎝，同深さ約８㎝，横断面はカーブの緩い円弧状を呈する浅い溝ながら，その構造からみて，地形の高い丘陵斜面から流入する雨水等の排水を意識して，敷設されたものと思われる。

溝が交差する部分の南崖寄りに，溝に連らなるような形状で，上端巾62㎝，同奥行長60㎝，底面巾46㎝，同奥行長51㎝，深さ16㎝の馬蹄形の浅い掘り込みが存在する（図版97―１）。この掘り込みの内部および周辺部には，灰および土師器土鍋片等が多量に検出され，当初は古窯址の可能性も考えられたが，調査の結果これらの土鍋類の多くは二次的火焔を強く受けていて，炊飯あるいは煮沸に使用されていた。また遊離土器片の中には，瓦器に近い須恵器片とか，青磁片や緑釉片もかなり含まれ，当該地において煮炊きが行なわれたことを物語り，この馬蹄状掘り込みはカマドの可能性が強いと推察される。

柱穴は約9.6ｍの範囲にほぼ直列状に位置するものの，その配置や柱穴の形状はまちまちで，全体としてまとまりをもった建物の形態は示さない。柱穴は小さいもので径22㎝，深さ12㎝～20㎝，大きいもので径50㎝，深さ36㎝～41㎝を測り，柱穴内にも土鍋片等の土器片や，拳大の花崗岩角礫の混入するものもあった（図版97―３）。柱穴の配置を検討すると２間ないし３間で直列状に通るものも存在し，前記溝状遺構やカマド等の存在から，本古窯址に伴う作業小屋的な小規模の掘立柱の建物を，同一立地で数次にわり建て替え使用したものと推察される。しかし，当該地は丘陵削平整地面の巾が狭く，柱穴列の南側は溝状遺構に接して崖面が迫り，北側は 1.5ｍで谷斜面となっている。地形の低い谷斜面部は埋め出し整地を行なって，平坦面の拡幅を計っていたと思われるが，現状では埋め土部分はすでに流失していて精査を試みたが，現存柱穴列と対応できる柱穴は検出することができなかった。

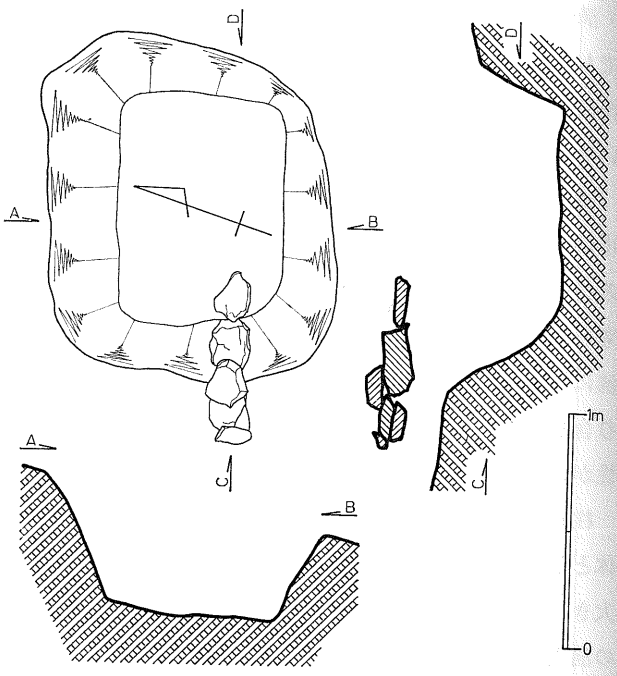
4. 第２ピット（図172・図版97）

掘立柱建物の推定される柱穴群の西端部，南崖沿いの溝状遺構と切り合うようにして，丘陵原地形の等高線と平行する北70度東に長軸中心線をおいて，削平整地面から掘り込まれた隅丸長方形のピットである。現存の削平整地面の標高は41.45ｍを測るが，整地面巾は約1.2ｍと最も狭い部分に位置するため，本ピットの南掘り込み面は，幾分丘陵南崖面に切り込んでいる。ピットの規模は，掘り込み上端のわかる現存地山生き土面での長さ142㎝，同巾121㎝，底面長100㎝，同巾71㎝，平均の深さ41㎝を測る。

ピットの掘り込みの角度はいずれもかなり斜傾し，縦横断面とも上方に広がる台形状を呈し，底面はほぼ水平面を保つ。ピットの内部は削平整地面上と同様に，当丘陵を形成する花崗岩風化土で埋没し，土器片等の遺物やその他の施設物等は何も認められなかった。したがって現況からでは本ピットの使途は明確にできない。本遺跡の各遺構群との関連，特に後述の古窯址窯口と4.5ｍの距離に位置することなどから，当土器生産址施設の一環としての必要施設であったろうと推測できる程度である。

なお今までふれなかったが，本ピットの上方に東小口外方からピット直上にかけて，児頭大の花

崗岩割り石６個を約72㎝の長さで直列状に並べていた。この石列は削平整地面の現存地山生き土の上方約15㎝に位置し，本ピット埋没後に置かれたものであるが，現状では本ピットとの直接的な関係の有無や使途については明らかでない。地山生き土面も当該地が生活面として利用されているため，その後の風化作用等によって低下するであろうし，また生活面が埋積上昇した時点での敷設とも考えられる。したがってこの石列はピット等本遺跡群とさして時期的に隔りのない，同時代の関連遺構の一つと推察できる程度である。



第172図　三蔵畑遺跡第２ピット実測図

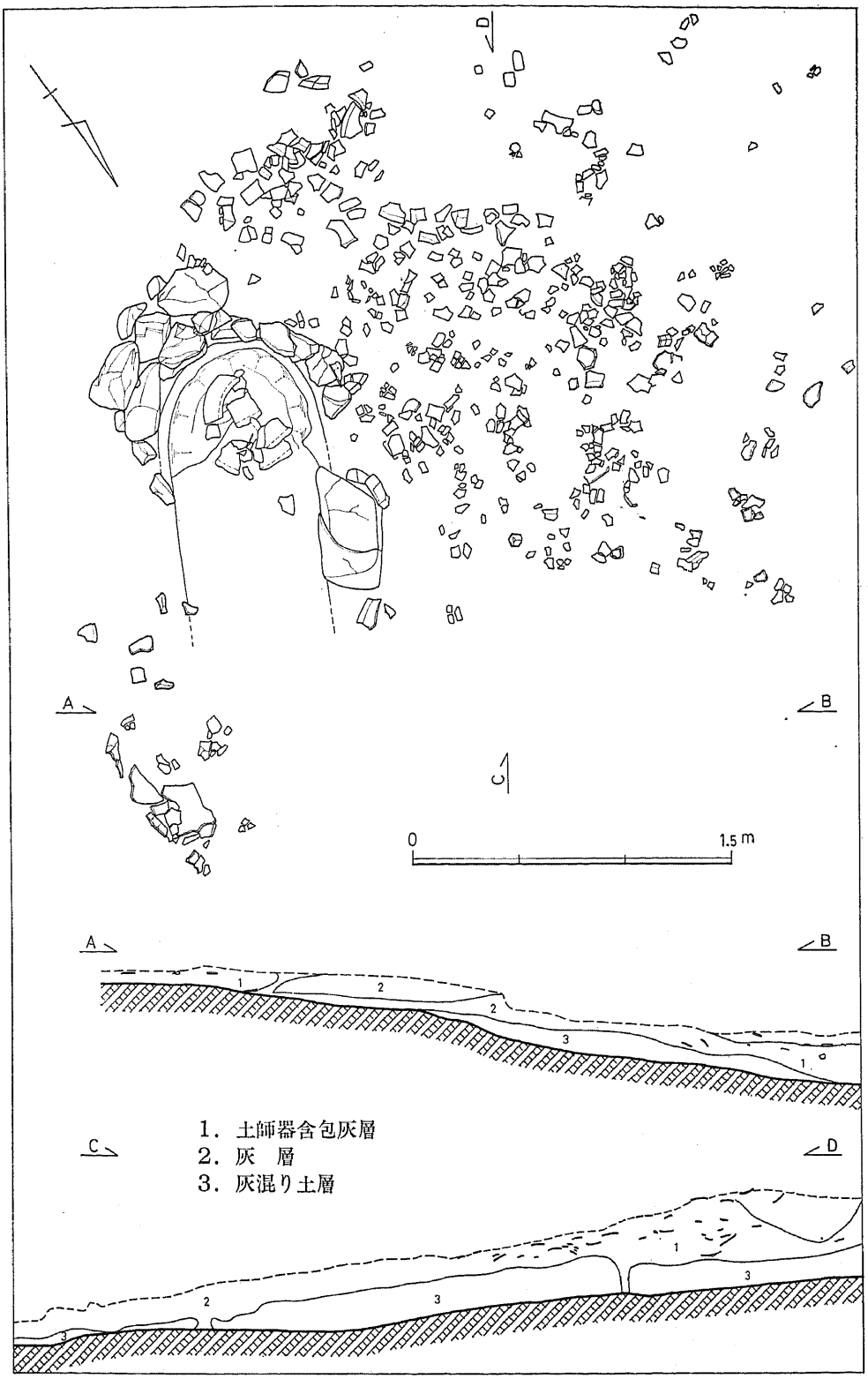
5.　古窯址および灰原（図173，174･図版93，94）

本遺構群の西南端にあたる谷頭に近い緩傾斜面を，鍵形に切り込んだ削平整地面に位置する古窯址と灰原である。窯体は前記第２ピットの南南西約 4.5mに焚口をおいて，丘陵斜面を切り込んだ南崖面に沿うようにして築成された小規模な平窯で，灰原は焚口周辺および窯の西方にあたる地形の低い側の緩斜面に，約４m×６mの範囲で広がっていた。

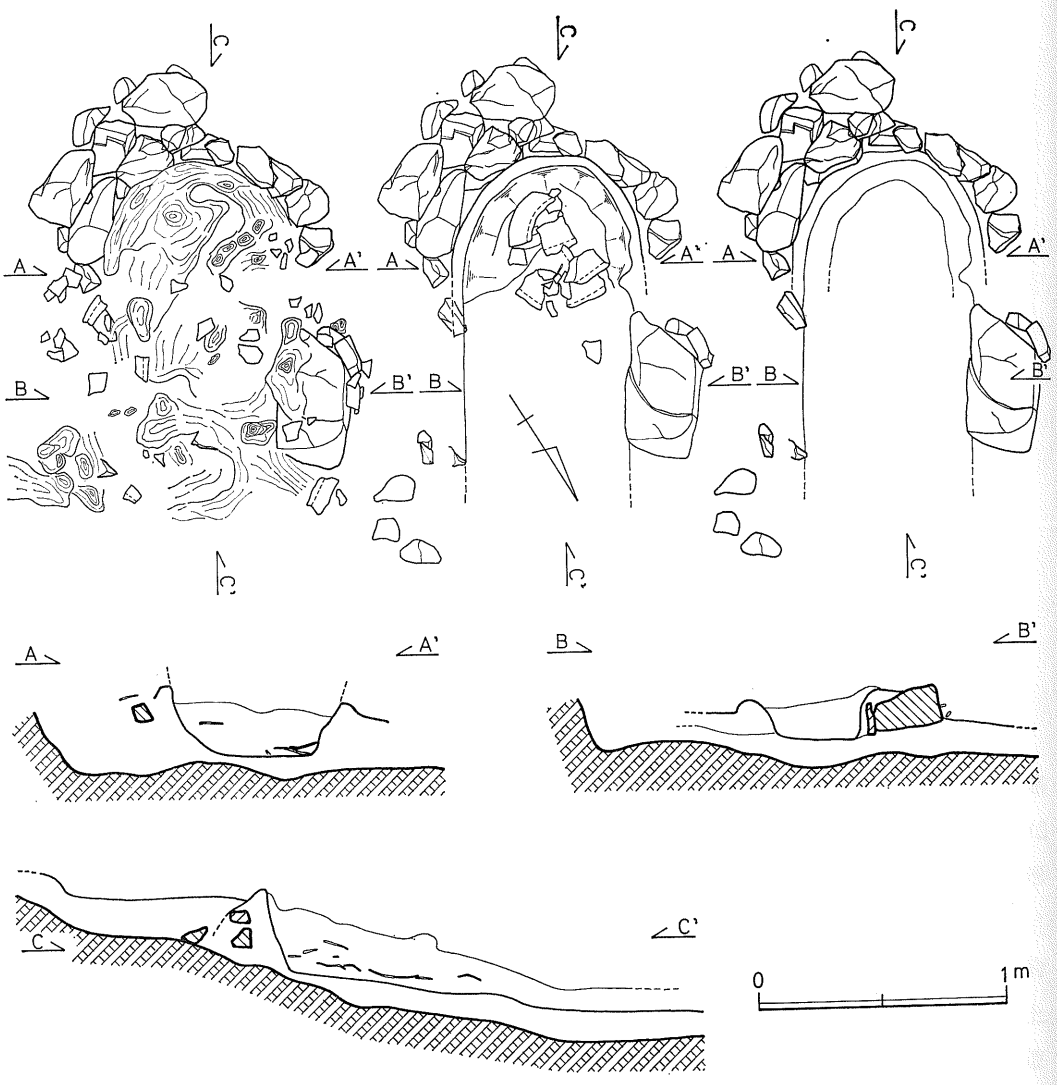
窯は当初削平整地面の埋土中に，花崗岩割り石で組まれた石積みの上に載るような形状の，巾約１m，長さ約1.5m，高さ約0.4mの不定形な焼土塊として検出された。周辺一帯に広がる土師器土鍋類の破片を多く包含する灰層が存在するところから，土師器生産の古窯址の可能性が強まり，遊離焼土塊を除去して調査の結果，図示した如くU字形プランをもった，規模の小さい平窯１基を確認したのである。

この平窯は削平整地面上に，10㎝×15㎝大から30㎝×50㎝大程度の花崗岩割り石を用いて，窯体の規模と形状に合せてU字形の基礎を組み，その内面に練り土を塗り固めて壁体をつくった簡単な構造である。しかし現状では窯体下半部の，それも奥壁に近い部分のみがほぼ原況をとどめているだけで，大半はすでに崩落していて，構造その他の詳細は明確にできなかった。

窯は丘陵削平整地面に堆積した灰混りの暗灰黒色土層上に直接窯床面をおき，丘陵原地形の等高線走向にほぼ平行する北31度東に主軸をおいて構築されている。窯床面と地山削平整地面との平均比高は約11㎝を測り，その間に灰混り土層が堆積していて，本窯体が同一立地で何回か繰り返して構築を重ねたことを物語っている。窯は現状では奥壁から約90㎝までの窯床面と，同じく奥壁から約65㎝，高さ約30㎝の窯内壁面を遺存している。窯内壁は奥壁および奥壁から約30㎝ぐらいまでの両側面は，特に強い火力を受けたためか灰黒色を呈するガラス状の固い壁面となり，その他の部分



第173図　三蔵畑遺跡土師窯および灰原出土状況



第174図　三蔵畑遺跡土師窯実測図

では赤褐色あるいは灰褐色のやや軟質の壁面となっている。窯床面は丸味をもった舟底形を呈しているが，床面の長軸線に沿う巾約35㎝は，練り土による塗り固めは施されていなく，直接基盤である灰混り土層面で焼土化していない。床面は焚口側に下傾し，現存床面長90㎝の間での比高11㎝，平均勾配７度を測る。また奥壁に近い窯床面約50㎝の部分に，本古窯址で焼成されたと思われる比較的大形の土師器土鍋類の破片が，意識的に敷き並べた状態で検出され注目された。本窯体の現存部計測値は，外槨の石積みも含めての外法現存巾120㎝，同長さ155㎝，同高さ35㎝，内法現存上端巾68㎝，同長さ 110㎝，同高さ30㎝，焼成室部床面内法巾42㎝，焚口に近い燃焼室部床面内法巾29㎝，床面現存部長90㎝を測る。

窯焚口は現状では崩壊していて明確にできないが，奥壁部から約 120㎝の西側壁内に末端を置く根石が，30㎝×50㎝×23㎝の形の整った大形の長方形石材を用いて，窯巾もその部分で一段と狭く

なり，灰層がこの石材を境にして，地形の低い西側にかき出された状態で広がっていること，またこれに対応する地形の高い東側の窯外方に，窯体に接して径約60cm，深さ約10cmのくぼ地が設けられ，粘質土を練った痕跡と，その近くに火力を浴びた花崗岩小石材数個とともに，土師器片が一括して置かれていることから，窯焚口の閉鎖施設の関連址と考えられる。これらのことを総合して本窯の原奥行長を推察すると，最大に見積ってもせいぜい 120cm前後の小規模のものであったと考えられる。

窯の構造は奥壁部に火力が集中し，根石もしっかりと組まれているところから，煙道はおそらく奥壁部に設けられ，天井部は生産された器種が三脚付土鍋類が多く，またカマド片も検出されるところから，かなり背の高いアーチ状の天井が設けられていたと考えられる。焚口，燃焼室，焼成室の区別は判然とせず，焚口近くの巾約40cmに対して焼成室部では現存上端巾68cmと広くなり，その広がりは漸移的である。

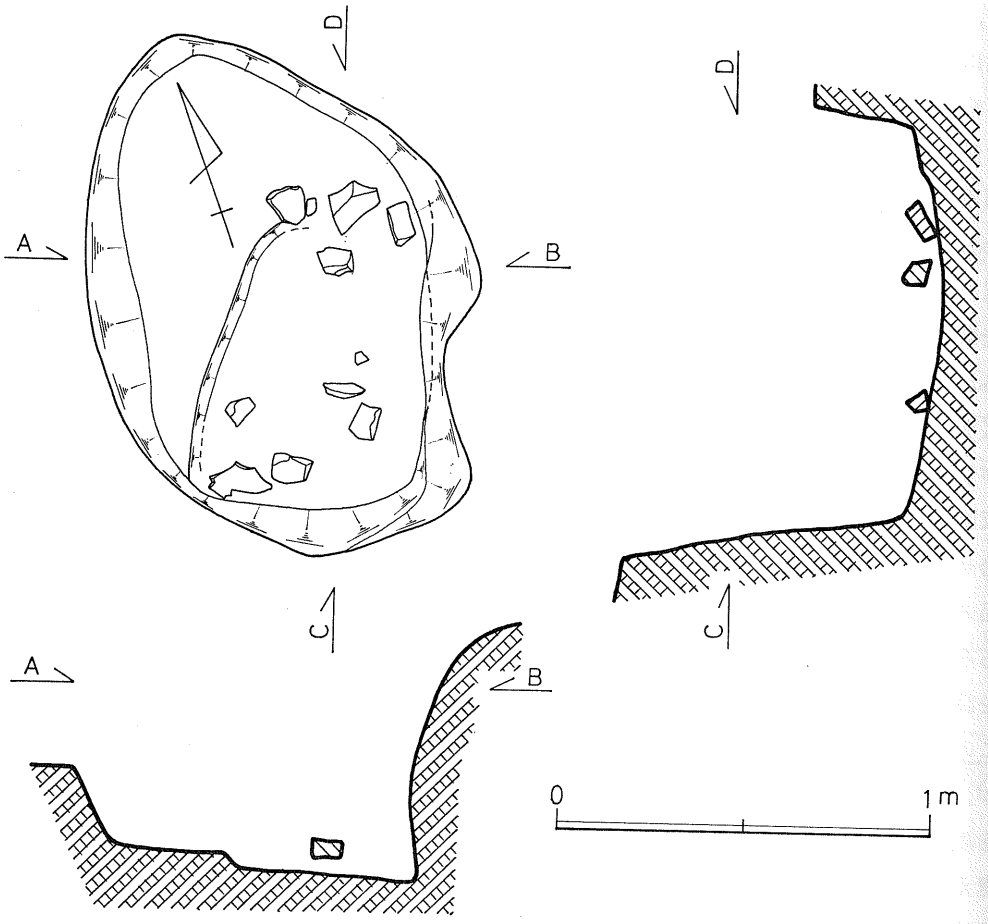
灰原に散在する土師器土鍋類の中には，径40cmを超える大形のものがかなりあり，小形のものを組合せても，直列に並べて３個が限度であり，重ね焼きを考慮に入れても一回の焼成で生産される製品の数は，数個ないし十数個と小規模である。そしてまた製品の窯への出し入れは，焚口の規模からみて焚口側の開口部からは困難であり，その都度天井部を解体するか，あるいは壁面部に出入口を設けていたものと考えられる。

このような本窯体が操業した時期については，床面に密着して検出された遺物がその下限を物語るが，後章で述べる灰原出土の土師器片と，時期的差異はほとんど示さず，ほぼ単一時代のある期間を限っての生産址と推定される。灰原出土の土師器類の編年観からみると，鎌倉時代初頭の所産と考えられ，別稿の残留地磁気測定の結果ともほぼ一致する。また本古窯址の生産性については，関連遺構群の規模および本窯体，後述の灰原の規模等を総括しても，いずれも規模が小さく，いわゆる商業的生産あるいは専門職業的生産ではなくて，当地域に居住する集団の自給自足型の生産と推察される。

灰原は窯体の西北にあたる緩斜面の約５m×６mの範囲に広がっているが，なかでも焚口から北方へ約２m×３mと，窯体の横にあたる北西面の約３m×３mの範囲に，特に厚く集中して堆積している。灰原の状況を窯体のほぼ中心部を通しての横断面でみると，窯体に接する部分での灰層が最も厚く，現存窯体の側壁高にまでおよび43cmを測り，地形の低くなる北西方向に漸次薄くなりながら約６m延びて，谷斜面に臨む崖面で切れている。灰層の層序は下半部は灰混り土層で土器片をほとんど含まず，この地層は窯体底部にまで延びて，本窯址構築時の整地面と考えられる。上半部は土師器片，木炭片，窯壁を思わせる焼土塊等を含むいわゆる灰原層であるが，焼土塊や土師器片を多く包含するのは，窯体に近い約２mの範囲に限られ，それより以遠になるにつれて土師器片等は稀薄となり，粒子の小さい灰層と変り堆積層も薄くなる。

6. 第３ピット（図172）

古窯址の西方約 1.5m，灰層下層の丘陵地山削平整地面に直接掘り込まれたピットである。長軸をほぼ南北におき，やや不定形な楕円形プランで掘り込まれ，床面も約４cmの段差をもった２段掘



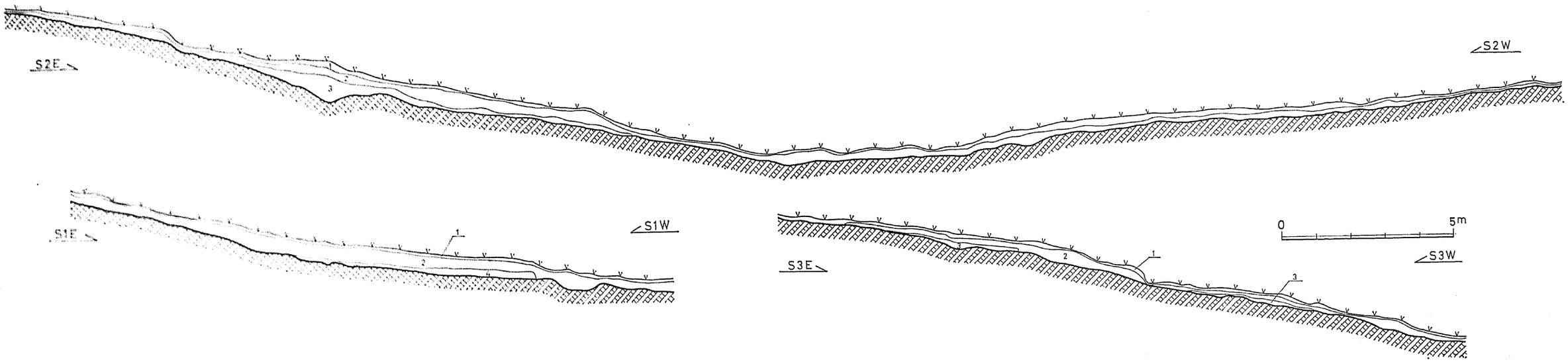
第175図　三蔵畑遺跡第3ピット実測図

り込みとなっているが，ほぼ平らな面を保つ。掘り込みの角度も比較的シャープで，縦横断面ともやや上広がりの台形状を呈する。現存掘り込み上端の長径145cm，同短径105cm，床面の長径127cm同短径76cm，深さは地形の高い南壁部で78cm，最も地形の低い西壁部で20cm，平均55cmを測る。

本ピット底面に拳大の花崗岩山礫8個を遊離検出したほかは，灰原下層の暗灰黒色の灰混り土で埋没していた。前述の古窯址がこの灰混り土層を整地替してから構築されていることから推察すると，このピットは本遺跡遺構群が立地する丘陵斜面の削平整地以後，現存古窯址を構築する間に設けられたことになる。しかし現状では本ピットと当遺跡との，直接的な関係とか使途については明確にできなかった。可能性の一つとしては立地条件等から，古窯址構築の際の窯壁土の採土とか土練り漕等も考えられるが，その確証は何もないのである。

7. その他の遺構

本遺跡の今次発掘調査に伴う各遺跡の出土状況は上記のとおりであるが，その他に丘陵削平整地面の北東端にあたる第1ピットの北東約6mの丘陵斜面に，すでに流失半壊した隅丸長方形の土壙1基と，谷筋を挾んで古窯址の北西約20mの丘麓部に，小規模の削平整地面が存在し，そこから同



第176図　三蔵畑遺跡地形断面図

1 表　土　層　　3 有機土層
2 二次堆積層　　4 灰　原　層

時代の須恵器片をかなり検出採取した。

土壙は削平整地面の地形の低い側にあたる北端部から谷斜面にかけて，当該地の等高線走向に直交する北30度西に主軸をおいて，隅丸長方形に掘り込まれているが，現状では地形の低い北西部の大半を床面も含めてすでに流失しているため，その原況は不詳である（図169）。現況では掘り込み上端のわかる現存地山生き土上面巾95cm，床面巾90cm，現存床面長60cm，地形の高い南小口での掘り込みの深さ12cmを測る。現存床面は地形の低い北西方向にやや斜傾するもののほぼ平らな面をもち，遺物その他の施設は何も認められない。土壙内は丘陵削平整地面上と同様，当該地を形成する花崗岩風化土で埋没し，丘陵斜面を削平整地した時点との先後関係も明らかにできなかった。したがってここでは参考事例として付記するにとどめたい。

北西丘麓部の削平整地面については，当遺跡との関連遺構の広がりを調べるため，剝土調査を試みたが，当該地は開墾されて畑地となっているため，旧地表面が大きく荒らされていて，遺構としては削平整地面が存在していたことと，柱穴1本の痕跡を検出したのみである。しかし当該地を開墾する際に撹乱したと思われる土層内に，後章第 181図に示した同時代蔵骨器と推察される須恵器片や鉄釘が検出され，そうした墓地遺跡の存在した可能性も考えられるので，一応ここに付記しておきたい。

第4章　出　土　遺　物

本遺跡の出土遺物は，土師器土鍋類を主体に生産した古窯址であるため，当然のことながら土鍋類の破片が圧倒的多量を占め，それに若干の羽釜およびカマド等の破片を検出した。また建物遺構等削平整地面を中心に，かなりの量の土師器片，須恵器片，瓦器片と，若干の緑釉片や陶磁片も発見し，さらに谷を隔てた北西丘麓部では，蔵骨器を思わせる須恵器片と若干の鉄釘類を発見採取した。これらの遺物はいずれも遊離検出のものが多く，また時代差もほとんどみられないところから，ここでは出土地点にはあまりこだわらないで，各器種ごとに取りまとめて順次概述をすることとする。

第1節　土　鍋　類

本遺跡出土の土器片のうち，その大部分を占めるのがこの土鍋類の破片である。大半は窯体の西北に広がる灰原からの遊離出土であるが，窯床面および窯焚口外縁部や建物遺構近くのカマド状ピットからも量は少ないが一括出土し，また本遺跡の立地する削平整地面全域から若干数ながら遊離検出されている。

遺跡の性格上完形を保つものは皆無で，いずれも断片的な破砕片である。脚をもつものともたないものがあるが，その関係も明確にできない程である。量的には60cm×40cm×15cmの遺物整理箱15箱におよぶが，器形の選別および計測可能な口縁部片を基準としてその概要を記述する。

土鍋類は口縁部の類形で大別すると，表76に示したごとくⅠ～Ⅴの型式に分けられ，さらに口縁

表76　三蔵畑遺跡出土土師器土鍋類の形式分類

形式		特徴	検出破片数	実測図土器番号
Ⅰ	A－a	口縁部が「く」の字形に外反し内面くびれ部に稜線をもつ。口縁端は丸味をもち蓋受け部がくぼんでいる。	446	1～15
	A－b	口縁部が「く」の字形に外反し内面くびれ部に稜線をもつ。口縁端は丸味をもち蓋受け部がふくらんでいる。	338	28～39
	B－a	口縁部が「く」の字形に外反し内面くびれ部に稜線をもつ。口縁端は面取りして蓋受け部がくぼんでいる。	74	40～41
	B－b	口縁部が「く」の字形に外反し内面くびれ部に稜線をもつ。口縁端は面取りして蓋受け部はふくらんでいる。	54	42～45
Ⅱ	A	口縁部がゆるやかに外反し内面くびれ部に稜線をもたない。口縁端は丸味をもつ。	90	46～50
	B	口縁部がゆるやかに外反し内面くびれ部に稜線をもたない。口縁端は面取りされている。	37	—
Ⅲ	A	口縁部は逆「ハ」の字形を呈し口縁端は丸味をもつ。（皿状のものも含む）	98	51～58
	B	口縁部は逆「ハ」の字形を呈し口縁端は面取りされている。（皿状のものも含む）	70	59～62
Ⅳ	B	口縁部は立ちあがり，口縁端を面取りして受け部はほぼ水平である	1	68
Ⅴ	B	口縁部は「ハ」の字形を呈し，口縁端は面とりされている。	9	63～67

部端の反りのもちかたや面取りの有無で幾つかに細分できる。しかし出土状況は全くの混在を示し胎土や焼成および調整仕あげの手法等は共通するところから，これらは時代差を表わすものではなく，製作者あるいは使途の差を示すものと思われる。

これらの土鍋類の大部分は，胎土に長石，石英，雲母等を含む砂粒を多く含有し，焼成は普通で黄褐色または淡黄橙色を呈するものが多い。整形仕あげは器胴外面を縦方向刷毛目，同内面を横方向刷毛目調整を施し，口縁部は刷毛目調整の後横なで調整したものが一般的であるが，中には頸部下半に指圧痕を残すものや，底部に粗いへら調整痕をみせるものもある。

1.　ⅠA型の土鍋（図177，178）

口縁部をくの字形に外反させて内面くびれ部に稜をもち，口縁端部をまるくおさめた類形であるが，さらに口縁蓋受部が内反してくぼむもの（a型）と，逆に外反してふくらむもの（b型）の2種に細分できる。本遺跡出土の土鍋類の中ではこの類形に属するものが最も多く，検討用に摘出した口縁部片1.217片中，a型446片，b型338片，計784片を数え全サンプルの約65%を占める。

ⅠAa型の土鍋（図 177—(1)～(15)）は，口縁部径約31cmから46cmと比較的大形のものが多い。(1)灰原出土，口縁径41cm，内外面とも微かに煤が付着し，刷毛目の歯巾は約 0.3cmと粗い。蓋受部は刷毛目調整後横なでが施され微かに刷毛目痕を残す。(2)灰原出土，口縁径40.1cm，内外面とも刷毛目巾は細かく，口縁部は刷毛目調整後横なで調整されている。(3)窯床面出土，口縁径39.7cm，外面刷毛目は歯巾0.15cmと細かいが，内面刷毛目は歯巾 0.3cmと粗く，施文具を内外面で変えている。

外面下半は横なでにより刷毛目が消されている。(4)灰原出土，口縁径34cm，内外面とも刷毛目は粗い。内外面とも微かに煤が付着する。(5)窯床面出土，口縁径35.5cm，外表下半をやや目の粗い板目状のもので横方向に調整し，上半からの縦方向刷毛目を消している。(6)灰原出土，口縁径34.2cm刷毛目は内外面とも歯巾 0.3cmと粗く，微かに煤が付着している。(7)灰原出土，口縁径35.2cm，刷毛目は内外面とも歯巾が細かく，内面口縁部にも顕著に施されている。外面一部に煤が付着している。(8)窯焚口外縁出土，口縁径35.7cm，外面上半の縦方向刷毛目の後下半部は板目状の横方向なでが施され，内面は三種の工具を使用しているのが注目された。(9)灰原出土，口縁径22.3cm，土鍋口縁と同様のつくりであるが，焼成前に口縁部から約 5.5cmのところで，鋭いへら状工具で切断されている。鍋敷または器台的用途に使用されたものと思われる。(10)灰原出土，口縁径 26.7 cm，器高3.8cm，上記(9)と同様頸部付近で切断されたものである。外面に微かに煤が付着する。(11)灰原出土口縁径33.5cm，内外とも煤が付着する。(12)灰原出土，口縁径30.9cm，推定器高11.8cm，刷毛目は内外面とも歯巾が細かく密に施されている。(13)灰原出土，口縁径31.9cm，刷毛目は外面粗く内面が細かい。内外面とも煤が付着する。(14)窯焚口外縁出土，口縁径37.4cm，内外面とも下半部はやや粗雑な横方向へのへら調整が施されている。(15)灰原出土，口縁径46cmは本遺跡出土例中最大である。外面下半部は縦方向刷毛目の上から板目状工具による斜方向の調整が施されている。

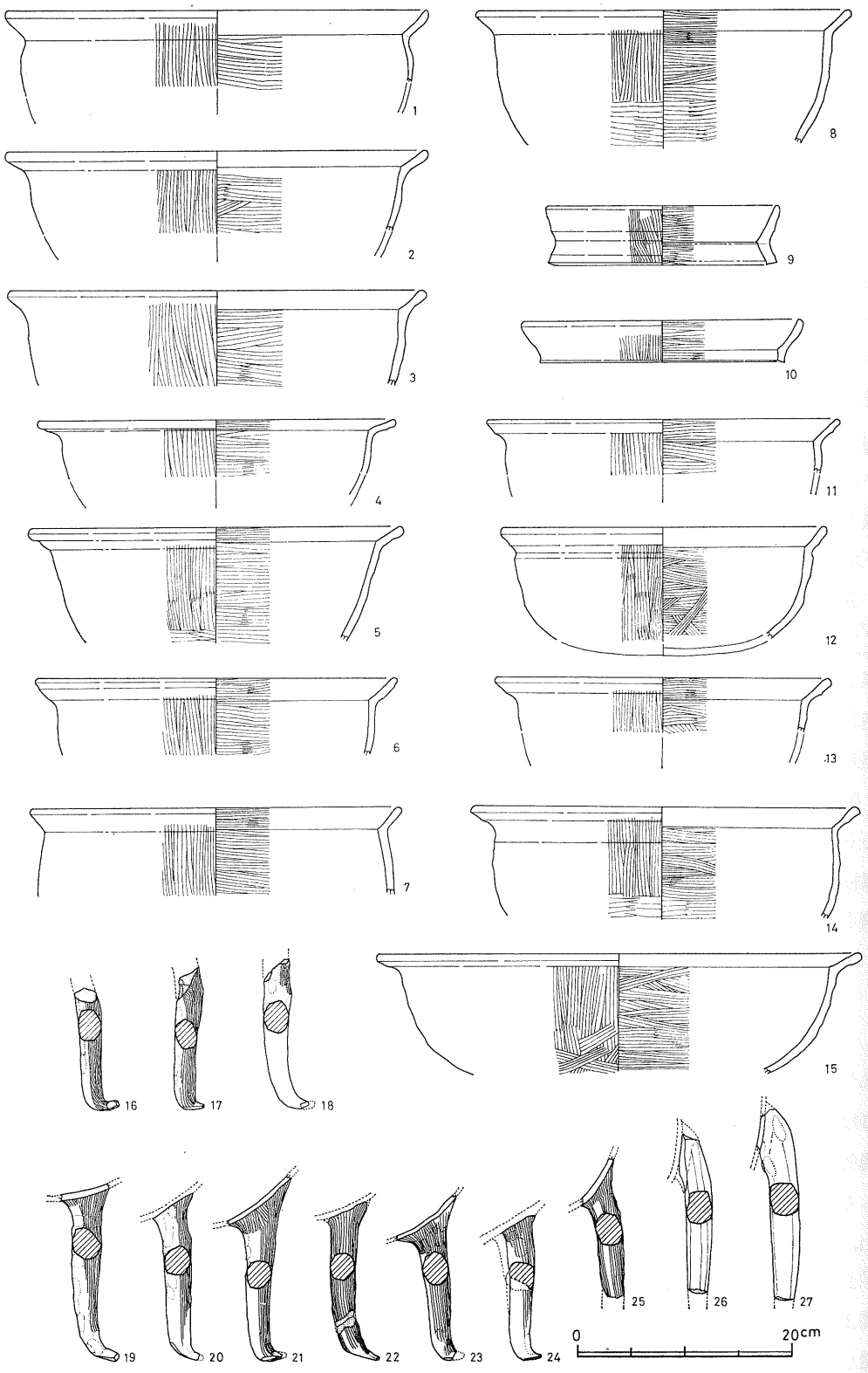
ＩＡｂ型の土鍋（図178—(28)～(39)）は，口縁部径23.1cmから38.5cmを測り，前記ＩＡａ型に較べて総じて口縁径がやや小さい。図示したものはすべて灰原出土で，そのほとんどの土器片に内外面とも煤が付着していた。(28)口縁径38.5cm，刷毛目調整は内外面とも緻密である。(29)口縁径36cm。(30)口縁径31.3cm，口縁蓋受部にも横方向への刷毛目が残る。(31)口縁径29.7cm，内面に刷毛目調整前の指圧整形痕を残す。(32)口縁径28.6cm，外表刷毛目は粗く内面は歯巾が細い。内外面で工具を変えている。(33)口縁径28.2cm，(34)口縁径28cm，(35)口縁径27.1cm，外表器胴部に刷毛目を施した後指圧を加えている(36)口縁径26.4cm，焼成やや悪く器表の剝離が著しい。(37)口縁径26cm，推定器高約 9.4 cm，(38)口縁径 23.1 cm，推定器高約 9.6 cmと小形品である。外面は縦方向刷毛目の後，口縁部は横方向刷毛目の上を横なで，下半部は横なでが施され，内面上半部は口縁部も含めて緻密な横方向刷毛目，下半部は横方向への板目状調整が施されている。(39)口縁径22.9cm，(36)等とほぼ同巧手法である。

2. ＩＢ型の土鍋（図178）

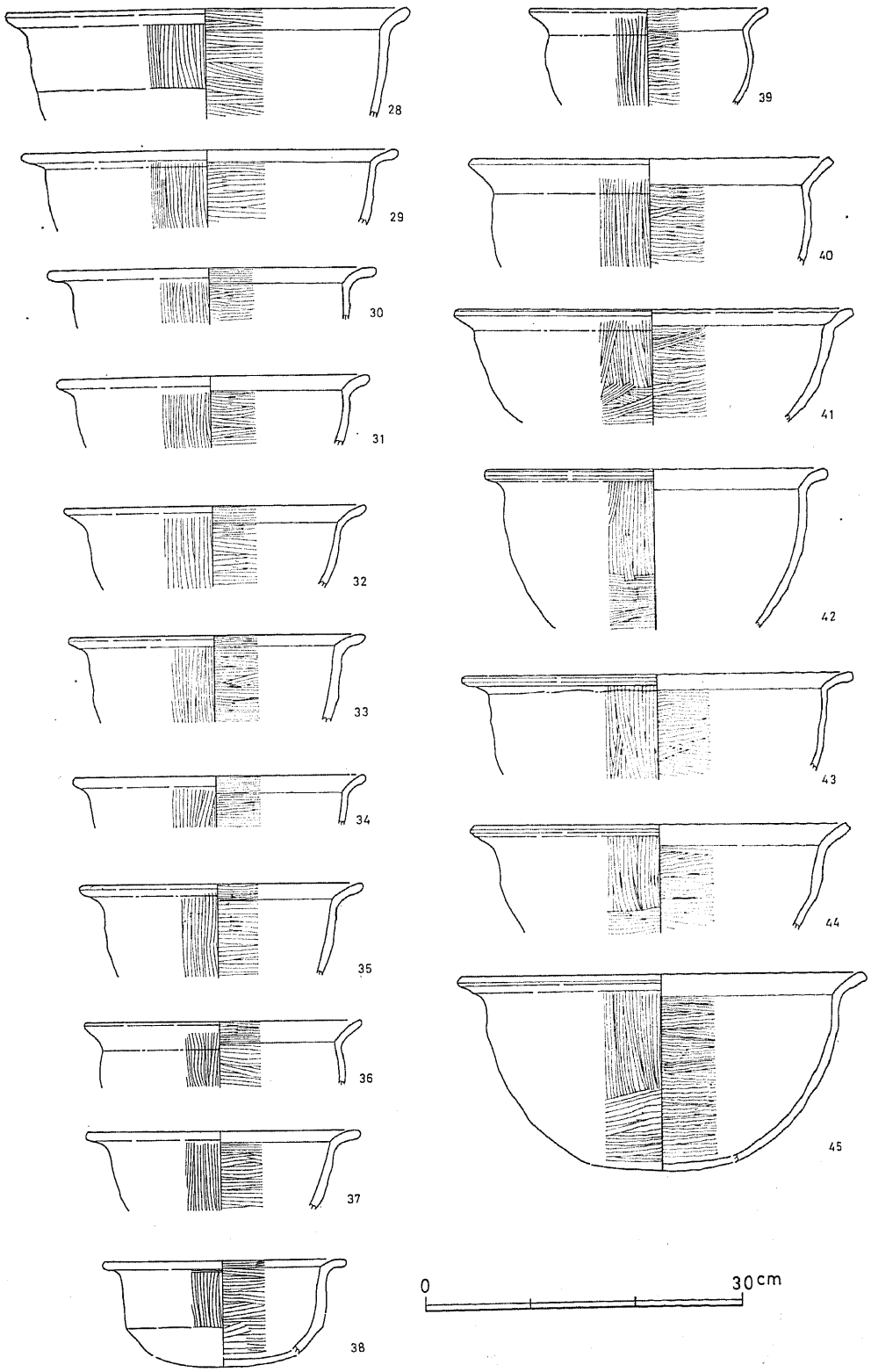
口縁部をくの字形に外反させて内面くびれ部に稜をもつものは，前記ＩＡ型と同様であるが，口縁端部を面取りされている類形である。口縁蓋受部が内反してくぼむもの（ａ型）と，逆に外反してふくらむもの（ｂ型）に細分される。ａ型74片，ｂ型54片計128片を数え全体の約10%を占める。胎土，焼成，仕あげ調整手法等は，すべて前記ＩＡ型とほぼ同巧である。

ＩＢａ型の土鍋（図178—(40)～(41)）はともに窯床面出土である。(40)口縁径35cm，口縁端部を横なでによって斜めに面取りしているため，外面口縁端に２条の弱い稜線をもつ。(41)口縁径38.5cm，口縁端形状は(40)と同巧である。器胴外表の下半部に化粧土を付した後，横方向刷毛目で整えている。

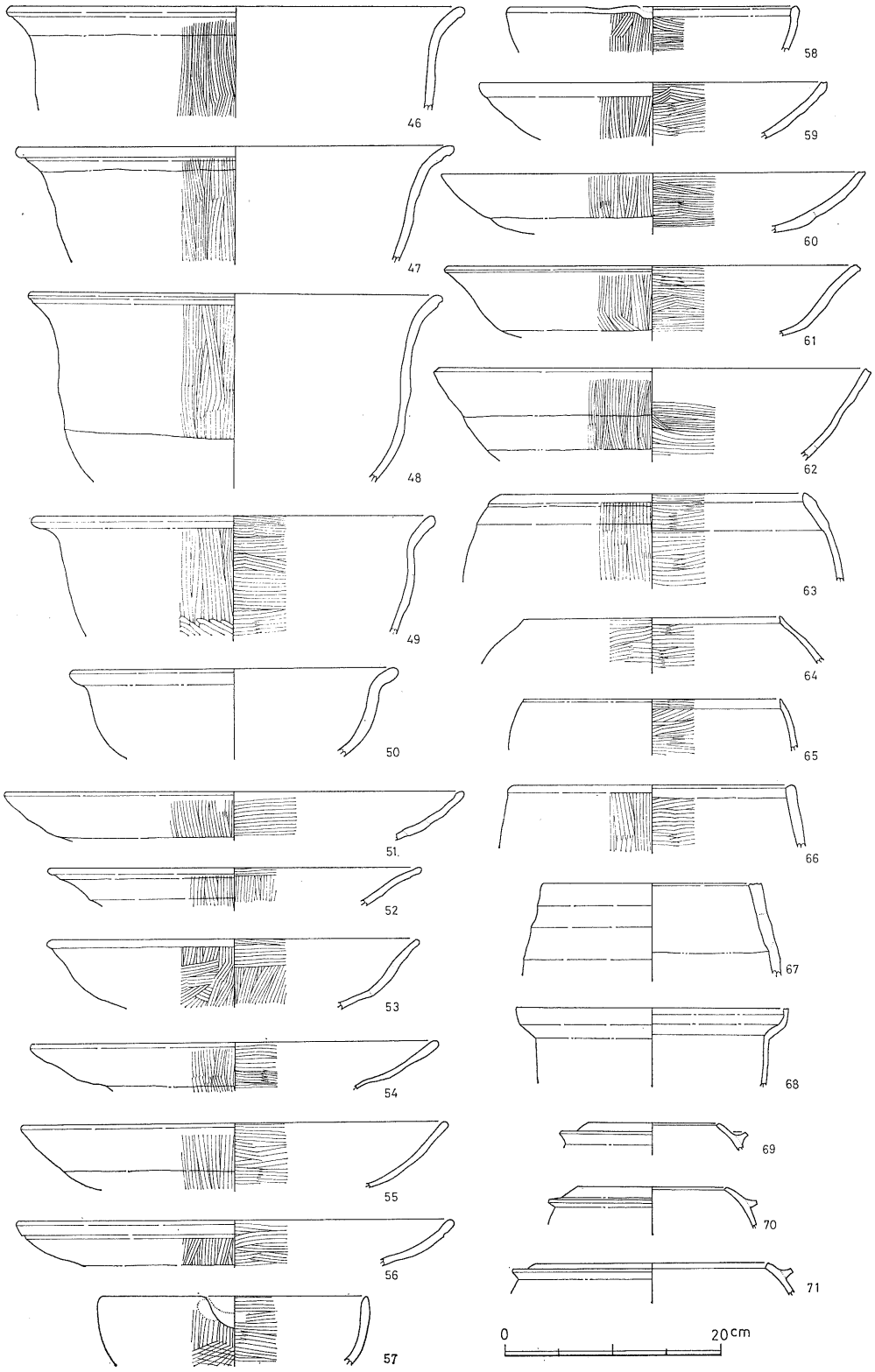
ＩＢｂ型の土鍋（図178—(42)～(45)）はいずれも灰原出土である。(42)口縁径33cm，推定器高約16cm，



第177図　三蔵畑遺跡出土土師器実測図 (1)



第178図　三蔵畑遺跡出土土師器実測図(2)



第179図　三蔵畑遺跡出土土師器実測図(3)

刷毛目工具は3種を使い分けている。器胴下半部は内外面とも不定方向の刷毛目調整され，器体部に指圧凹痕が認められる(43)口縁径37.8cm，口縁部が大きくくの字形に外反している。内面下半の刷毛目はかなり斜傾するものもあり，不定方向に施されている。(44)口縁径36.6cm，口縁部横なでによる面取りは段状に2か所施され，外面口縁端稜線は3条をもつ。(45)口縁径39.4cm，推定器高18.3cm刷毛目工具は2種類が使い分けられ，器胴下半は板目状の横方向調整が施されている。

3. Ⅱ型の土鍋類（図179）

口縁部が緩やかに外反して内面くびれ部に稜線をもたないつくりであるが，基本的には前記Ⅰ型とほぼ同巧のものである。口縁端部をまるくおさめたもの（ⅡA型）と，面取りされているもの（ⅡB型）の2種に細分されるが，両者を合せて127片と全体の約10%の比率を占める。胎土，焼成，整形手法等すべて前記Ⅰ型のものと大同小異であるが，中に内面に刷毛目調整を施されていないものが存在する。A型90片，B型37片を検出したがB型片はいずれも断片的な小破片のため，ここではⅡA型のみを実測図示した。

ⅡA型の土鍋類（図179—(46)～(50)）は，口縁径約31cmから43cmとかなり大きさにばらつきをみせる。(46)灰原出土，口縁径43cm，外面に縦方向刷毛目調整が施されているが，外面口縁部および内面は横なで調整のみである。(47)灰原出土，口縁径41cm，整形手法は(46)と同巧である。(48)灰原出土，口縁径38.8cm，外面指圧凹痕顕著である。外面縦方向刷毛目が施されているが，口縁および器胴下半部は横なでにより消されている。内面は横なでまたは水引きによる調整と思われるが，器表の荒れが著しく詳細は不明である。(49)建物遺構近くのカマド状ピット内出土，口縁径30.8cm，二次的火力を受けていて煤の付着が厚く，調整手法は判然としない。内外面ともに部分的に刷毛目痕が認められる程度である。(50)窯床面出土，口縁径38cm，外面縦方向，内面横方向の刷毛目が施されているが外面口縁部は横なで，下半部を斜め方向へのへら削り状の調整を施している。

4. Ⅲ型の土器類（図179）

口縁部が逆ハの字形を呈するもので，皿状の浅い器形もこれに含めた。口縁部をまるくおさめたもの（ⅢA）型と，面取りをしたもの（ⅢB型）の2種に細分される。胎土，焼成，整形手法等すべて前記Ⅰ型のものと大同小異である。A型98片，B型70片計168片は，全検出サンプルの約14%にあたる。

ⅢA型の土器類（図179—(51)～(58)）は，口縁径約35cmから43cmの皿状に浅いものと，口縁径25.3cmと27.5cmの片口をもつ土鍋とがあるが，すべて灰原出土である。整形仕あげは基本的に外面縦方向刷毛目，内面横方向刷毛目調整である。(51)口縁径42.9cm，浅い皿状のつくりで破片断面に粘土輪積みの貼り合せ痕2か所が認められる。内外面とも煤が付着する。(52)口縁径35cm，口縁部が大きく開き皿状を呈する。(53)口縁径34.8cm，口縁部がやや歪みをみせる。(54)口縁径38.2cm，内外面とも煤が付着する。(55)口縁径40cm，断面に粘土帯1か所をもつ。(56)口縁径41.2cm，外面口縁部付近に巾0.3cmの凹線1条を繞らしている。外面底部はへら状工具によって削られた痕跡をみせる。(57)口縁径25.3cm，やや器壁の厚い椀状の器形で口縁部に巾5.6cm，深さ内法1.3cm，外法2.9cmの片口をも

つ。(58)口縁径27.5cm，口縁部に巾2.8cm，深さ内法0.5cm，外法1.1cmの浅い片口をもつ。

ⅢB型の土器類（図179—(59)～(62)）は，口縁径32.7cmから41cmとかなりばらつきをみせる。(59)灰原出土，口縁径32.7cm，口縁端部をほぼ水平に面取りして，その中央に凹線を繞らせている。内外面とも煤が付着する。(60)灰原出土，口縁径39.8cm，推定器高約5.5cmの浅い皿状を呈する。口縁端部をほぼ水平に面取りして，浅い1条の凹線を繞らせている。(61)窯床面出土，口縁径39cm，口縁部は朝顔形にやや外反し，口縁端部の面取りは斜傾している。(62)建物遺構周辺のカマド状ピット出土，二次的火力を受け煤が厚く付着している。口縁端面取りは斜傾して外面に稜をもつ。破片断面に2cmぐらいの巾で粘土帯の痕跡をとどめている。

5. ⅣB型の土器（図179）

口縁部が立ちあがり，口縁端部をほぼ水平に面取りした型式であるが，（図179—(25)）に示した1個体のみの検出である。窯灰原遊離出土で，口縁径25.5cm，器胴上端推定径21.8cm，現存器高約7cmを測るが，使途は不明である。焼成はやや軟質で灰白色を呈するが，器表面が荒れているため口縁部の横なでと内面の一部に横方向の刷毛目調整痕が認められるほか，仕上げ調整は明らかでない。

6. ⅤB型の土器（図179）

口縁部がハの字形を呈し，口縁端部を面取りされた，深鉢形あるいは甕状の器形である。全部で9片検出されたが，いずれも灰原における遊離出土である。胎土，焼成等，整形仕あげはすべて前記Ⅰ型と大同小異である。(63)口縁径28.8cm，口縁から器胴へは丸味をもってハの字形にふくらんでいる。口縁外面に指圧痕を残し，口縁端部外面はへら状工具によって削られている。(64)口縁径24cm器胴部にかけて大きく斜傾して広がっている。口縁端部の面取りはシャープである。(65)口縁径26.6cm，前者と対象的に口縁部は立ちあがっている。器表の荒れが著しく外表の仕あげ調整は判然としない。(66)口縁径26.6cm，器壁がかなり厚いつくりで，口縁端部はなでによりまるくおさめられ，外面部のみにへら切りが施されている。(67)口縁径20.5cm，器壁は厚手で口縁部はほぼ水平に面取りされ，2条の浅い凹線を繞らせている。外表の調整は板目状の粗い縦方向調整，内面は横なで調整で破片断面に粘土帯の痕跡をとどめる。

7. 土鍋脚部片（図177）

土鍋脚部片は計66片を検出した。窯および灰原36片，建物近くのカマド状ピット周辺27片，その他3片の出土である。いずれも断片的な脚部のみの破片のため，土鍋体部との接合関係は不明であるが，その形状等からみて前述の土鍋類のうちⅠ型のいずかとセットになると考えられる。脚部片を部位別に分けると，ほぼ全形を保つもの10片，鍋との接合部片17片，中間部片17片，脚底部片22片である。そして個体別本数は最大限にみて49本以上，最小限にみて40本以上となり，3本1組のセット関係でみると少くとも17個体分以上となる。

脚部片の大半は，本古窯址出土の土鍋類と同質のもの（16～24）で占められるが，建物遺構近く

のカマド状ピット周辺出土のもののなかには，瓦質に近い焼成の灰白色を呈する脚部片5本分（25～27）も検出されている。⒃～㉔の脚は，脚長12.7cmから15cm程度，横断面はやや不整楕円形を呈し，末端部を猫爪状に外方へ折り曲げたものが多い。脚柱部は縦方向へのへら削りおよび指圧によって整形され，外側に面した外表に縦方向への刷毛目調整が施されている。鍋器胴下半部との接合部の角度をみると，かなり下底部に広がった形状を示し，脚柱部も若干の外反をみせている。㉕～㉗の瓦質に近い脚は，完形を保つものが皆無のためその全容は明らかでないが，その形状からみて脚高は20cm以上と前者に較べて長い。土鍋接合部の位置も高くほぼ垂直に近い形態で取り付けられていたものと思われ，脚柱の反りも内反して前者とは逆の形状を示す。脚の整形はへら削りおよび指圧の後なでによる調整が施され，刷毛目調整はされていない。

第2節　羽釜・カマド片

窯体および灰層の出土土器片の中から，羽釜口縁部片4片，カマド片10数片を検出した。いずれも断片的な小破片で全容を知ることができなかった。羽釜3個体分は幸い口縁部を実測図示（図179—㊾～㊼）できたが，カマドは焚口の庇部片等の小断片で，やっとそれと判別できる程度であるので，図版100に示すにとどめた。

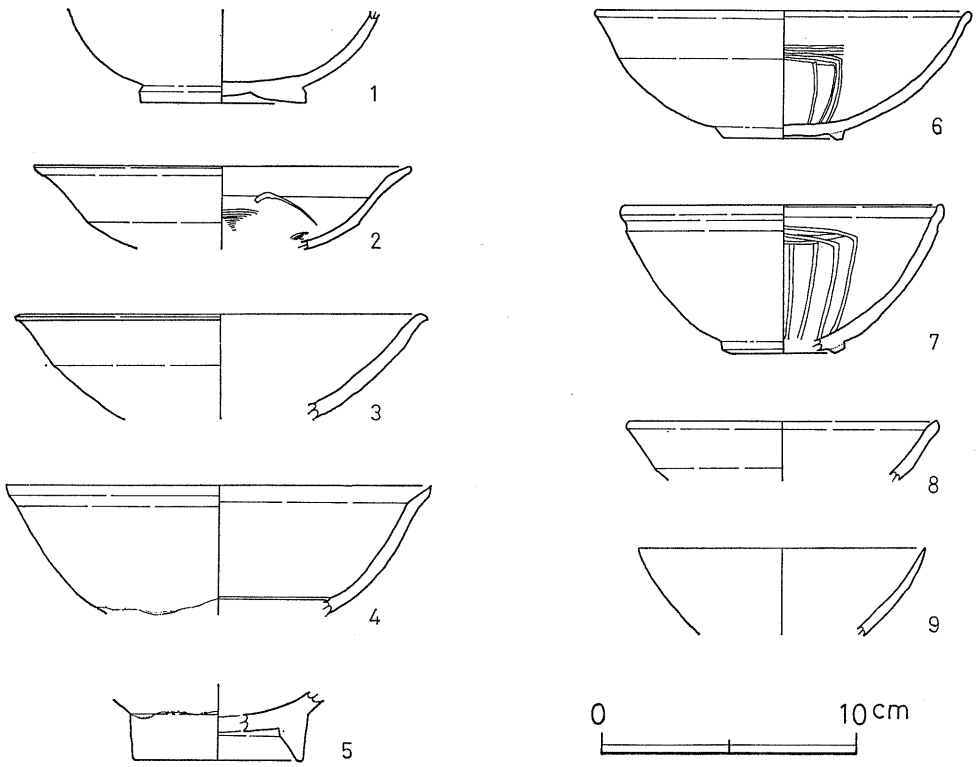
羽釜は焼成が比較的堅緻で淡灰色または暗灰色を呈する。いずれもハの字形口縁部外面に，断面台形の鍔を貼りつけたものである。器表が荒れていて整形仕あげは判然としないが，内外面とも横なで調整が施され，鍔部は指圧による整形の後下半部をへら状工具によって調整しているようである。㊾口縁径12.4cm，鍔部外法径17.9cm。㊿口縁径14.2cm，鍔部外法径19.5cm。(71)口縁径21.7cm，鍔部外法径26.3cmを測る。

第3節　緑釉・陶磁器

建物遺構およびその周辺部の調査中に，地山削平整地面から緑釉片3片1個体分と，中国製と思われる青磁片4片を遊離検出した（図180—(1)～(5)，図版101）。

緑釉(1)は建物遺構東寄りの整地面から出土した高台付椀下半部片である。やや軟質な焼成で胎土は茶褐色を呈し，器底内面を除く現存器表全体に黄緑色の釉を施している。基底径6.6cm，高台高0.7cmを測る。

青磁(2)は建物遺構面出土，胎土は白灰色で焼成は堅緻，釉は緑色を呈する。整形はロクロ，外面下半にへら切りと，内面腹部に櫛およびへら状工具を用いた描文をもつ。推定口縁径14.9cmを測る。(3)建物遺構面上の埋土中より遊離出土。胎土は白灰色で焼成は堅緻，釉は淡緑褐色を呈するが気泡が目立つ。整形はロクロ，外面下半にへら削り痕が認められる。推定口縁径16.8cmを測る。(4)古窯址焚口付近出土，胎土は白灰色で焼成は堅緻，釉は淡黄緑的な乳白色を呈し，器表外面はへら削りの調整痕が顕著である。推定口縁径16.2cmを測る。(5)古窯址焚口付近出土の高台片である。胎土は黒砂粒と灰砂粒の混合で焼成は堅緻，釉は椀部内外面と高台外表上半部まで施され，全体とし



第180図　三蔵畑遺跡出土緑釉・青磁・瓦器実測図

て淡いうぐいす色を呈するが，部分的に緑褐色の釉点がある。整形は時計廻りロクロで削り出した後，外面は水引き調整が施されている。推定基底径6.6㎝，高台高1.8㎝を測る。

第4節　瓦　器　片

今次発掘調査区のほぼ全域にわたって，少量ではあるが瓦器片が遊離散見された（図180—(6)〜(9)，図版101）。総破片検出数21片，推定個体数は7個体以上となる。いずれも山茶椀風な器形のものと思われる。胎土は微砂を含む程度の良質で，焼成は普通あるいはやや堅緻で色調は灰黒色を呈する。仕あげ調整は横なで，高台は貼り付けで，内面腹部に暗文を施したものが多い。

(6)建物遺構面出土，内面腹部に図示したような暗文が描かれている。推定口縁径14.8㎝，器高4.9㎝。(7)建物遺構面出土，口縁部の内外面に各1条の凹線と内面腹部に暗文をもつ。推定口縁径12.6㎝，器高5.7㎝。(8)第2ピット付近出土，小破片のため暗文の有無は不詳，推定口縁径12.3㎝。(9)灰原出土，内面暗文が僅かに認められる。推定口縁径11.3㎝。

第5節　土　師　器　片

発掘調査区のほぼ全域にわたって，第1・2節で記した古窯址生産土師器のほかに，かなりの量

表77　三蔵畑遺跡出土土師器片器形別出土地点別推定個体数一覧

器形分類 / 出土地域	高台をもたないもの	貼り付け高台をもつもの	削りだし高台をもつもの	口縁部による推定個体数	計
第1ピットと第2ピットの間	44	28	2	15	89
窯および灰原付近	4	8	0	1	13
西北丘麓部付近	33	15	0	12	60
計	81	51	2	28	162

の小形土師器片を遊離検出した（図181）。その大部分は坏および皿の類であるが，高台をもたないもの，貼り付け高台をもつもの，削り出し高台をもつものの三種類に大別できる。器形の判別可能の器底部辺および口縁部片を基準とした推定個体数と，出土地域別個体数を表77に示したので参照されたい。

高台をもたない器種は坏と皿がほぼ半々の比率を占める。器底部片による推定個体数81について底部面をみると，底部糸切り３，へら切り７，へらおこし71とへらおこし切断が圧倒的に多い。また灯明芯痕跡や煤の付着から，灯明皿６，灯明椀３の存在が考えられる。貼りつけ高台をもつものは，一般に山茶椀型を呈し，推定個体数51のうち４個体は少くとも灯明椀として用いられている。削り出し高台片は僅か２片を検出したのみで，いずれも小破片のため詳細は不明である。口縁部片を基準とした推定個体数28の中にも，灯明皿および灯明椀が計５個体以上検出された。こうした灯明皿や椀は，建物遺構付近および北西丘麓から多く出土している。

これらの土師器はいずれも横なで調整を主体として整形されているが，実測可能の遺物については，図示および計測値等を表示および計測値等を表示したので，ここでは個々の特徴点を順を追って概述することとする。

1．坏（図181―(1)～(15)）

(1)建物遺構面出土，高台は貼り付けであるがいびつ，断面が三角形になる部分と逆台形になる部分がある。(2)建物遺構面出土，高台は貼り付けである。(3)第２ピット付近出土。(4)窯焚口付近出土，ロクロ使用の水引き調整が施され，高台は貼り付けである。(5)窯焚口付近出土，外面に指圧痕を残す。(6)西北丘麓部出土，ロクロによる水引き調整と器表に丹塗りが施されている。(7)建物遺構面出土。(8)西北麓部出土，内面底部に螺旋状の凹線が認められる。底面はへら切り後のへらおこしである。(9)建物遺構面出土，外面下半に螺旋状の指圧凹痕が顕著である。(10)西北丘麓部出土，内面２か所に灯芯油痕を残す。(11)建物遺構面出土。(12)西北丘麓部出土，水引き調整され，内面に煤が付着する。(13)窯焚口付近出土丸底である。(14)建物遺構面出土，水引き調整が施され，内面に煤が付着する。(15)西北丘麓部出土，内面３か所に灯明芯油痕が残る。

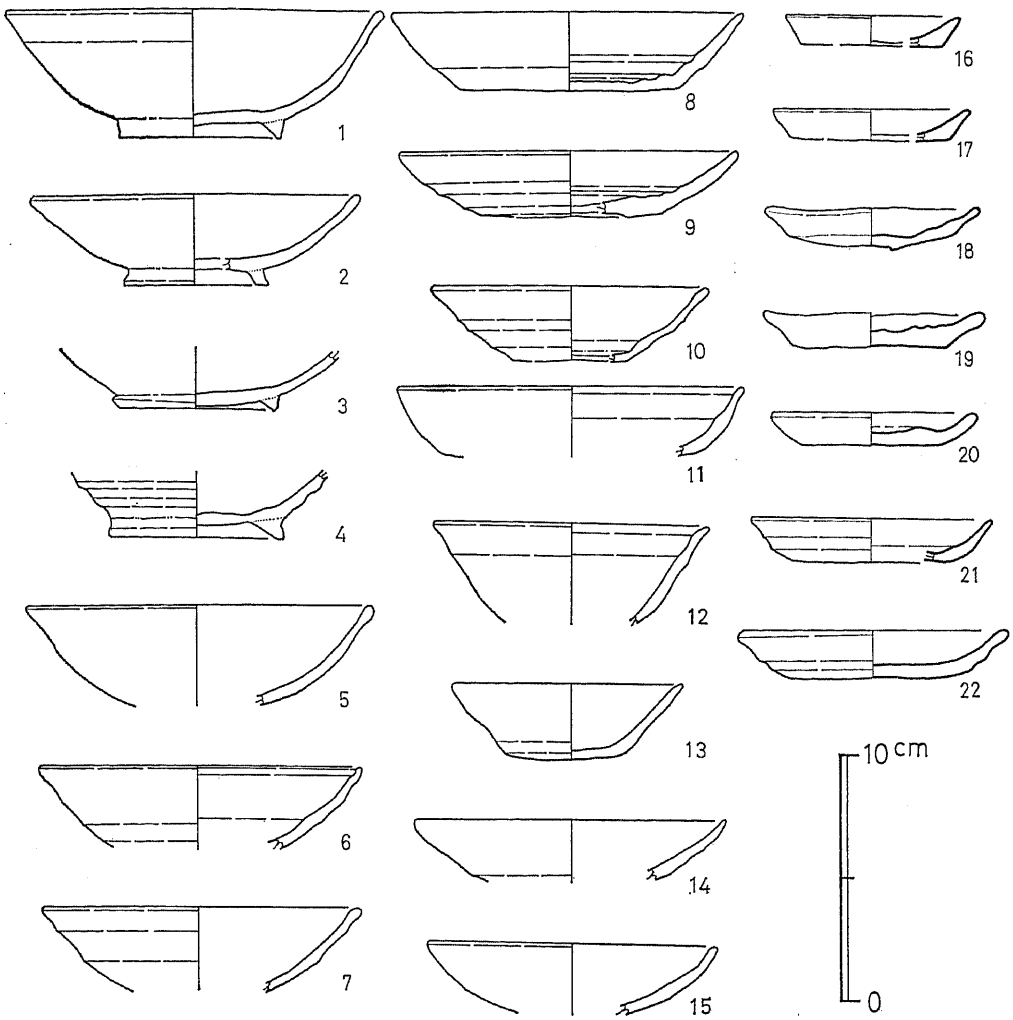
表78　三蔵畑遺跡出土土師器片一覧

（単位cm）

土器番号	器形	口縁径	基底径	器高	色調	胎土	焼成	備考
1	坏	16.3	6.6	5.1	灰白色	細砂を少量含む	軟質	貼りつけ高台
2	〃	13.3	5.9	3.6	暗茶褐色	砂礫を含む	やや軟質	貼りつけ高台
3	〃	?	6.7	?	白桃色	細砂を少量含む	軟質	貼りつけ高台
4	〃	?	7.2	?	黄褐色	砂粒を含む	やや軟質	貼りつけ高台
5	〃	14.1	?	?	灰褐色	砂礫を多く含む	普通	
6	〃	13.3	?	?	紅色	細砂を少量含む	普通	丹塗土器？
7	〃	13.0	?	?	黄褐色	砂礫を含む	やや軟質	
8	〃	14.2	8.2	3.1	黄褐色	砂粒をかなり含む	普通	底面へらおこし
9	〃	13.9	5.0	2.7	黄褐色	砂粒を含む	やや軟質	底面へらおこし
10	〃	11.3	4.5	3.0	黄褐色	細砂を少量含む	普通	灯明芯油痕有り
11	〃	14.1	?	?	赤褐色	砂粒を含む	やや軟質	
12	〃	11.2	?	?	黄褐色	砂粒を少量含む	軟質	内面煤付着
13	〃	9.4	3.1	3.0	赤褐色	砂粒を含む	普通	
14	〃	12.7	?	?	黄褐色	砂粒を多く含む	普通	
15	〃	11.8	?	?	灰褐色	砂粒を多量に含む	やや軟質	灯明芯油痕有り
16	皿	7.1	5.7	1.2	灰褐色	細砂を含む	普通	底面へらおこし
17	〃	9.2	6.5	1.3	白桃色	砂礫を含む	普通	
18	〃	9.0	—	1.5	灰褐色	細砂を少量含む	普通	底部へらきり
19	〃	9.3	5.5	1.4	黄褐色	砂粒を含む	普通	煤付着
20	〃	8.6	6.0	1.3	灰褐色	細砂を含む	やや堅緻	
21	〃	10.1	6.0	1.8	黄褐色	細砂を少量含む	普通	灯明芯油痕有り
22	〃	11.2	6.4	1.9	灰褐色	細砂を多量含む	やや軟質	底部へら切り
23	〃	9.2	5.9	1.4	黄褐色	砂粒を含む	普通	
24	〃	6.7	—	1.4	黄褐色	砂粒を多量含む	普通	丸底

2.　皿（図181—(16)〜(22)）

約20個体分を検出したが，いずれも灯明皿状の浅いつくりである。底面はへらおこしまたはへらおこし後のへら切りが行なわれ，器表は内外面もなで調整が施されている。(16)(17)第２ピット付近出土。(18)〜(20)建物遺構面出土，時計廻りのロクロを使用，(19)の内面に煤が付着し灯明皿としての使用を思わせる。(21)第２ピット付近出土，内面３か所に灯明芯油痕と煤が付着する。(22)(23)西北丘麓出



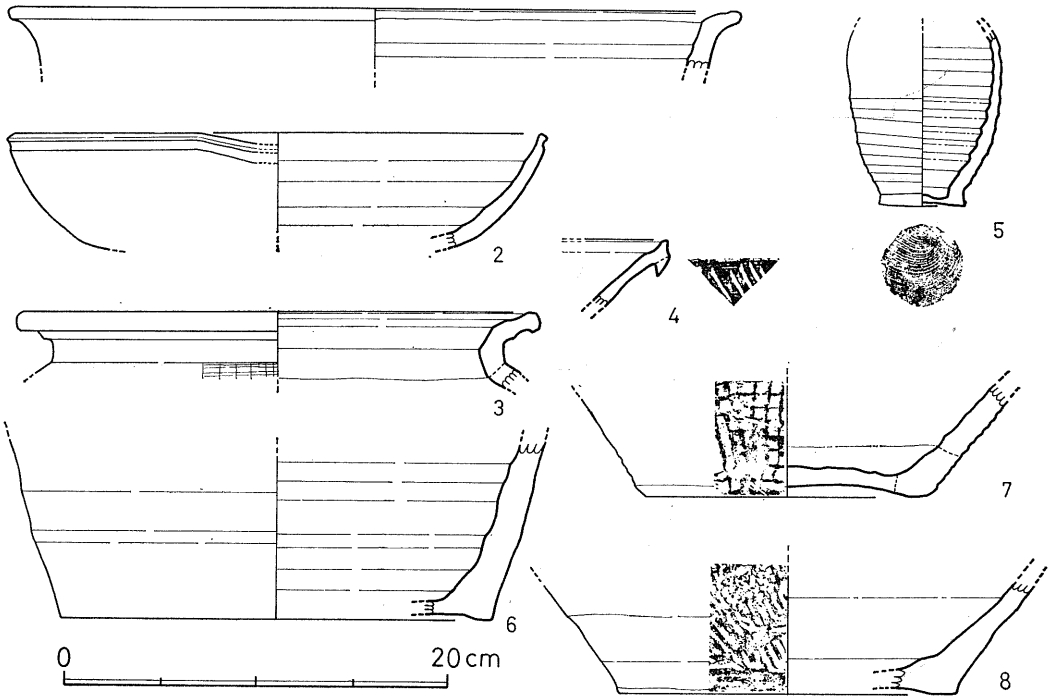
第181図　三蔵畑遺跡出土土師器実測図(4)

土。(24)建物遺構面出土，小形丸底内面に螺旋状凹線が認められ，煤が厚く付着している。

第6節　須恵器・須恵質土器

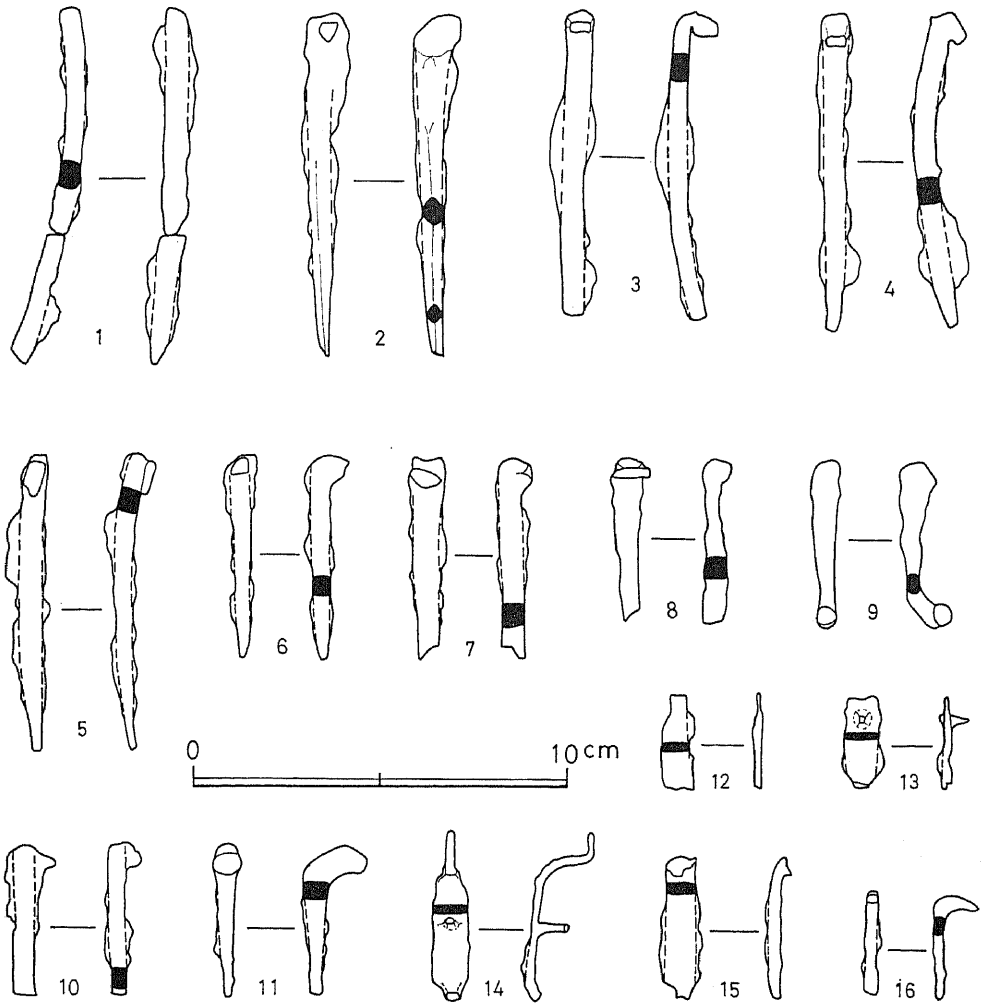
今次発掘調査区から若干数ではあるが，須恵器および須恵質土器片を遊離検出した（図182・図版102）。その大部分は西北丘麓部の畑地開墾撹乱層からの，蔵骨器を思わせる壺類の小断片であるが，そのうち数片は建物遺構および古窯址等の所在する丘陵削平整地面からも出土している。これらの須恵器片は第182図に示した(5)の小壺と(2)の片口片の他は，いずれも比較的大形の平底の壺または甕の破片である。ここでは実測可能のいくつかを図示し概述することとする。

(1)は建物遺構面出土の口縁部径38.2cmと大形土器口縁部片である。口縁部が逆ハの字形に外反しているが小破片のため器形は不詳である。現存部形状では胎土に砂礫を多く含み，焼成は堅緻で灰



第182図　三蔵畑遺跡出土須恵器実測図

白色を呈する。口縁部はロクロ使用の水引きが施されている。(2)灰原出土の片口をもつ椀状土器である。胎土に細砂を含み焼成は堅緻で白黄色を呈する。ロクロ使用による水引き調整が施され，口縁外表に一条の凹線を繞らせている。口縁部１か所に巾7.5㎝，深さ0.7㎝のカーブの緩やかな片口を設けている。推定口縁径28.2㎝，同器高6.5㎝を測る。(3)西北丘麓部出土の壺口縁部片である。推定口縁部径27.2㎝，同頸部径23.3㎝を測る。胎土に微砂を含む程度で焼成は堅緻，色調は淡灰色を呈する。内面横なで調整，外面は格子叩き目を横なでで消している。(4)建物遺構面出土の口縁部小断片である。口径は小片のため不詳，微砂を僅か含み焼成は堅緻で灰色を呈する。口縁部の下方拡張は貼り付け，外面凹線は刷毛目の後へら状工具で施したものである。(5)第２ピット付近出土の小坩である。胎土に細砂を僅か含む焼成は普通で淡灰白色を呈する。時計廻りのロクロによる水引き仕あげで，螺旋状の指圧凹線が顕著で，底面は糸切り底である。底面径 4.5㎝，現存器高９㎝を測る。(6)西北丘麓部出土の壺基底片である。胎土に砂礫を含み焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。ロクロ使用の水引き調整され,内面に指圧凹痕を顕著に残す。底面は上げ底となり板痕をみせる。底面径22.6㎝測る。(7)建物遺構面出土，胎土に小石を含み焼成は堅緻で淡灰白色を呈する。外面は格子目叩き，内面は横なで調整が施され,底面はあげ底となり周囲の縁部に小石が多く付着している。底面径14.7㎝を測る。(8)灰原出土，胎土に砂粒を多く含み焼成はやや軟質で黄灰色を呈す。内面は横なで外面は叩目およびへら削り調整が施されているが，整形はやや雑なつくりでである。推定底面径17.8㎝を測る。



第183図　三蔵畑遺跡出土鉄器実測図

第7節　鉄　釘　等

鉄釘および使途不明の小鉄器片約20個体分ほどを遊離検出した（図183・図版102）。灰原出土の棒状鉄器1片(1)のほかはすべて西北丘麓部の発見である。(1)は現存長9.5cm，断面0.6cm×0.7cmの長方形を示す棒鉄であるが，銹化折損していて原況は不詳である。(2)～(8)は完形を保つもので長さ5.5cm～9cmの，頭部を一方へ押し広げた角釘である。(9)～(11)は細い角棒状の小鉄器片，(12)～(16)扁平な平鉄に細い棒鉄のつく使途不明の小鉄器片である。

第5章　遺　跡　の　年　代

本遺跡が土師器土鍋類を主体として操業した時期については，窯体床面に密着して検出された遺物がその下限を物語っている。しかし，本遺跡の場合，窯体および灰原出土の土器片や，当時の生活面から遊離検出の瓦器，土師器片など，いずれも時代差を表すほどの形式変化を示さない。また

当該地の遺跡規模も小さく，流動し易い地質にもかかわらず生活面の堆積層が薄く荒れていないことなどから，操業期間はある時期を限っての比較的短期間であったと考えられる。

出土遺物等の編年観や，さらには残留地磁気の測定結果等を参考として，本古窯址の終期を推察すると，鎌倉時代初頭と比定できる。したがって本遺跡の活用された年代は鎌倉時代初頭を盛期として，さかのぼってもせいぜい平安時代末葉までと推察される。

第6章　ま　と　め

1.　本遺跡は埋積平地の一角に張り出した丘陵群内の，谷水田に面した小支谷丘麓部に営なまれた，土師器土鍋類を主体として生産した小規模な古窯址である。

2.　古窯址は，谷懐状小支谷の丘麓部を谷口から谷頭にかけて，丘陵斜面を等高線走向に沿って棚田状に削平整地した，巾約5 m，長さ約20mの平坦面に形成されている。

3.　当該地は周囲を丘陵群に取り囲まれ，眼前には水量豊かな谷水田を控え，谷底部には層は薄いが良質の粘土堆積層が認められる。また広々とした埋積平地までの距離約600 m，比高約20mと足がかりも便利である。したがって，土器生産の立地としては，原材料，燃料，水利等に恵まれた好適地である。

4.　この削平整地面には，平窯1基を中心にした灰原の広がりと，作業小屋を想起させる掘立柱建物，暗渠排水および自然排水の両排水施設を備えた水漕状ピット，その他ピット2など，土器生産工房に関連する遺構がまとまりをもって，セットとして検出され注目される。

5.　生産された土器類は，そのほとんどが土師器土鍋類である。窯体は巾0.6m，長さ約1.2mの平面がU字形を呈する小規模な平窯である。天井部および焚口等はすでに崩落していたが，窯体基礎部の遺存は良好で，その構造の一端を明らかにすることができるとともに，壁体の残留地磁気測定について，福井大学広岡公夫助教授の協力をいただいて，その測定結果を資料として加えることができた。

6.　本遺跡の各遺構群，特に建物遺構面を中心に，実際に煮炊きに供した土鍋類をはじめ，日常汁器の瓦器・土師器類や灯明皿等が検出され，当生産址従事者の生活の一端を伺い知ることができ興味深かった。

7.　本遺跡の規模および灰原堆積層の量などからみて量産は難かしく，また期間的にもさして長期間活用されていないところから，ある一定の期間を限っての，当地域における自絵自足的な生産址と推察される。

8.　本遺跡の各遺構形態および出土遺物の編年観，さらには窯壁体の残留地磁気測定結果等から，本遺跡の時期は鎌倉時代初頭を中心とした時代の所産と考えられる。

註

1)　神原英朗「用木古墳群」本調査概報第1集，山陽町教育委員会，1975年。

2)　葛原克人他「二子御堂奥古窯址群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集，岡山県教育委員会　1974年。

3)　報告書未完，本調査概報第4集に収録の予定。

4)　神原英朗「岩田土壙墓群」　本書所収

5)　池畑耕一他「門前池遺跡」　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第9集，岡山県教育委員会　1975年。

6)　註2に同じ。

三蔵畑遺跡土師器窯の考古地磁気測定

福井大学教育学部

広岡　公夫・山本　芳夫*

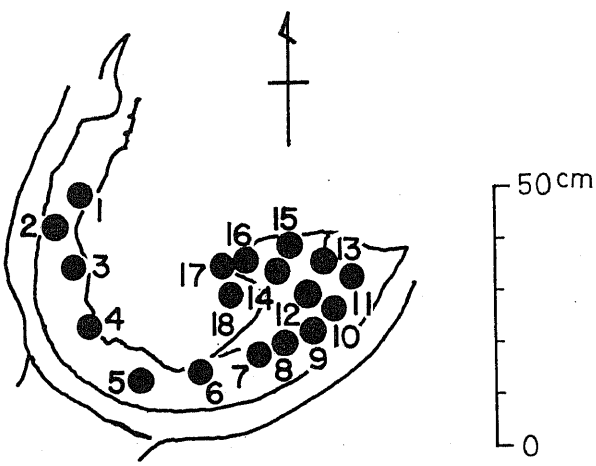
＜はじめに＞

地磁気の方向およびその強さは，時代とともに変化している。日本においては，過去2,000年間についての地磁気変化の様子が明らかになってきているが，[1),2),3),4)]このような過去における地球磁場の変化を調べるのが考古地磁気である。昔の地磁気を記録している焼土の磁化方向を測定し，その結果を知られている地磁気変化と比較することによって，その土の焼かれた時代を推定することも可能になってきた。すなわち，考古地磁気学的年代推定が行えるまでに過去の地磁気変化が明らかになってきたのである。しかし，まだその精度は十分なものであるとは言えないところがあり，そのため推定年代の誤差が大きくなることもある。より精度をあげるためには，今後の研究によらなければならない。時に，年代のよくわかった焼土の測定をして，地磁気永年変化の曲線のより確かなものを求めることが望ましい。

土に含まれる鉄酸化物は，熱せられた後，地球磁場が作用しているところで冷やされることになり，これらの鉱物は，その時の地磁気の方向に磁化を持つようになる。これを熱残留磁気と呼ぶ。また，熱せられた時に，水酸化鉄は脱水し，酸化物に変ることが多いので，鉄酸化物の量そのものも多くなり，それらも熱残留磁気をもつ。このようにして得られた熱残留磁気は安定で，再度熱せられることがなければ，一旦磁化した方向は容易には変らず現在まで保存されているのである。したがって，この磁化を測定することによって，過去の地磁気の方向を知ることができるのである。

＜熱残留磁気の測定結果＞

総数18個の熱土を測定試料（試料番号：ＨＯ１～18）として，本遺跡土師器窯体より採集した。試料の位置と番号を第 184図に示しておく。測定した焼土試料の磁化方向から，窯体の磁化方向を知るためには，試料が窯体内でどのような向きにあったかを記録しておかなければならない。そのために個々の試料の方位を測っておく。このような試料を定方位試料という。方位測定には磁針を用いているので，真北に対する方位を知るには真北と磁北のずれの角が必要となる。このずれの角は，トランシットを用いて太陽の方位観測から求める。太陽の方位は，時刻がわかれば天体位置表から計算によって求めら



第184図　三蔵畑遺跡土師窯址試料採取図

れる。野外（遺跡）で，トランシットを磁北に合せて，それからの太陽の方位角を読む。その値と計算から求めた方位角との差が真北と磁北のずれの角（偏角）を与える。

不幸にして，三蔵畑遺跡の試料採集の日は雨模様で太陽観測ができなかったので，先に，近くのさくら山遺跡の試料採集の時に得た値（D1974）を用いることにした。その値は，D1974＝6.85° Wである。これは太陽の方位観測をくり返し4回行なって，その平均値から得たものである。個々の試料の測定結果は表79のとおりである。

表79　三蔵畑遺跡土師窯址試料測定値一覧

試料番号	偏　角（°E）	伏　角（°）
HO　1	−1.8	57.9
2	−5.4	59.6
3	−5.4	61.7
4	−31.5	69.5
5	15.5	65.7
6	−10.2	55.0
7	4.5	62.2
8	−5.4	60.4
9	3.5	59.3
10	−5.2	57.2
11	−0.2	59.3
12	2.6	59.9
13	−5.0	57.9
14	16.7	60.6
15	−8.5	46.3
16	6.7	61.3
17	5.0	56.5
18	−0.9	53.2

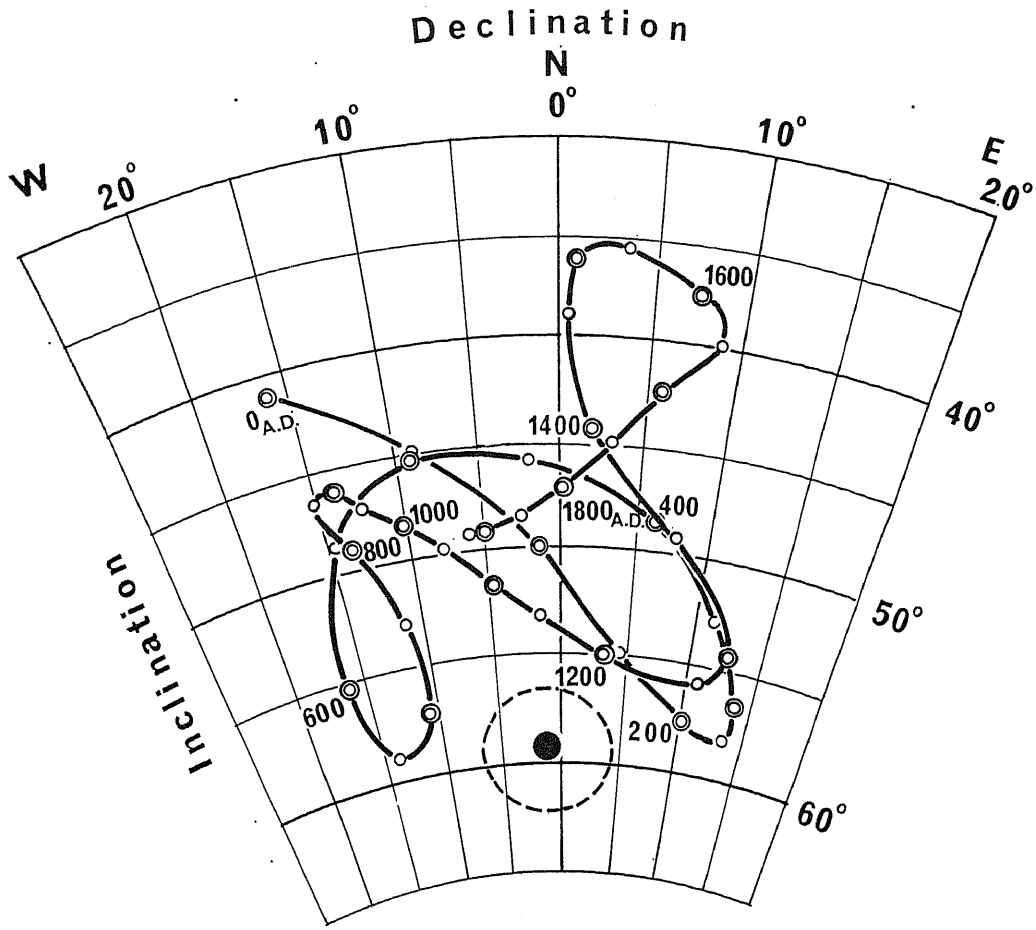
この結果を Fisherの統計法[5]，に従って平均値およびその信頼円の大きさを求めると，表80のようになる。信頼円（$\alpha 95$）は次式によって定義されている。

$$\mathrm{COS}\ \alpha 95 = 1 - \frac{N-R}{R}\left\{ 20^{\frac{1}{N-1}} - 1 \right\}$$

ここに，Nは統計計算に用いた試料の個数，Rはそれぞれの磁化方向を単位ベクトルとして，それらを加え合せた合成ベクトルの大きさを表す。この値は，求められた平均磁化方向が95％の確率

表80　三蔵畑遺跡土師窯址地磁気測定値

測定試料数（N）	偏　角（°E）	伏　角（°）	信　頼　円（°）（α95）
18	−1.3	59.4	2.96



第185図　西南日本における地磁気変化図

で存在する範囲を示す。言いかえれば，平均値が±α95を越えてはずれる確率は５％（20分の１）であることを意味しており，式の中にある20は1／(1/20)からくる。

＜考察＞

過去2000年間の西南日本の地磁気変化は第 185図に示されている通りである[3]。すなわち，５世紀から12世紀までは，偏角は西偏し，その後西歴1800年までは東偏，それから後は再び西偏して現在に至っている。その振巾は約35°で，この間に，伏角は約500年前後の周期で増減している。第85図の２重丸は50年毎の偏角，伏角の値を示し，三蔵畑土師窯の測定結果は黒丸，そのα95の範囲は破線の楕円で示されている。

本窯の考古地磁気学的推定年代は，図の地磁気永年変化曲線に最も近い時期，すなわち，1150～1220年A.Dか，あるいは650～720年A.Dの可能性が考えられる。このどちらかの時代であろうがより近い1150～1220年が適当なようである。

＜参考文献＞

1). Watanabe, N.(1959), The direction of remanent magnetism of baked earth and its application to chronology for anthropology and arhaeology in Japan; an introduction to geomagnetochronology; J. Fac. Sci. Univ. Tokyo, sect. V, 2, 1-188.

2). Kawai, N., K. Hirooka, S. Sasajima, K. Yasukawa, H. Ito and S. Kume (1965), Archaeomagnetic studies in southwestern Japan. Ann. G'eophys., 21, 574-578.

3). Hirooka, K. (1971), Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan., Mem. Fac. Sci., kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.

4). 広岡公夫(1972). 西南日本の地磁気永年変化，海洋科学，4,555—563,

5). Fisher, R. A. (1953), Dispersion on a Sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

＊ 山本芳夫は現在，石川県加賀市立作見小学校勤務。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事
業用地内埋蔵文化財発掘調査概報

第 6 集

昭和51年3月31日発行

発 行 山陽町教育委員会
岡山県赤磐郡山陽町下市337

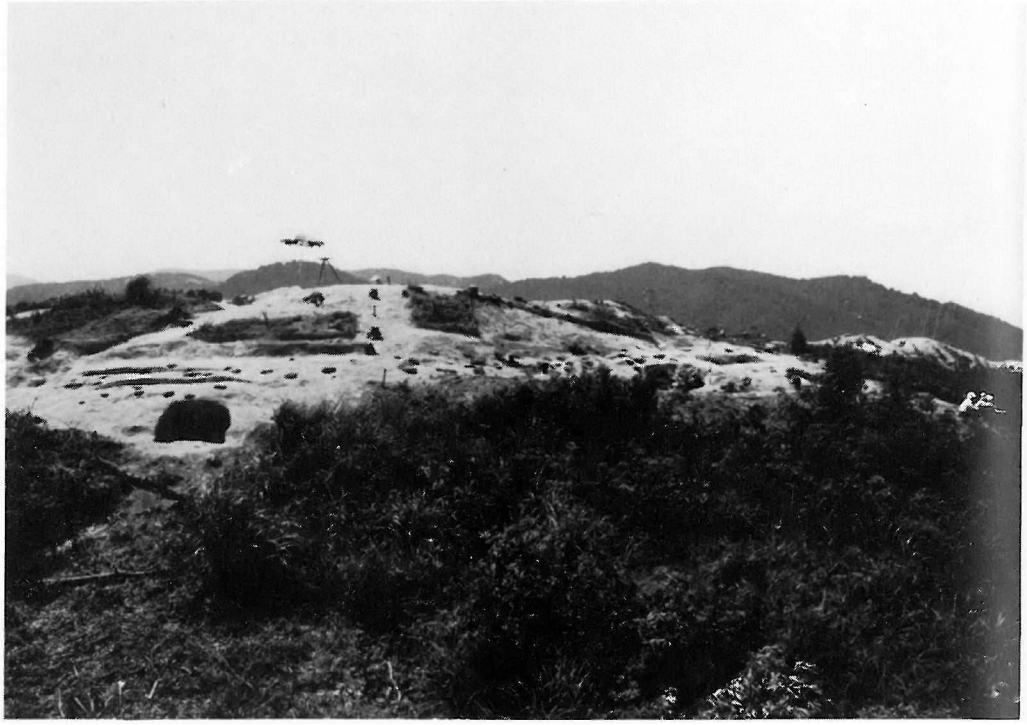
印 刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651

図　　版

１．岩田第１号墳所在丘陵遠景（北東から）

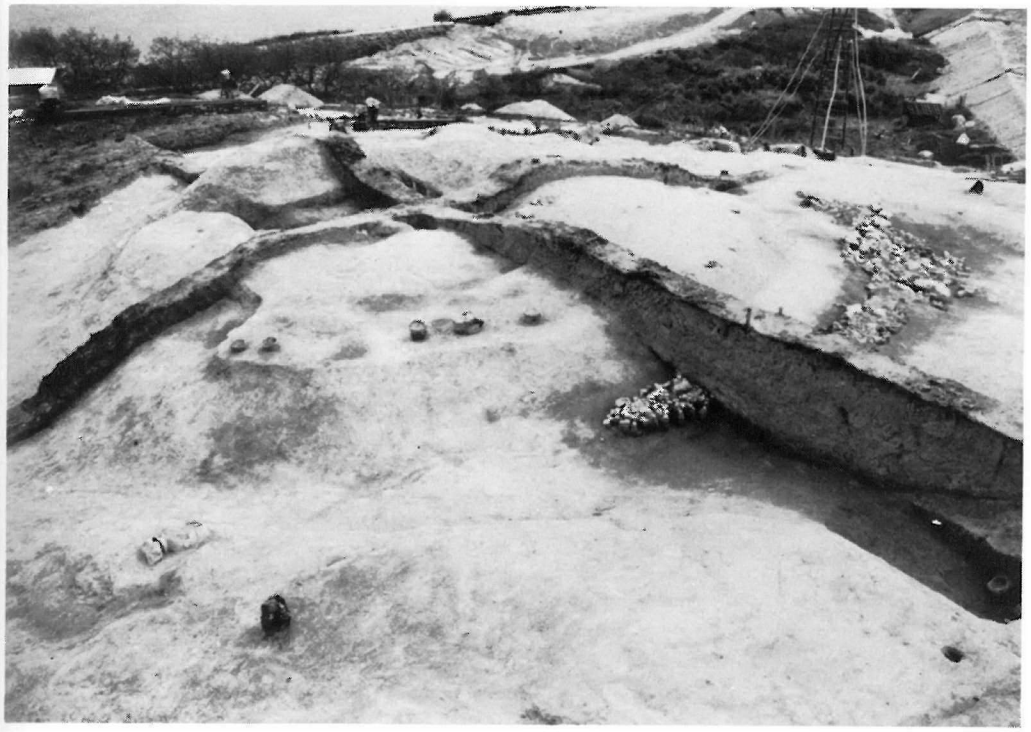
２．岩田第１号墳調査前外観（西から）

図版２



１．岩田第１号墳調査後外観（東から）

２．岩田第１号墳調査後外観（南西から）

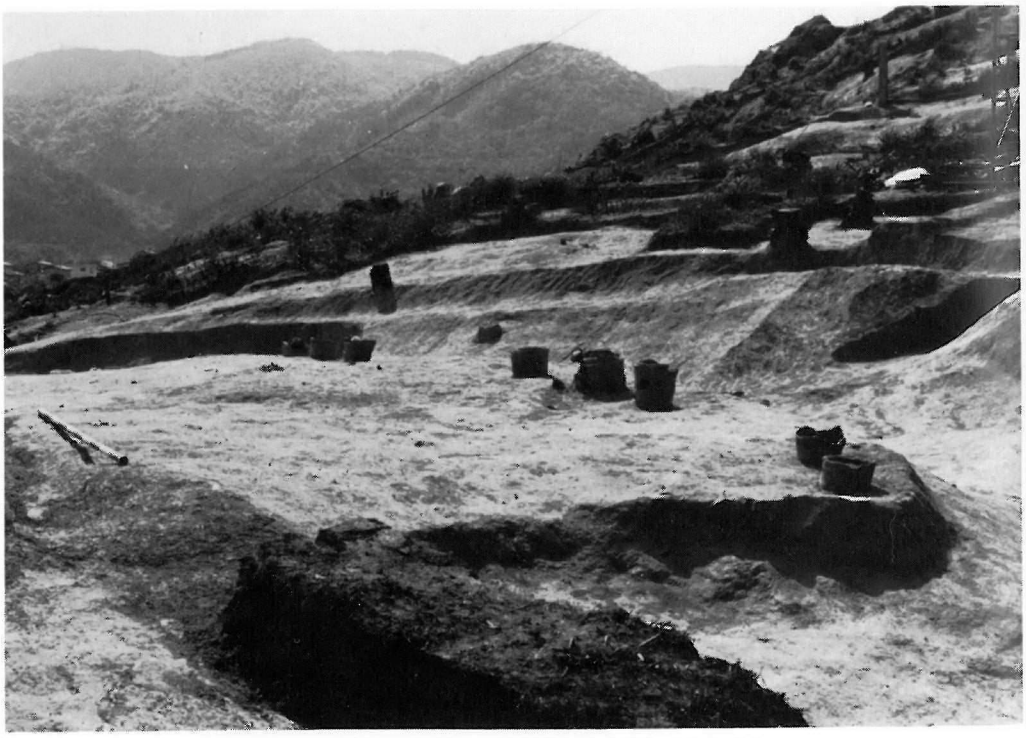


1．岩田第1号墳調査後全景（西から）

2．岩田第1号墳調査後全景（南西から）

図版４

１．岩田第１号墳周濠および埴輪出土状況（北東から）

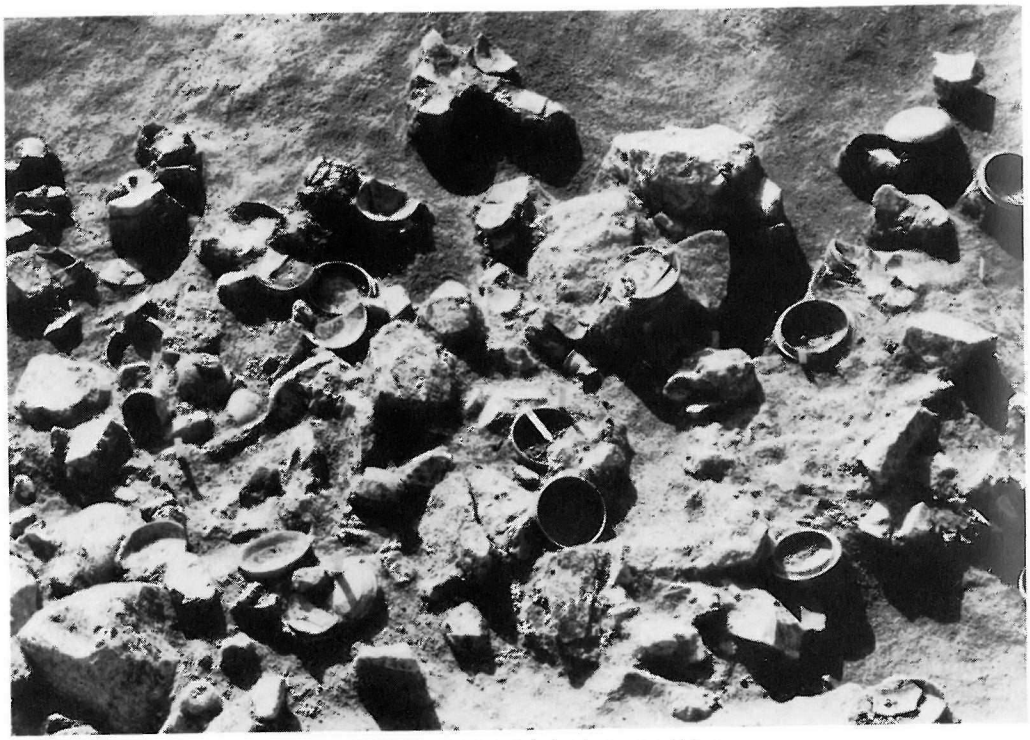


２．岩田第１号墳円筒埴輪出土状況（東から）

１．岩田第１号墳円筒埴輪列出土状況（西から）

２．岩田第１号墳第３埴輪出土状況

図版6



1．岩田第1号墳周湟底遺物出土状況

2．岩田第1号墳周湟底円筒埴輪片出土状況

１．岩田第１号墳周濠底金環出土状況

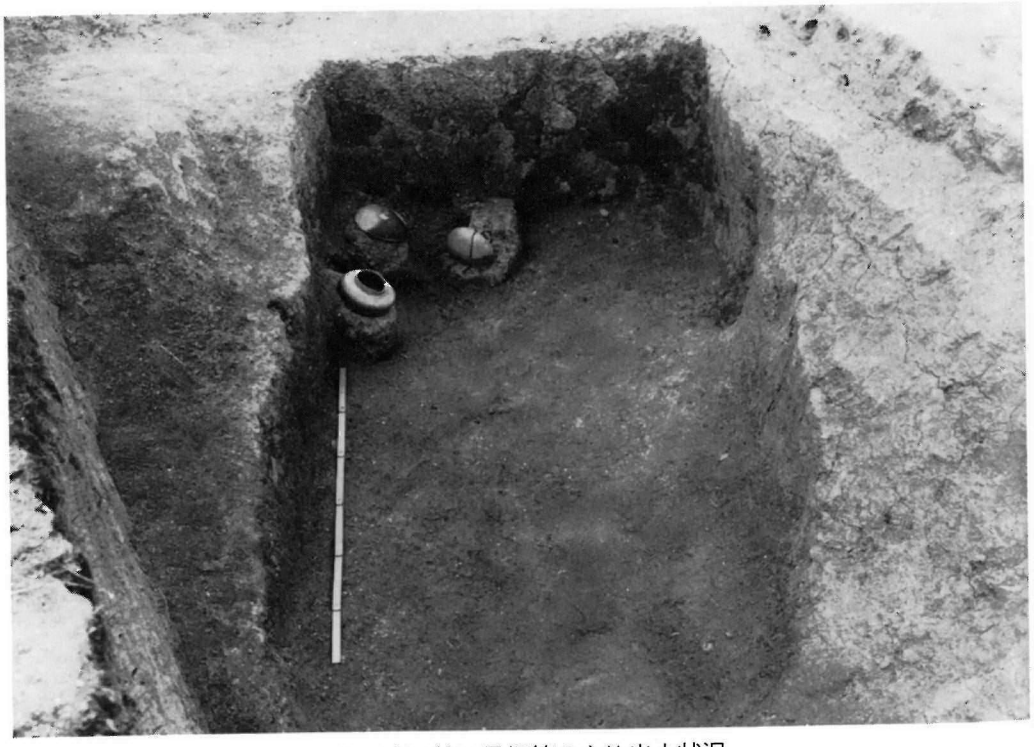
２．岩田第１号墳周濠底鏡片出土状況

３．岩田第１号墳装飾須恵器片出土状況

４．岩田第１号墳第４主体刀出土状況

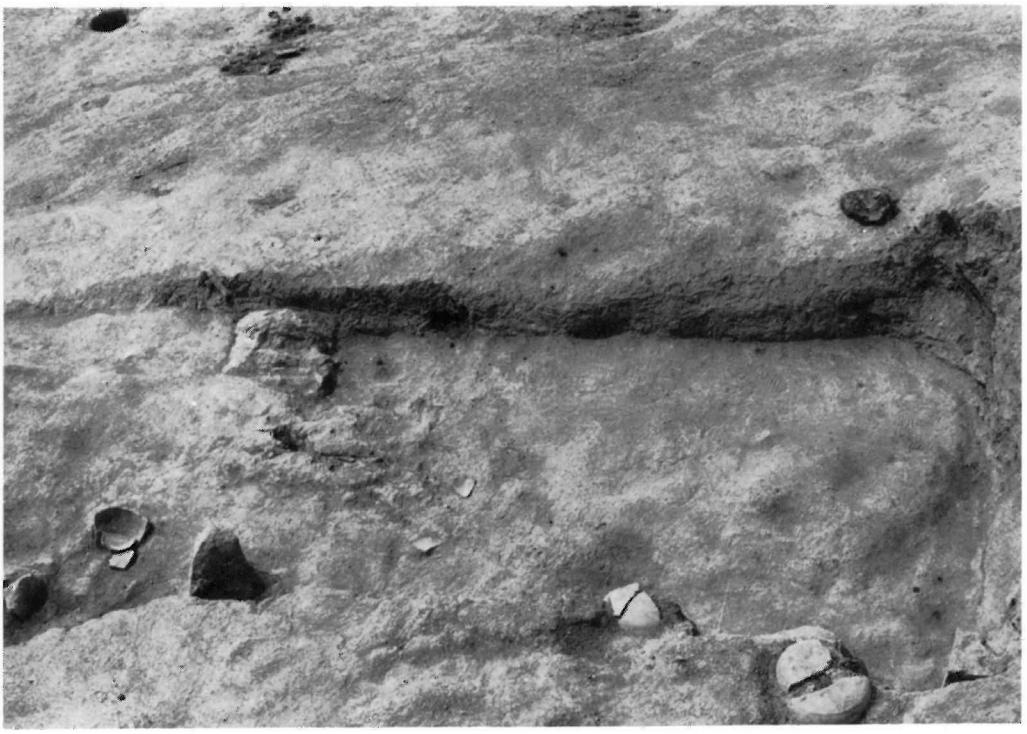
図版８

１．岩田第１号墳第１主体出土状況



２．岩田第１号墳第２主体出土状況

１．岩田第１号墳第３主体出土状況（南東から）



２．岩田第１号墳第４主体出土状況（北から）

図版10

1．岩田第１号墳墳丘断面および第５主体出土状況（南西から）

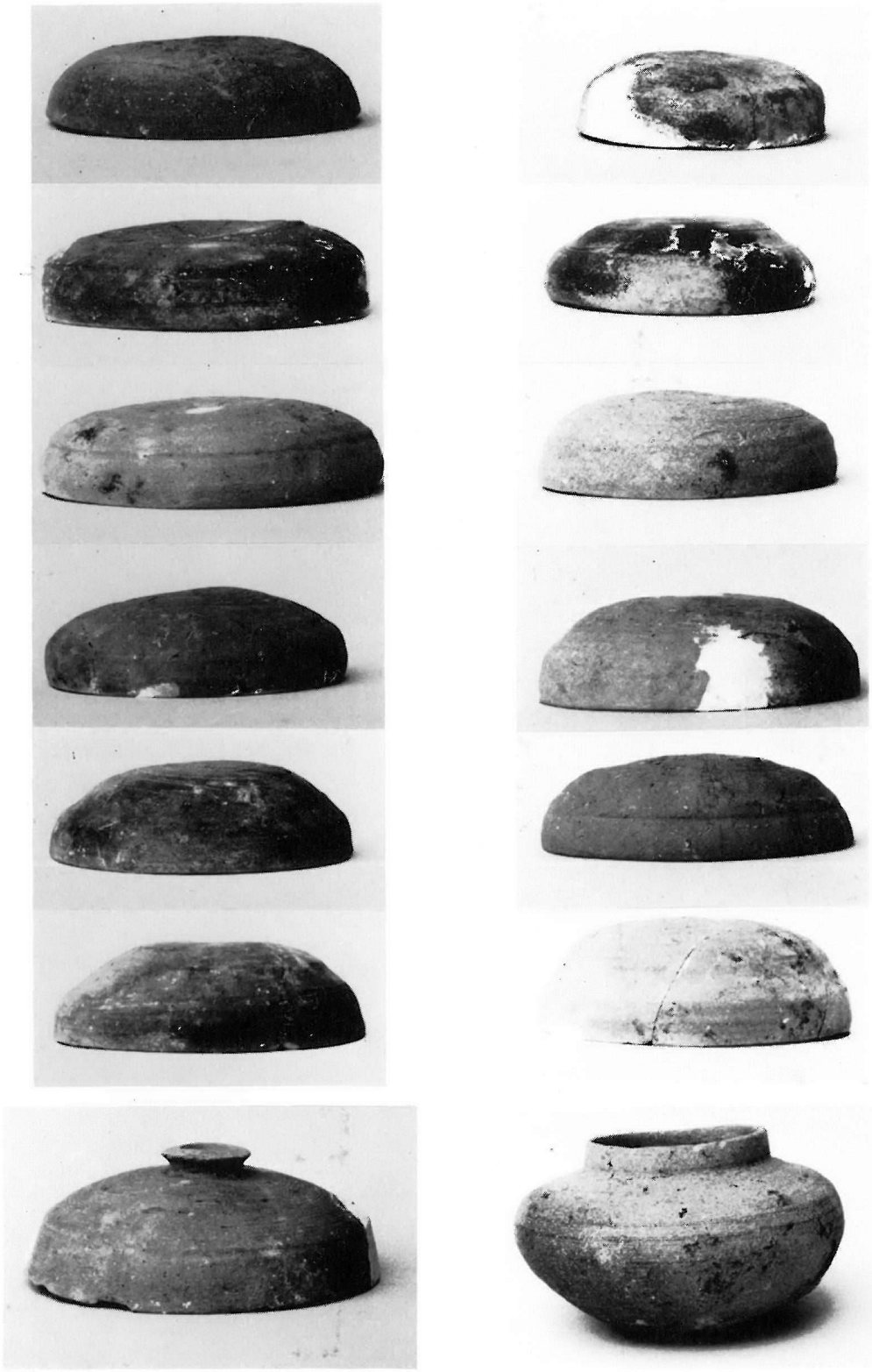
2．岩田第１号墳第５主体出土状況（北から）

1．岩田第１号墳第２主体出土土器
(約$\frac{1}{3}$大)

2．岩田第１号墳第４主体出土土器
(約$\frac{1}{3}$大)

3．岩田第１号墳周湟出土須恵器高坏（約$\frac{1}{3}$大）

図版12

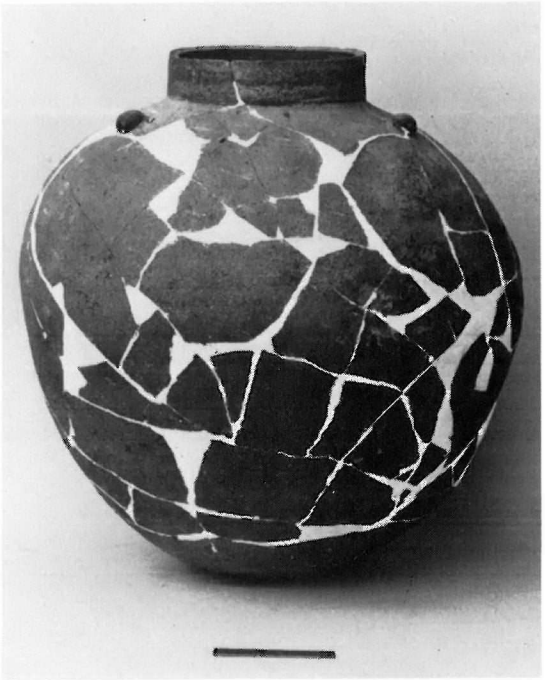


岩田第１号墳周湟 出土須恵器（約$\frac{1}{3}$大）

岩田第１号墳周濠出土須恵器坏（約$\frac{1}{3}$大）

図版14

1．岩田第１号墳周濠内出土装飾付須恵器

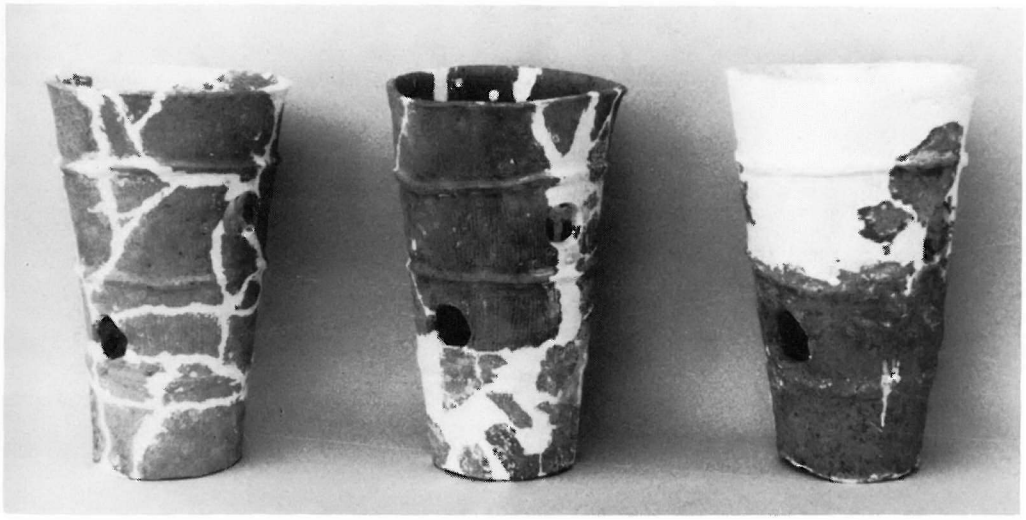


2．岩田第１号墳墳丘内出土大壷

3．岩田第１号墳第３主体大壷

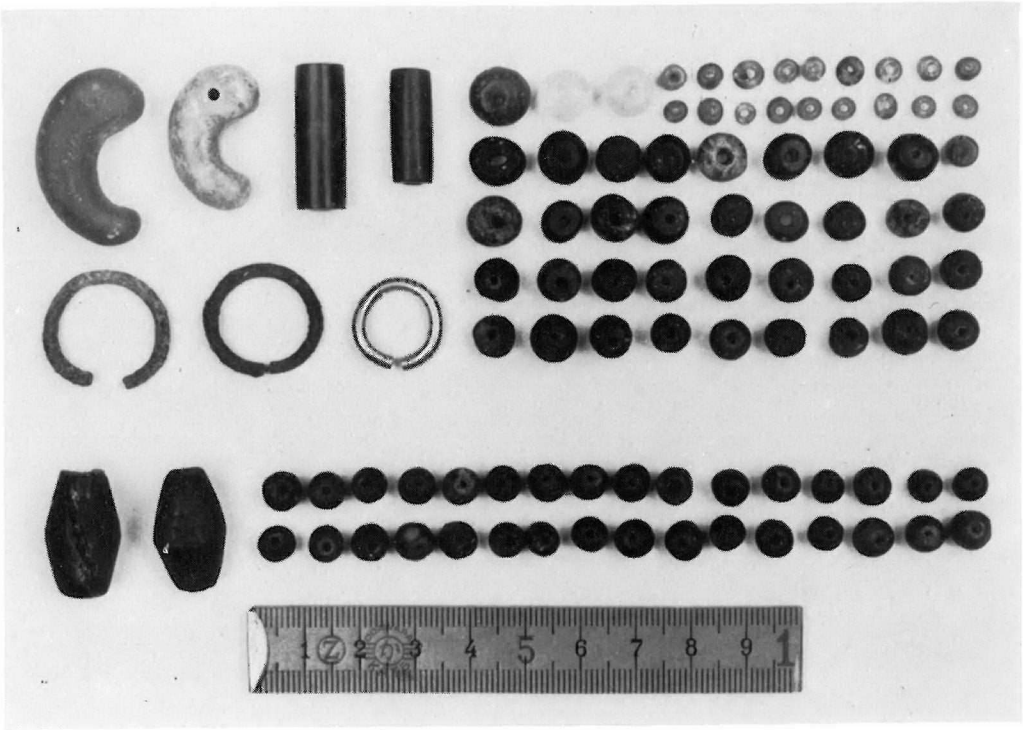
1．岩田第１号墳周濠出土人物埴輪

2．岩田第１号墳周濠出土動物埴輪

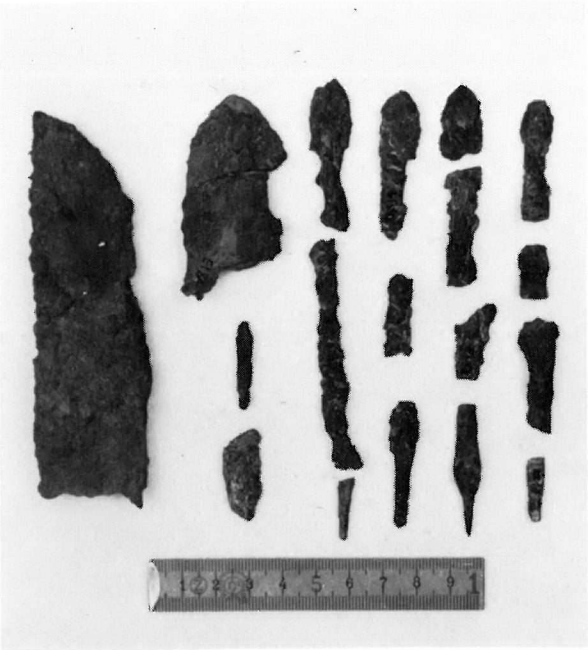


3．岩田第１号墳出土円筒埴輪

図版16

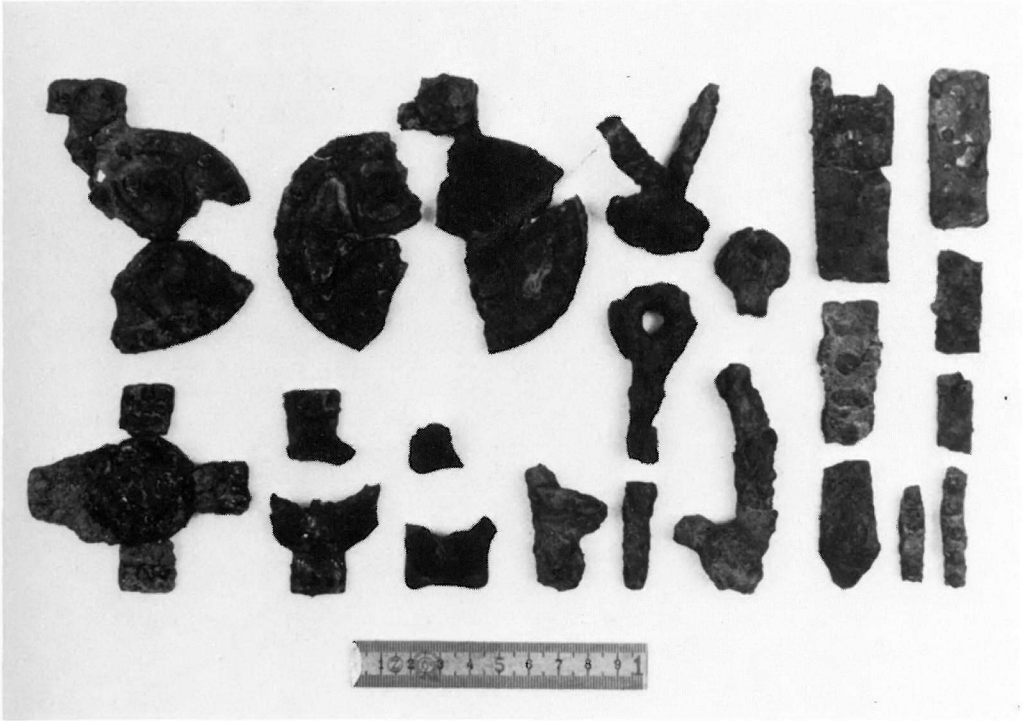


1．岩田第１号墳出土装身具類



2．岩田第１号墳第４主体出土鉄器

3．岩田第１号墳周濠出土銅鏡

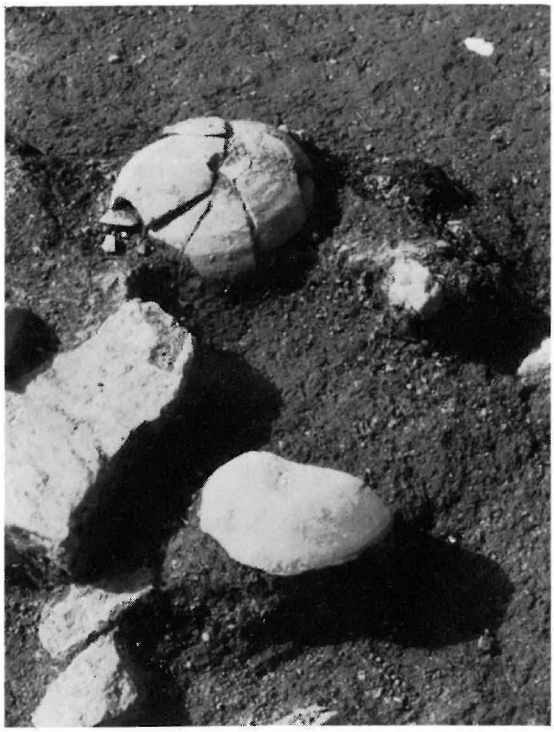


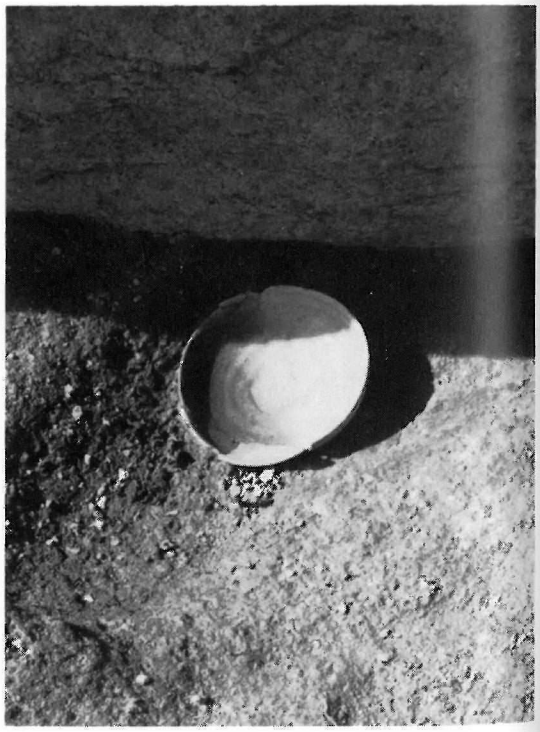
1．岩田第１号墳周湟 出土馬具類

2．岩田第１号墳周湟 出土鉄器類

図版18

1．岩田第６号墳石室出土状況

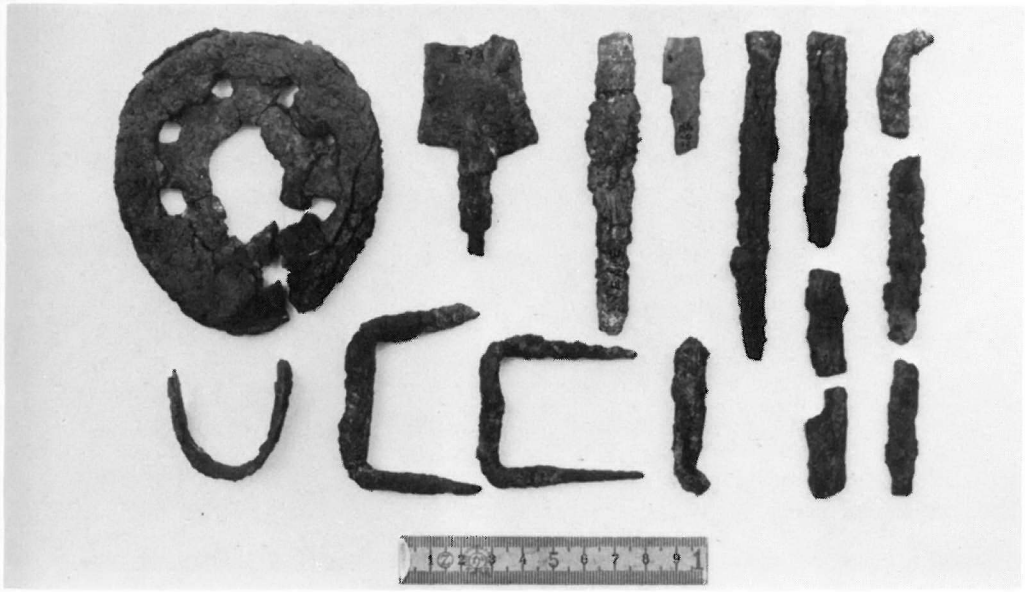




2．岩田第６号墳遺物出土状況

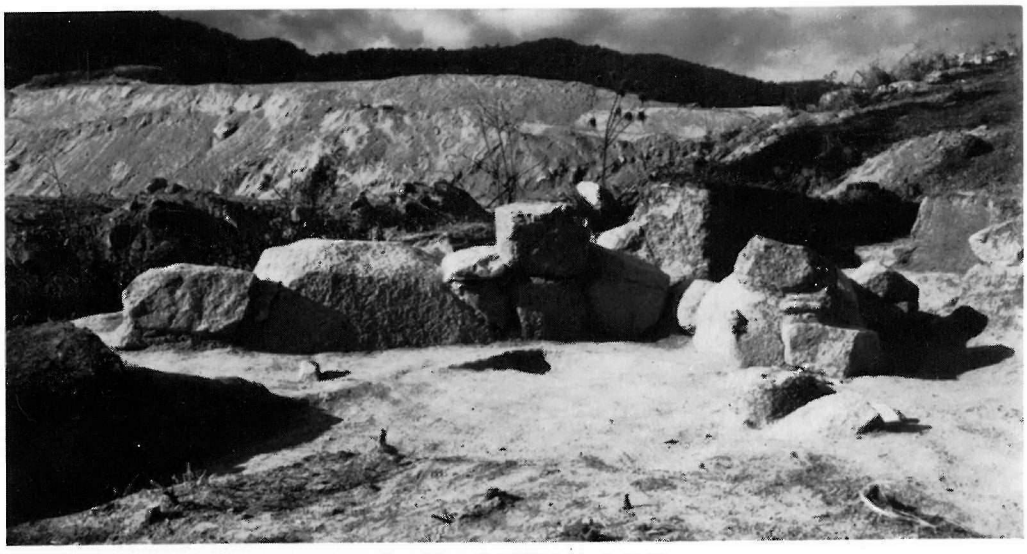
1．岩田第６号墳出土須恵器

2．岩田第６号墳出土装身具類



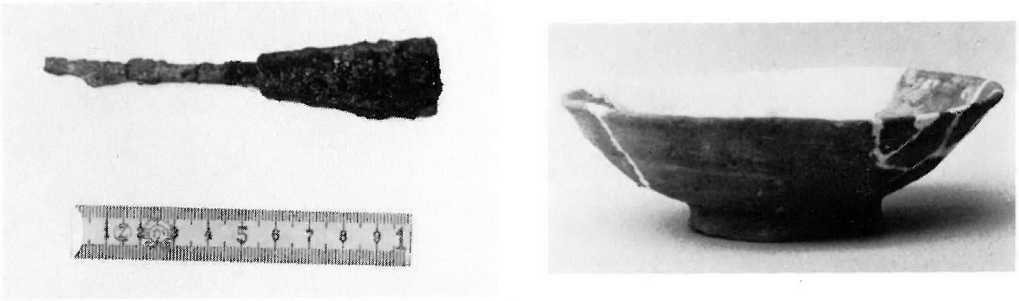
3．岩田第６号墳出土鉄器類

図版20



1．岩田第７号墳石室出土状況

2．岩田第７号墳遺物出土状況

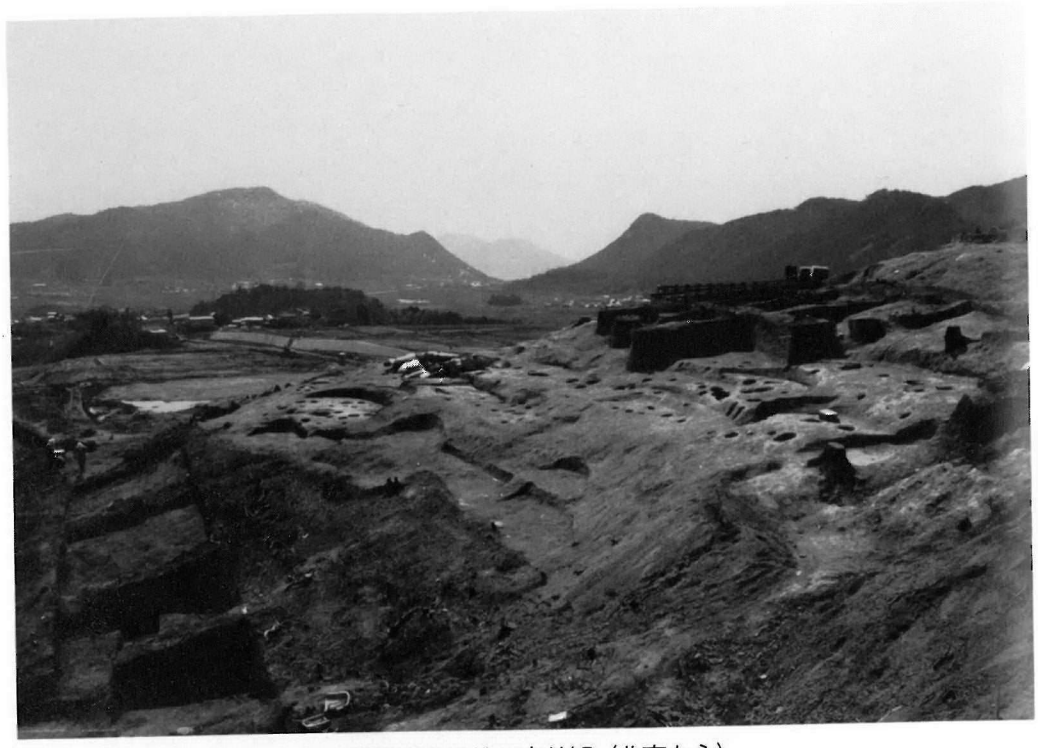


3．岩田第７号墳出土遺物

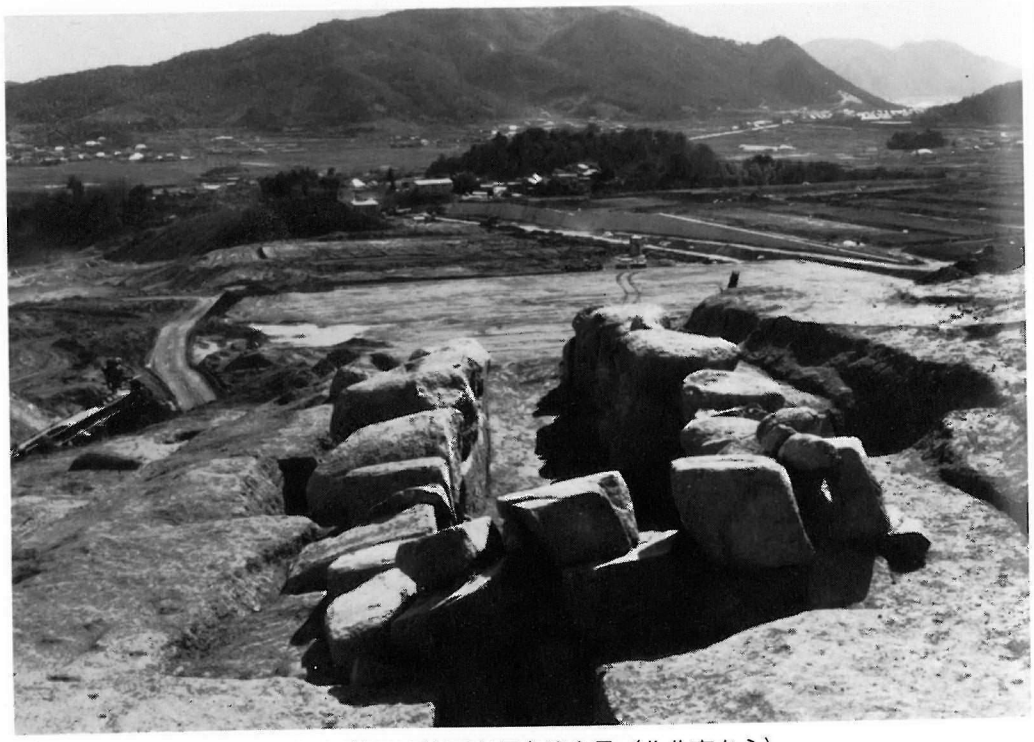
1．岩田第８号墳所在丘陵遠景（左崖縁）

2．岩田第８号墳近景（西から）

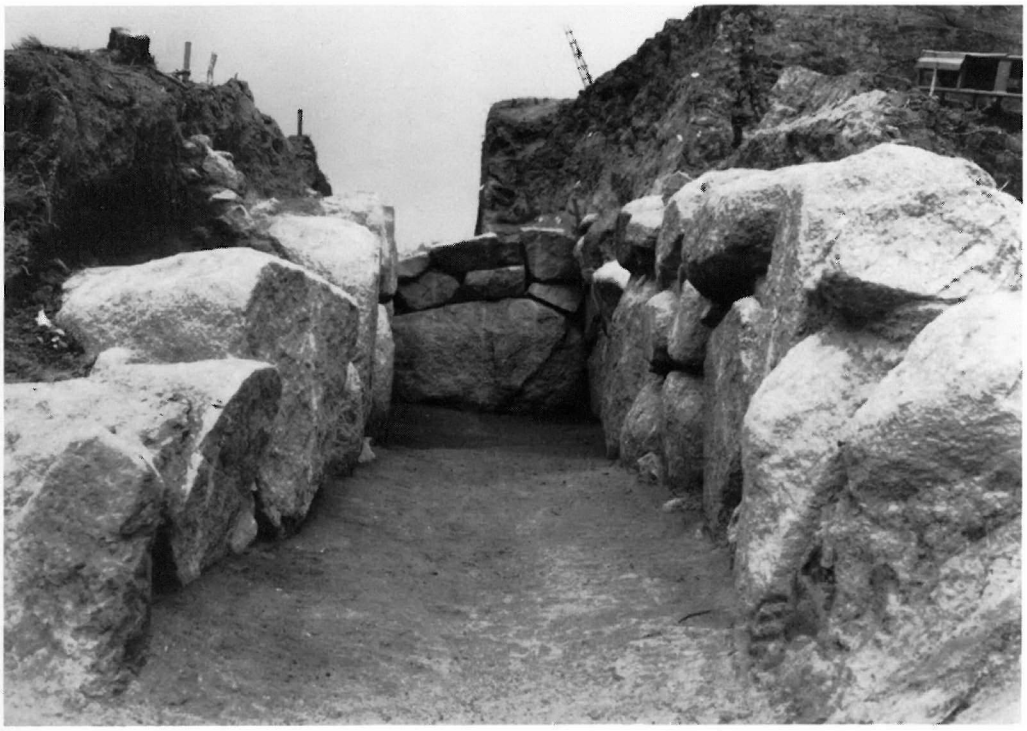
図版22



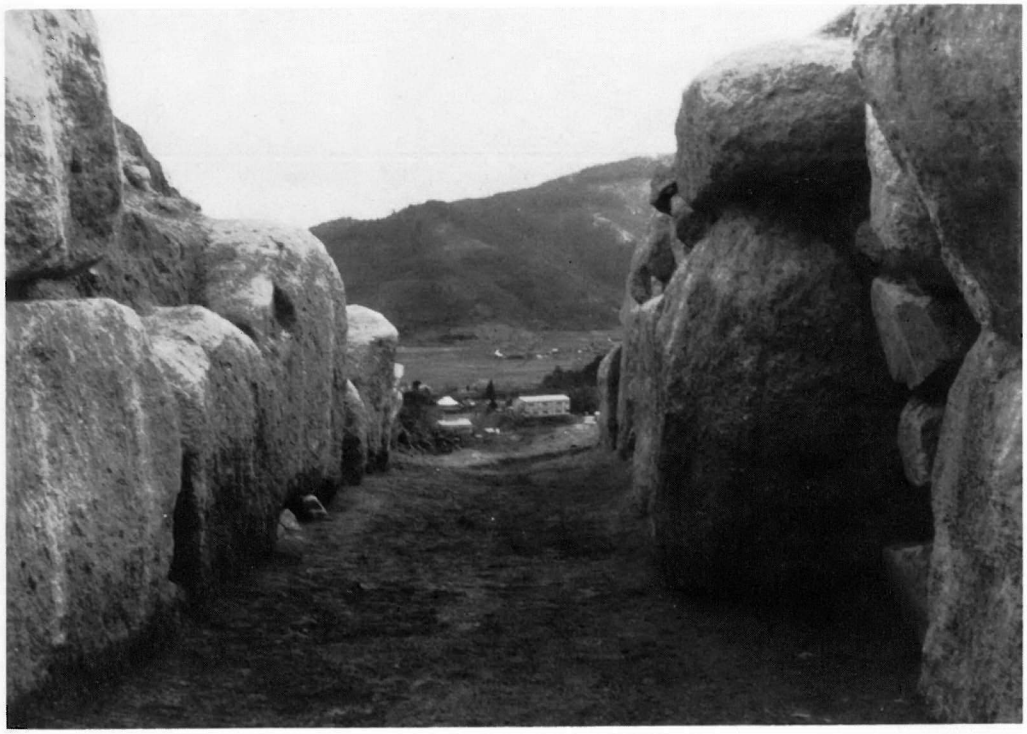
1．岩田第８号墳石室外観（北東から）



2．岩田第８号墳石室調査後全景（北北東から）

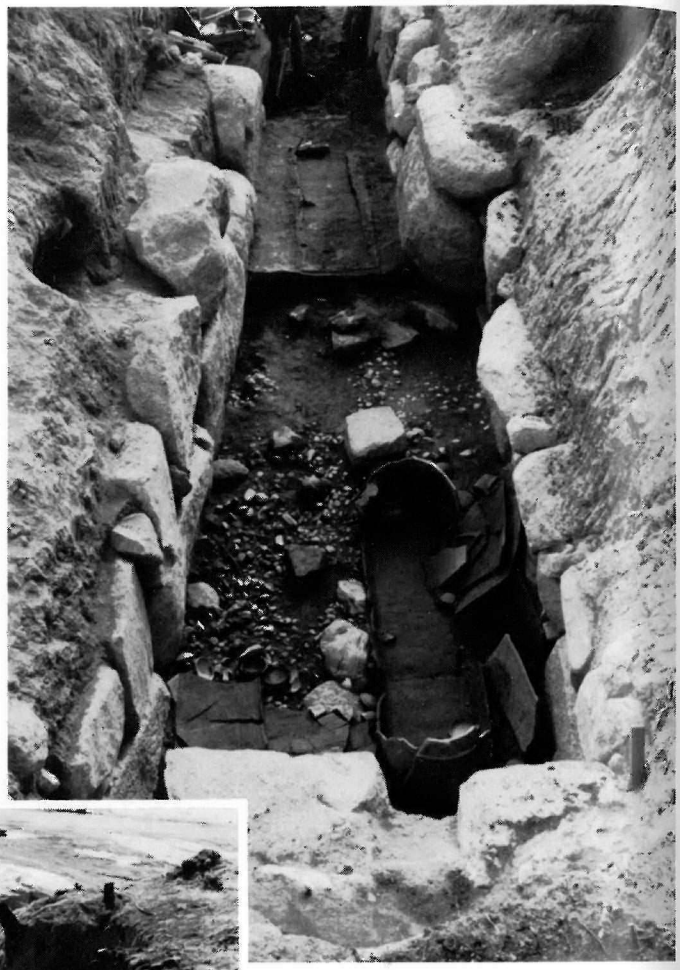


1．岩田第８号墳石室（羨道部から）



2．岩田第８号墳石室（奥壁から）

図版24



1. 岩田第8号墳石室内遺物出土状況

2. 岩田第8号墳調査後石室床面

1．岩田第８号墳玄室内遺物出土状況

2．岩田第８号墳玄室内遺物取り上げ後床面